日本建築協会



特集　現代の日本の空間、文化を探る

－見える和風、潜む和風－

建築と社会

Architecture and Society

2001 7 Jul.

「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円



1999年７月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正６年３月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人 日本建築協会
〒530-0001　大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL 06-6348-0635　FAX 06-6348-0634

頒　　価　１部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」

A4判・240頁・並製本

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壯一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　靜雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ

坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会

長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



「草創期の人々」より片岡安の項

会長就任ごあいさつ



金多　潔

このたび、市川宏前会長のご退任をうけ、その後任の大役をお引き受けすることになりました。平成６年４月のご就任以来約７年の長きにわたって、卓越せる識見と強力な指導力によって本会の発展のためにご尽力をいただいた前会長のあとだけに、責任の重大さに改めて身の縮まる思いをいたしております。

今さら申し上げるまでもなく、本会は大正６年３月に設立された国土交通省所管の最古の公益法人であり、長い歴史と伝統を誇り、これまでわが国建築界に数多くの輝かしい足跡を残しております。また、本会は大阪に本部をもち、建築に関係する各種の専門分野を集めた西の学会として、各部門の連繋と調整に当たり、相互の親睦と共存共栄に貢献することを活動の原点としてまいりました。

しかし、歴代会長をはじめとする役員、委員の方々のご尽力、会員の皆様のご支援にもかかわらず、本会の現状は必ずしも平穏とは申せません。かつて1970年の大阪万博に向かって盛り上がった個人会員数は、その幕引きとともに年を追って減少の道をたどりました。皆様のご協力のお陰でこの10年、ようやく横這いの状態が維持されているとはいえ、長らく続く厳しい景気不況のため本会の経営収支の悪化は深刻なものがあります。

これを打開する道は一にかかって会勢の拡大にあることは明らかと思われますが、このためにも、今私どもに与えられた使命は、魅力ある事業を企画することによって、新しい、とくに若い会員層の増加を積極的に図ることが肝要と考えております。

創立80周年を記念して出版された「日本建築協会80年史」や会誌「建築と社会」の飛躍的な充実等は、そうした憂慮すべき事態を打破するために、市川前会長のご指導によって行われた協会活性化の一端であり、大きな成果を収められたものであります。

更に、前会長は昨年度「協会21世紀を考える委員会」を設置され、その検討の結果が答申書としてまとめられました。今後はこの答申書に沿って、会勢の更なる拡大を図り、本会の活動をより魅力あるものとして、会員の皆様のご期待にお応えできるよう努力して参りたいと思っております。

副会長をはじめとする役員、委員の皆様、そして会員各位の一層のご理解とご支援を切にお願いする次第です。



作品募集

「建築と社会」平成13年11月号の

「第8回会員作品特集号“私の空間作法”」

「建築と社会」では、今年も11月号誌面で、広く会員の優れた作品をご紹介するため、ここ数年間に会員各位が設計された作品を掲載し、“私の空間作法”というタイトルで特集号を組むことにいたしました。

建築作品やランドスケープデザイン、インテリアデザイン等、建築に関係のあるものなら種別は問いませんので、下記要領に基づいて原稿資料をご送付下さるようご案内申し上げます。

この特集も今年で8回目を迎え、ますます充実した内容にするべく、みなさまからのふるってのご応募お待ちしております。

※

■ご用意願う原稿（提出資料）

1．写　真　外観、内部のプリント5～6枚程度（サイズはキャビネ判程度）
　全景からディテールにいたるまで幅広くご用意下さい。
2．概　要　作品名称、所在地、設計者、施工者名、建築面積、延床面積、構造規模、工期など。
3．説明文　設計上の特徴や苦心された点などについて300字以内にまとめて下さい。

■掲載に際しての補足

1．掲載料は無料です。但し、写真は原則として白黒とし、ご提出写真を掲載しますが、委員会の判断で一部カラー掲載をすることがありますのでご了承下さい。
　※写真の撮影者名は必ず付記願います。
　※写真に著作権等が生ずる場合は、応募者にて処理願います。
2．掲載作品数はご協力頂ける点数にもよりますが、原則として、1社（1人）1作品とします。
　また、8月末までに竣工予定作品で掲載ご希望の場合、写真等の原稿期日につきましてはご相談させていただきますので、一度ご連絡下さい。
3．建物の特徴や特殊な事柄については簡単な補足説明をお願いする場合がありますので、その折にはご協力下さるようお願いいたします。
4．作品の掲載順及び誌面レイアウトを含む特集全体の構成・選定は、委員会にて担当致します。また、応募作品多数の場合等は、編集上の都合により掲載できないこともありますのでご了承下さい。

■原稿期日及び送付先

1．期　日　**2001年8月17日（金）必着**
2．送付先　社団法人 日本建築協会編集委員会
　「会員作品特集号」係
　〒530-0001
　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　（大阪駅前第3ビル21階）
　TEL. 06-6348-0632　FAX. 06-6348-0634

青年技術者のみなさまへ

「建築と社会」平成13年12月号
「第48回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに47回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。48回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

なお、今回から応募提出規定を見直すべく検討中です。

応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成12年９月現在）までの青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。（すいせん用紙は事務局にご請求ください）
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の[illegible]る組織の上司か上長とする。すいせん者が学[illegible]合はこの限りでない。また本人が組[illegible]る場合は自せんとする。

3．応募者は、設[illegible]アを含む）、計画（都市計画など[illegible]、施工、その他の分野にあって、なしとげ[illegible]実績について、すいせんをうけ、下記の所要の資料を本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。

5．「青年技術者選考委員会」において選考されたものは「第47回青年技術者特集号」（平成12年12月号）に記載するとともに、記念品を贈呈する。

6．提出資料

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

A資料

A資料は、A3判用紙**6枚以内にまとめる。**

① 建築設計の場合
――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）
――上に準じた資料
③ 上記以外の分野の場合
――それぞれの分野にふさわしい資料

B資料

上記A資料の各実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、A資料中、本[illegible]に貢献した部分、または力量が活かされた[illegible]の詳細な説明、考え方および将来的[illegible]て、**1600字以内に平易簡明にまとめ**[illegible]に応じ、図・表を用いて差し支えな[illegible]募者・本人の執筆に限る。

■すい[illegible]

原則と[illegible]いせん者によるすいせんのことば（120字程度）を添付のこと。自せんの場合は不要。

※「青年技術者選考委員会」において選考し、採択されたものについては、後日、本人の写真、青年技術者としてのことば（青年技術者としての抱負、考え方、信念、建築観等々を、400字程度で執筆）の提出をお願いすることにします。

7．**提出期限**　平成12年９月11日（月）

8．**提出先**　日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒530-0001　大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第３ビル21階
電話 06-6348-0635　FAX. 06-6348-0634

9．**青年技術者選考委員会**（平成13年度）

委員長　宮田　照久／昭和設計常任顧問
委　員　三輪　康一／神戸大学助教授
橋本　健治／坂倉建築研究所大阪事務所執行役員
難波　正人／竹中工務店開発計画本部長
松田　善弘／昭和設計執行役員
甲津　功夫／大阪工業大学教授
八木　貞樹／大林組本店建築設計部部長
栗山　知広／日建設計設備設計室長
穴吹　　隆／清水建設関西事業本部設計第3部部長（設備担当）
水落　和則／大林組本店エンジニアリング本部大阪コンサルタント部部長
林　　一彦／大成建設関西支店建築部部長

第48回の応募提出規定は7月上旬に決まりますので、8月号会告欄で再度お知らせします。

応募規定は検討中
応募規定は検討中

会告

理事会 正副会長の互選結果等のお知らせ

平成13年６月20日開催の平成13年度第１回臨時理事会において、正副会長並びに理事の会務分掌等が決まりましたので報告します。

役員の改選

＊６月20日付で退任した役員

●理事

荒巻恭士／㈱きんでん
市川　宏／㈱東畑建築事務所
遠藤郁夫／大成建設㈱
多井幸男／多井建築研究所
岡田隆臣／都市基盤整備公団
金井弘次／元㈱アーバンエース
坂　雅勝／大阪市住宅局
友原　譲／㈱間組東京本店
薬袋公明／㈱日建設計
山下健一／㈱大林組

●監事

伊藤俊夫／元㈱松村組

＊６月20日付で就任した役員

●理事

揚野孝輔／㈱間組大阪支店
岩橋貞雄／八千代電設工業㈱
氏原完典／大成建設㈱
岡田聿之／㈱東畑建築事務所
金多　潔／京都大学名誉教授
川村眞次／㈱関西都市整備センター
北山啓三／大阪市住宅局
近藤正文／都市基盤整備公団
髙木嗣郎／㈱大林組
成尾克彦／㈱きんでん
三宗司郎／㈱昭和設計
與謝野久／㈱日建設計

●監事

本郷　聰／㈱松村組

総会議決のお知らせ

―― 平成12年度事業報告
―― 平成12年度決算報告
―― 役員の改選

平成13年６月20日開催の平成13年度第１回通常総会において、平成12年度事業報告、平成12年度収支決算報告が原案どおり承認されるとともに、役員が改選されましたので報告します。

日本建築協会役員会務分掌

（敬称略）

名誉会長	佐野　正一／㈱安井建築設計事務所	
会　長	金多　潔／京都大学名誉教授	
副会長	川口　順弘／㈱竹中工務店	企画担当
副会長	佐野　吉彦／㈱安井建築設計事務所	編集・研修担当
副会長	芝野　博文／大阪ガス㈱	総務・会計・事務局担当
副会長	髙木　嗣郎／㈱大林組	会勢・事業担当
副会長	成尾　克彦／㈱きんでん	会勢・事業担当
副会長	與謝野　久／㈱日建設計	編集・研修担当

理事（○印常任理事）

（総務）6名		鴻池　一季／㈱鴻池組	
大林　芳郎／㈱大林組		古林　敏郎／㈱佐藤総合計画	
恩庄　二郎／大阪化工㈱		○小宮　三辰／㈱安井建築設計事務所	
栗原　信英／栗原工業㈱		菅谷　節／ダイダン㈱	
鈴木　映男／㈶日本建築総合試験所		○錢高　善雄／㈱錢高組	
○伴　昭秀／㈱西原衛生工業所		遠松　展弘／㈱日建設計	
○松村　雄吾／㈱松村組		仁井　正／大晃設備㈱	
（会計・決算）5名		○浜辺　鶴志／戸田建設㈱	
揚野　孝輔／㈱間組大阪支店		原田孝太郎／原田セメント化工㈱	
奥村正太郎／㈱奥村組		村上謙一郎／清水建設㈱	
○小林　四郎／住友電設㈱		（事業）7名	
清水義一郎／㈱清水工業所		井上　利美／㈱熊谷組	
○松丸　哲也／豊國建設㈱		○川村　眞次／㈱関西都市整備センター	
（編集・出版）10名		北山　啓三／大阪市住宅局	
○井上　豊／㈶日本建築総合試験所		近藤　正文／都市基盤整備公団	
内田　直樹／㈳日本建築構造技術者協会		○白水　秀俊／㈱フジタ	
○岡田　聿之／㈱東畑建築事務所		仙田　良行／㈱カンダン	
○小島　雄／鹿島建設㈱		藤木　鐵三／㈱藤木工務店	
竹中　統一／㈱竹中工務店		（研修）7名	
畠山　祐治／㈱シンコー		岩橋　貞雄／八千代電設工業㈱	
広原　盛明／龍谷大学		氏原　完典／大成建設㈱	
○松村　慶三／㈱浦辺設計		○片倉　健雄／元　近畿大学	
○宮田　照久／㈱昭和設計		○永原　義夫／王建工業㈱	
○山田　修／修建築事務所		松原　徹雄／大阪府建築都市部	
（会勢）12名		三宗　司郎／㈱昭和設計	
淺沼　誠夫／㈱淺沼組		○和田　克朗／㈶日本建築センター	
久米　宏和／㈳大阪建設業協会			

常務理事	杉山　泰生	
（監事）	本郷　聰／㈱松村組	前田　隆司／㈱前田商会

平成12年度事業報告書

平成12年4月1日～平成13年3月31日

1．総　　会

(1) 第１回通常総会
平成12年６月28日
第５回日本建築協会賞表彰式
議事　①平成11年度事業報告承認の件
②平成11年度決算報告承認の件
③報告事項　理事補欠選任の件

(2) 第１回臨時総会
平成12年９月27日
議事　定款改正

(3) 第２回通常総会
平成13年３月28日
議事　①名誉正会員推挙の件
②平成13年度事業計画案承認の件
③平成13年度収支予算案承認の件
④定款細則の一部改正の件

2．評　議　員　会

(1) 第１回定時評議員会
平成12年６月28日
議事　①理事２名補欠選任の件
②平成11年度事業報告案承認の件
③平成11年度決算報告案承認の件

(2) 第１回臨時評議員会
平成12年７月27日
議事　定款改正及び定款細則の一部改正

(3) 第２回定時評議員会
平成13年３月21日
議事　①議長、副議長互選の件
②定款細則一部改正の件

3．役　員　会　等

(1) 正副会長会議	3回
(2) 定例・通常理事会	5回
(3) 常任理事会	3回
(4) 臨時理事会	1回
(5) 会勢担当理事会	5回
(6) 総務担当理事会	2回
(7) 編集担当理事会	1回

4．常　設　委　員　会　等

委員会	小委員会等
(1) 編集委員会　12回	97回
(2) 事業委員会　7回	32回
(3) 教育委員会　1回	6回
(4) 出版委員会　11回	8回
(5) 建材委員会　2回	

5．特　別　委　員　会　等

(1) 協会21世紀を考える委員会	6回
(2) 青年技術者選考委員会	1回
(3) 工高生デザインコンクール審査委員会	1回
(4) 「建築と社会賞」審査委員会	2回

6．建築と社会・特集号

4月号　こころを癒す環境デザイン
5月号　測る―測定方法と測定結果が意味するもの―
6月号　スケルトン&インフィル
7月号　改正建築基準法―パートⅡ―
8月号　100年後へのメッセージ／日建設計創業100周年
9月号　来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―
10月号　時間
11月号　私の空間作法／21世紀の高齢者の居住環境
12月号　第47回青年技術者

1月号　エヌ・ティ・ティ　ファシリティーズ
2月号　21世紀の建築設計教育
3月号　東海支部会員作品／岐阜・大垣―地方におけるIT産業振興の狙いと試み―

7. 出　　版

＜プロのノウハウ＞シリーズ等
『建物の汚れ―トラブル事例と解決策』／「建物の汚れ」編集委員会編著
『建築基準法の性能規定を読みこなすコツ』／高木任之著

8. 見　学　会

なにわの海の時空館
5月17日　参加者　74名
茶室見学会⑭―飛雲閣憶昔席―（パート2）
5月23日　参加者　59名
まちなみ見学会④―奈良市奈良町―
5月27日　参加者　54名
新住友病院
8月3日　参加者　85名
茶室見学会⑮―大徳寺三玄院の篁庵―
11月11日　参加者　54名
近代建築見学会⑪―大阪市立愛珠幼稚園―
12月15日　参加者　25名
大阪府立狭山池博物館
3月6日　参加者　49名
大阪市環境事業局舞洲工場
3月27日　参加者　63名
NHK大阪新放送会館、大阪市立博物館・考古資料センター
3月28日　参加者　98名

9. 情報・研修会

講演会／性能規定における木造デザイナーのための木構造
5月26日　於　協会サロン
講師：田原　賢氏　参加者　48名
話題建築を聞く―梅田ダイビル―
10月18日　於　協会サロン
講師：川島克也氏　参加者　21名
話題建築を聞く―大型児童館ビッグバン―
10月27日　於　協会サロン
講師：太田隆信氏　参加者　15名
講演会／設計者のための写真術パートⅢ
10月28日　於　神戸ハーバーランド
講師：吉村行雄氏　参加者　16名
作品講評会／設計者のための写真術パートⅢ＜後編＞
11月28日　於　協会サロン
講師：吉村行雄氏　参加者　10名
撮影会参加者作品展／設計者のための写真術シリーズ
3月22日―4月18日　於　協会サロン
参加者　12名

10. 若い会員の集い

30's EYE㉞　「のりツッコミ」でいこう！
11月24日　於　協会サロン
講師：丸谷勝也氏　参加者　22名

11. 建築工事実務講習会

東海支部主催「施工計画、仮設見積、積算業務」
10月5日　9:30－17:00　於　昭和ビル
講師：施工計画　細田泰彦氏／清水建設名古屋支店
　　仮設見積　鏡　博文氏／大林組名古屋支店
　　積算業務　佐野洋治氏／竹中工務店名古屋支店
受講者　78名
大阪開催「施工計画」
3月7日　9:00－17:00　於　大阪府建築健保会館
講師：仮設・地下工事　関川詞之氏／大成建設関西支店
　　上部工事・工程　佐貫　久氏／神戸大学大学院
受講者　74名
大阪開催「仮設見積・積算業務」
3月14日　9:00－17:00　於　大阪府建築健保会館
講師：仮設見積　金澤　稔氏／大林組本店
　　積算業務　高熊　満氏／竹中工務店大阪本店
受講者　65名

12. プロのノウハウ講座

第23回　「建物の汚れ―トラブル事例と解決策」
10月24日　18:00－19:40　於　協会サロン
講師：大島雄太氏／竹中工務店大阪本店
受講者　23名
第24回　「建築基準法の性能規定を読みこなすコツ」
3月16日　18:00－20:00　於　協会サロン
講師：高木任之氏／芝浦工業大学
受講者　31名

13. コ　ン　ク　ー　ル

第46回工高生デザインコンクール
設計課題　「地域に建つ　郵便局」
応募校　33校・146点
審査会　10月14日
表彰式　11月11日
審査委員長　與謝野久氏／日建設計
入選作　10点（うち最優秀1点、優秀2点）

14. 表　彰　状　授　与

全国の工業高等専門学校、高等学校、専修学校などの建築科の優秀卒業生に対し、学校の推薦により、本会会長の表彰状を授与しており、本年度は235校を対象に240名を表彰した。

15. 会　員　の　増　強

昨年度に引き続き会員増強に努めた結果、年度末現在の会員数は、個人正会員2,250名、団体正会員は502団体1,962口、準会員は8名となった。

16. 後援・協賛等の承認

●改正建築基準法講習会に対する協賛
●第12回2000奈良aaca景観シンポジウムに対する協賛
●第20回大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）に対する協賛
●第16回睡眠環境シンポジウムに対する協賛
●建築新技術展／国際セミナーA/E/C　SYSTEMS JAPAN 2000に対する協賛
●2000年E・家・暮らし　住まいの設計コンテストに対する後援
●あすなろ夢建築第10回大阪府公共建築設計コンクールに対する後援
●けんざい2001―第16回総合建築材料・設備展に対する後援
●第24回人間―生活環境系シンポジウム開催に対する協賛
●住宅の品質確保の促進等に関する法律セミナーの開催に対する協賛
●21世紀への新しいライフスタイル構築に向けてのメッセ企画展の後援
●日本住宅性能表示基準及び評価方法基準講習会開催に対する協賛
●バリューマネージメント・システム（これからの公共の建築はどうやってつくられるか）講習会に対する協賛
●Japan Home Show2000に対する協賛
●建築・建材展2001（第7回）開催に対する協賛
●創造的な構造設計を支える知恵と技術シンポジウムに対する協賛
●文化遺産としてのモダニズム建築関西展DOCOMOMO20選＋関西20選開催に伴う後援
●HITECセミナー2001「コンクリートの諸問題と性能評価／現状と今後の展望」に対する協賛
●1級・2級建築施工管理技術検定試験受験準備講習会に対する共催
●第10回国際デザイン・フェスティバル開催に対する協賛
●ATC関西学生卒業作品展Vol.6開催に対する後援
●木構造と木造文化の再構築シンポジウム開催に対する協賛

17. 青年技術者の顕彰

昭和29年から本顕彰を実施しているが、第47回の本年度は応募者34名のうち24名を顕彰した。本年度の顕彰者を加え、顕彰者数は754名に達した。

18. 図　書　の　閲　覧

昭和63年度から本会所蔵の貴重な図書および資料を会員等に公開しているが、その的確な管理に努めながら閲覧に供した。本年度閲覧者は29名であった。

19. 合同忘年懇親会等

建築関係団体合同忘年懇親会
本年度は㈳日本建築家協会を当番会として、本会等は共催団体として、下記のとおり開催された。
12月14日　18:00～19:30　於　太閤園
出席者　306名
建築関係団体合同新年交礼会
本年度は㈳建築設備技術者協会が当番会となり、下記のとおり開催された。
1月4日　14:30～15:30　於　マイドーム大阪
出席者　748名

20. 本会が入会している団体

大阪商工会議所
大阪市街地再開発促進協議会
建築行政協会大阪市支部
大阪住宅振興協議会
民間（旧四会）連合協定工事請負契約約款委員会
大阪市北区納税協会
大阪市防火管理協会

21. 役員を送っている団体

大阪商工会議所	2号議員
大阪市街地再開発促進協議会	理事
日本建築総合試験所	理事
大阪建築防災センター	理事
大阪住宅センター	理事

22. 建　築　ク　ラ　ブ

会員の有志で組織する「建築クラブ」は毎月1回大阪全日空ホテルにおいて、朝食会ならびに講演会を開催した。また、1月には新年懇親会を開催した。

平成12年度決算報告書

収支計算書

平成12年４月１日～平成13年３月31日

（単位：円）

Ⅰ．収入の部			
科目	予算額	決算額	差引過不足額
1 会費収入	88,071,000	80,566,779	7,504,221
個人正会員	32,515,000	29,555,840	2,959,160
地方会員	1,588,000	1,956,450	△ 368,450
団体正会員	53,850,000	49,000,589	4,849,411
準会員	118,000	53,900	64,100
2 事業収入	69,300,000	59,960,269	9,339,731
会誌収入	58,000,000	49,318,520	8,681,480
契約約款収入	2,200,000	3,509,630	△ 1,309,630
会員名簿発行収入	0	0	0
出版委員会収入	1,500,000	950,784	549,216
事業委員会収入	1,500,000	1,051,000	449,000
教育委員会収入	2,000,000	1,941,395	58,605
建材委員会収入	100,000	0	100,000
記念事業取崩収入	2,000,000	1,500,000	500,000
受託事業収入	0	0	0
雑収入	2,000,000	1,688,940	311,060
3 寄付金収入	100,000	0	100,000
4 退職給与積立金取崩収入	3,000,000	5,000,000	△ 2,000,000
5 雑収入	1,019,000	660,478	358,522
6 仮払金収入	0	275,348	△ 275,348
当期収入合計（A）	161,490,000	146,462,874	15,027,126
前期繰越収支差額	0	7,369,004	
収入合計（B）	161,490,000	153,831,878	7,658,122
Ⅱ．支出の部			
科目	予算額	決算額	差引過不足額
1 事業費	66,850,000	65,861,096	988,904
会誌発行費	56,000,000	55,309,960	690,040
契約約款費	1,000,000	1,823,847	△ 823,847
会員名簿発行費	0	0	0
出版委員会事業費	1,000,000	531,926	468,074
事業委員会事業費	3,000,000	1,883,603	1,116,397
教育委員会事業費	2,800,000	2,652,620	147,380
建材委員会事業費	50,000	0	50,000
記念事業費	2,000,000	1,669,632	330,368
受託事業費	0	0	0
雑費	1,000,000	1,989,508	△ 989,508
2 管理費	91,640,000	79,333,183	12,306,817
給与・手当	57,000,000	53,765,153	3,234,847
退職金	4,000,000	1,640,300	2,359,700
福利厚生費	7,500,000	6,179,985	1,320,015
小計	68,500,000	61,585,438	6,914,562
助成費	4,200,000	3,572,662	627,338
会議費	1,500,000	1,475,419	24,581
旅費交通費	170,000	50,820	119,180
通信運搬費	1,000,000	759,606	240,394
集金費	2,000,000	1,727,419	272,581
消耗品費	2,000,000	1,147,739	852,261
修繕費	350,000	21,924	328,076
印刷製本費	500,000	0	500,000
光熱費	350,000	314,900	35,100
火災保険料	20,000	15,960	4,040
租税公課	4,300,000	3,337,097	962,903
清掃費	250,000	182,700	67,300
建物管理費	4,000,000	4,027,620	△ 27,620
雑費	2,500,000	1,113,879	1,386,121
小計	23,140,000	17,747,745	5,392,255
3 退職給与引当金積立支出	3,000,000	3,000,000	0
4 中期国債ファンド積立支出	0	1,812	△ 1,812
5 前払費用支出	0	110,727	△ 110,727
6 前受金支出	0	1,098,224	△ 1,098,224
7 仮受金支出	0	440,201	△ 440,201
小計	3,000,000	4,650,964	△ 1,650,964
当期支出合計（C）	161,490,000	149,845,243	11,644,757
当期収支差額（A）－（C）	0	△ 3,382,369	3,382,369
収支差額（B）－（C）	0	3,986,635	△ 3,986,635
次期繰越収支差額（B）－（C）	0	3,986,635	△ 3,986,635

正味財産増減計算書

平成12年４月１日～平成13年３月31日

（単位：円）

科目	金額
Ⅰ．増加の部	
1．資産増加額	
中期国債ファンド増加額	1,812
前払費用増加額	110,727
小計	112,539
2．負債減少額	
前受金減少額	1,098,224
仮受金減少額	440,201
退職給与引当金減少額	2,000,000
小計	3,538,425
合計	3,650,964
Ⅱ．減少の部	
1．資産減少額	
当期収支差額	3,382,369
仮払金減少額	275,348
退職給与積立預金減少額	2,000,000
記念事業積立預金減少額	1,500,000
小計	7,157,717
2．負債増加額	0
合計	7,157,717

当期正味財産減少額　3,506,753円
前期繰越正味財産額　237,000,123円
期末正味財産合計額　233,493,370円

貸借対照表

平成13年３月31日現在

（単位：円）

科　目	金　額	科　目	金　額
Ⅰ．資産の部		Ⅱ．負債の部	
流動資産	27,038,471	流動負債	47,837,256
現金・預金	18,213,155	未払金	22,031,395
未収入金	7,804,875	前受金	25,415,639
前払費用	418,753	仮受金	390,222
仮払金	601,688	固定負債	11,329,484
固定資産	265,621,639	退職給与引当金	11,329,484
有形固定資産	251,031,260		
土地	59,800,000	負債合計	59,166,740
建物	191,120,000	Ⅲ．正味財産の部	
什器	111,260	正味財産	233,493,370
その他固定資産	14,590,379		
退職給与積立預金	11,329,484		
記念事業積立預金	2,821,953		
中期国債ファンド	438,942		
資産合計	292,660,110	負債及び正味財産合計	292,660,110

（注）減価償却累計額は1,001,300円

計算書類に対する注記

1．重要な会計方針

(1)有価証券の評価基準及び評価方法について

該当なし。

(2)引当金の計上基準について

退職給与引当金・期末退職給与の要支給額に対し税法に基づき積立てている。

(3)資金の範囲について

資金の範囲には、現金、預金、未収入金及び未払金を含めている。

(4)消費税等の会計処理について

消費税等の会計処理は税込み方式によっている。

2．次期繰越収支差額の内容は、次のとおりである。

科　目	前期末残高	当期末残高
現金預金	30,389,611	18,213,155
未収入金	8,596,095	7,804,875
合　計	38,985,706	26,018,030
未払金	31,616,702	22,031,395
合　計	31,616,702	22,031,395
次期繰越収支差額	7,369,004	3,986,635

3．有形固定資産の取得価格、減価償却累計額及び当期末残高は次のとおりである。

科　目	取得価格	減価償却累計額	当期末残高
建　物	191,120,000	0	191,120,000
什　器	1,112,560	1,001,300	111,260
合　計	192,232,560	1,001,300	191,231,260

4.借入限度額

借入限度額は、30,000,000円である。

財産目録

平成13年３月31日現在

（単位：円）

科　目	金　額
Ⅰ．資産の部	
1．流動資産	27,038,471
現金・預金	18,213,155
現金手元有高	177,057
中央三井信託銀行大阪駅前支店	873,493
三井住友銀行高麗橋支店	6,756,029
三和銀行瓦町支店	2,475,366
大和銀行北浜支店	1,461,392
郵便振替　00910－9－39975	6,435,818
普通預金第２ビル内郵便局	0
郵便定額　〃　〃	34,000
未収入金	7,804,875
会誌収入	4,047,475
雑事業収入	960,000
個人正会員会費収入	1,942,750
地方会員会費収入	84,000
準会員会費収入	8,400
団体正会員会費収入	752,250
教育委員会収入	10,000
前払費用	418,753
会誌発行費	64,546
助成費	353,007
集金費	1,200
仮払金	601,688
切手・はがき代	219,759
〃（建築クラブ）	15,230
復刻版代	323,000
切手代外（ドコモモ）	43,699
2．固定資産	265,621,639
(1)有形固定資産	251,031,260
土地　北区梅田1－1－3	59,800,000
建物　大阪駅前第3ビル	191,120,000
什器　書棚一式	111,260
(2)その他固定資産	14,590,379
退職給与積立預金	11,329,484
三井住友銀行高麗橋支店	4,000,000
三和銀行大阪駅前支店	3,000,000
第２ビル内郵便局（普通）	4,329,484
記念事業積立預金	2,821,953
三井住友銀行高麗橋支店	2,821,953
中期国債ファンド　つばさ証券	438,942
資産合計	292,660,110
Ⅱ．負債の部	
1．流動負債	47,837,256
未払金	22,031,395
会誌発行費	14,902,421
出版委員会事業費	12,310
雑事業費	567
退職金	6,440,300
助成費	80,100
集金費	89,000
租税公課	506,697
前受金	25,415,639
個人正会員会費収入	7,784,800
団体正会員会費収入	15,685,439
地方会員会費収入	676,600
準会員会費収入	16,800
会誌収入	1,252,000
仮受金	390,222
3月分給与税金	96,650
3月分204条該当分	195,572
誤入金預かり	98,000
2．固定負債	11,329,484
退職給与引当金	11,329,484
負債合計	59,166,740
Ⅲ．正味財産の部	
正味財産	233,493,370
負債及び正味財産合計	292,660,110

読者と織りなす

たて糸 よこ糸

「建築と社会」では、読者の声を誌面づくりに役立てるために、皆様の意見と、編集担当者の声を掲載していきます。

■イメージしにくい将来

これまでよく用いられた「21世紀の～」や「来世紀の～」といった表現には、楽観的な未来感が漂っていました。でも、その21世紀を迎えた現在は、社会の将来を気軽にイメージしにくい時代となりました。

何か手がかりはないかと考えて、本誌6月号に「成熟社会をささえるまちづくり」を企画しました。しかし、ちょっと難しくて気恥ずかしいテーマ設定になりました。「えっ『成熟社会』って言われても……」という反応が大方だったでしょう。でも、そこにヒントがあると考えます。無理やり北欧の社会などを連想するのは簡単ですが、おそらく日本の将来はまた違う姿になるはずです。成長社会の記憶が強烈に焼きついている私たちには、そのイメージがすんなり浮かびません。

やはり、あの激動の「20世紀」中にはイメージしきれなかった日本の将来像を、見つけ出していく作業が必要だと思います。今回の特集号が、そのような営みのきっかけになれば幸いです。　（前・編集委員　椎名辰之）

■誤った設計・施工がまかり通る不思議

近頃またまた気になり出したことの一つが、床下通気とその床下通気管同士の接続である。1964年版の「空気調和・衛生工学便覧」にそれに関する記述が初めて出たが、その後の改版でもこの記述は続けられ、今日に至っている。もう40年近く、この事柄についての啓蒙が続いていることになる。にもかかわらず、ほとんど実行されていない。

建築教育における教科書でも、便所回りの平面計画で、PSの位置や形、広さまでは言及されているようだが、通気管の床下から天井内へ立ち上げるスペースに関しては皆無のように思われる。したがって、設備技術者に実行しない理由はと尋ねれば、立ち上げる個所を建築技術者から与えてもらえないためというのが大方の言い分のようである。

建築技術者に対しては駄弁ではあるが、本来、建築物とはその軀体と設備とが両々相まってそれぞれの役割を果たしてこそ、建築物と言えるのではないだろうか。

通気管は天井内を横走りし、各通気管同士は天井内で接続するのが原則である。

床下の排水管から取り出した通気管が天井内へ辿りつけるようなスペースをぜひ作っていただけるよう切に願うものである。

その通路を意匠上、あれこれと模索してゆくのも建築設計者として、また楽しからずやではないだろうか。　（編集委員　T·K）

兵庫大学健康科学部見学会

（再掲）

日　時　2001年8月4日（土）
15:00―17:00

講　師　柏木浩一/竹中工務店設計部
プリンシパル・アーキテクト
山本　匡/同設計課長
渋谷武司/同工事課長

集　合　現地
加古川市平岡町新在家2301
＊JR東加古川駅より徒歩15分

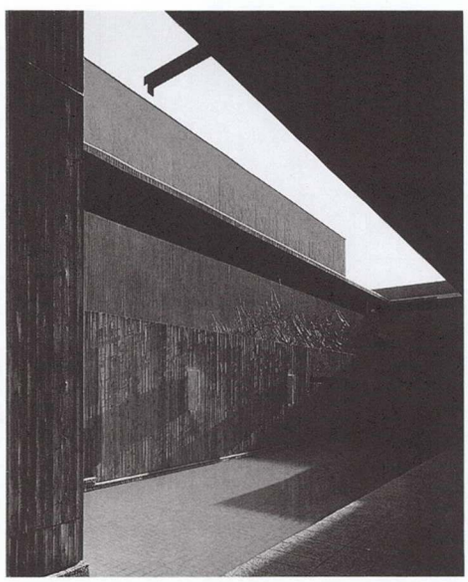
定　員　40人
＊申込者多数の場合は抽選

参加費　会員500円、一般1,000円
学生：半額　＊税込

申　込　7月26日（木）までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：兵庫大学健康科学部見学会
②氏名
③個人会員・団体会員・一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を7月27日（金）に発送します。

申込先　（社）日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001

主　催　（社）日本建築協会
事業委員会見学会小委員会
担当主査：坂田雄二／竹中工務店



中庭に流れる川の岸辺を散策するうちに、何時しか「建築」の持つ不思議な力が心の奥深く語り掛けて来ることと思います。静かな中に、激しさをもって……。

6年前に竣工した「兵庫大学経済情報学部」（『日経アーキテクチュア』1995年9月11日号掲載）の隣に、小規模ですが密度の濃い実験校舎棟が完成しました。二階建て二棟の校舎に挟まれた細長い中庭に川を流し、それと微妙に絡み付くように視界を遮る壁を散りばめています。壁の仕上げはモルタルの掻き落としや杉板型枠打ち放し、床は御影石の割肌仕上げという、現代建築の中にあっては力強く、また少し懐かしささえ覚える材料です、川面を駆け抜ける光や風、また木々の陰りが「建築」と交錯するとき、表情を変えながら今一瞬の風景を創り出していきます。小さく、また所によっては大きく分節化された風景を繋いで川岸を巡るうちに、心の中に湧き起こる何かがあるのではないでしょうか。　（柏木浩一＋山本匡）

●建築概要
所在地　兵庫県加古川市平岡町新在家2301
建築主　学校法人睦学園
設計監理　竹中工務店
施　工　竹中工務店
敷地面積　90,870.79㎡
建築面積　2,136.42㎡
延床面積　3,615.99㎡
構造規模　RC、2F
工　期　2000年2月～2000年12月
＊詳細は『新建築』2001年4月号を参照下さい。

建築と社会 7 2001

ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第82集／通巻952号

今月の表紙

デザイン／笹村欽也、今垣内千恵
建築写真／河合止揚

●神戸市文書館（旧・池長美術館）
設計／小川安一郎
施工／藤木工務店
竣工／昭和13年5月
所在地／神戸市中央区熊内町1-8-21

●元々は池長孟（はじめ）の南蛮美術コレクションを収めた池長美術館。氏は貝や昆虫、植物も集め、牧野富太郎を招いて植物研究所を開いたりもしていたという。
調べるうちに「建築と社会」昭和15年6月号に掲載されていることがわかる。写真は全10点で、今月の表紙のように正面を見上げているもの、池長氏と思しき人物が写っているものもあり、見上げ以外はすべて斜めに振った写真で、当時の建築写真技法の一端が見て取れて興味深い。
一つの建築を通して、良き時代の神戸の文化に触れたようで楽しかった。　（河合止揚）

■特集予告
8月号／環境－近未来に向けて
今できること－
－大建設計作品集－
9月号／建築の力、都市の力

編集委員会（平成13年度）

■副会長
佐野　吉彦
奥謝野　久
■編集理事
井上　豊
内田　直樹
岡田　聿之
小島　雄
竹中　統一
畠山　祐治
広原　盛明
松村　慶三
◎宮田　照久
山田　修
■特集小委員会
□計画分科会
★計画系
伊縫　憲幸
梅田　善愛
小浦　久子
鈴木　克彦
田中　直人
紅谷　昇平
細田　浩史
松田奈緒子
吉村　英祐
★建築計画系
江副　敏史
※菅野　忠司
小林　優子
児玉　敬志
佐藤不二男
迫　淳海
桜井　則雄
笹村　欽也
塚本　史郎
所　千夏
野田　隆史
服部　光宏
★インテリア・住宅系
石川　佳子
加藤　力
北浦かほる
小梶　吉隆
佐藤　勝紀
田中　浩介
高野　直樹
※西田　和子
ペリー史子
本山　仁
□構造分科会
大氏　正嗣
金田　興熙
河野　隆史
※木下　隆嗣
佐治　明志
白沢　吉衛
住田　隆二
田中　剛
竹内　秀紀
松村　和夫
向井　洋一
吉川　真次
□設備分科会
梶井　宏修
河井　康人
河津　隆之
※近藤　国夫
近藤　正一
田ノ畑好幸
西岡　道雄
桝井　貴廣
村上幸三郎
谷津　和久
山根　敏和
□施工材料分科会
植田　実
小椎八重猛
竹中　秀文
※太刀川丈爾
能美　敏男
増田　信久
吉田　正友
□法令分科会
伊勢　照男
薄木　三男
衣笠　春幸
黒木　省二
※中島　和也
森下　嘉弘
■作品作風小委員会
△赤木　隆
淺尾　宏
朝倉　一晃
居内　章夫
井上　雅祐
川上比奈子
倉渕奈千子
寺岡　宏治
中村　文紀
林　孝司
前川　治彦
増田　敬彦
増田　俊哉
山田　俊紀
■会員企画小委員会
稲木　裕子
大谷由紀子
河崎　敦子
清水　麗子
△高岡　伸一
髙田　光雄
辰巳　清一
塚口　明洋
辻川ひとみ
福田　瑞穂
■広告企画小委員会
小幡　義明
小山　昭
斉藤　治久
田渕　博昭
千葉　耕作
中島　猛
△林　一彦
平松　勉
古畑　健一
前田　衛
渡邊　浩文

◎委員長　△副委員長　※幹事

印　刷　2001年6月25日
発　行　2001年7月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本データネット株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕

CONTENTS

特集●　現代の日本の空間、文化を探る
—見える和風、潜む和風—

［総論］
不易流行—日本的なるものの重力—●加藤　力 …… 26
日本人の住空間—住宅、インテリアの視点から—●宮内　悊 …… 28

［各論］
—見える和風、潜む和風—
イス坐・ユカ坐●沢田知子 …… 32
住宅の間取り—欧米と日本の住宅プランの比較—●大江　孝＋本山　仁 …… 34
アメリカのオフィススペース●松岡昭吾 …… 36
門、塀—見える和風、潜む和風—●古川修文 …… 38
日本の入浴文化とユニットバスルーム●南金山　崇 …… 40

［コラム］
次世代へ手渡したい「日本的なもの」あるいは「和風」●ペリー史子 …… 42

挨拶　日本建築協会会長就任のあいさつ●金多　潔　1

会告　“私の空間作法”作品募集．青年技術者のみなさまへ．理事会正副会長の互選結果等のお知らせ．総会議決のお知らせ—平成12年度事業報告書、平成12年度決算報告書、役員の改選—．兵庫大学健康科学部見学会．読者と織りなす"たて糸よこ糸"　2

作品作風
京都市東山区総合庁舎　10
竹野町庁舎　12
京都府立図書館　14
特別養護老人ホームあわじ荘　16
兵庫大学健康科学部　18
大阪市安土町駐車場・コーシャハイツ安土町・ヴィアーレ大阪　20

gallery　阪南町の家●正井　徹（赤木　隆）　22

建築の眼　コーポ住宅のまちづくり効果●本多昭一　浪速見物に参りませう●坂　雅勝
ジャカランダの樹の下で●上田信也　Earth Sweet Home●木村宗光　24

素材と技術が生み出すデザイン　「レンガ」●宮武淳夫×植田道則　44

法令コーナー　著作権並びにCADデータ流通／交換●中元三郎　46

構造の頁　超高層免震—設計手法と設計上の留意点—●山本正幸　48

設備の頁　家庭に入ってきた燃料電池●立森正史　50

REPORT　まちなみ見学会・第5回—京都・西陣を中心とする町家の再生—●小笹光彦　52

information　現代の工匠から日本の建築文化の原点を学ぶ．風の路シンポジウム2001．インテリアブラッシュアップセミナー．アンソール版画展．イタリアと日本：生活のデザイン展．現代日本彫刻展2001．「キッズ・サイズ・デザイン展—子供たちの〈もの〉と〈心〉の世界」．医療福祉建築賞2001募集．福祉建築アイデアコンペ．第2回印旛村野外芸術展INいには野．「イソバンド・イソダッハ・デザインコンテスト」審査結果．「3Dマイホームデザインコンテスト」結果　54

月間の動き　平成13年5月分　56



作品
作風

設計・監理■
京都市都市住宅局営繕部営繕課
大建設計

施工■
戸田・水野共同企業体

京都市東山区総合庁舎

本施設は区役所・保健所に青少年活動センター・地域体育館を加えた複合施設として計画され、既存の合同福祉センターに併設することで東山区行政の総合推進拠点として位置づけられている。
東山区はなだらかな東山の山並みと清らかな鴨川の流れの間にあり、坂の形状をなした縦横無尽に走る小路・路地がまちを形づくっている。建物はこの路地になぞらえたパブリックスペースによって独立した機能を持つ3つのゾーンに分節されている。このパブリックスペース（路地空間）は平面的な「横の路」と吹き抜けや階段による立体的な「縦の路」で構成され、これら「路」が交差することでアクティブな動線が引き出される。コミュニケーションの場としての賑わいを得た「路」は、同時に透明なガラススクリーンによって外部と連続し人々の通り抜けの空間を生み出している。さらに1層分の高低差を生かした建物周囲のオープンスペース（路地空間）はサンクンガーデンなど地域住民の憩いの空間として演出され、隣接する福祉センターへ向かう人々や敷地を通り抜ける人々の流れが内外の境界を取り払い、京の路地空間をここに再現する。
自然の素材によるファサードは日々刻々と移りゆく空の表情や季節、天候に合わせ様々な表情を見せる。その曖昧さ、うつろいが京都らしい「はんなり」というイメージに通じ、東山のまちなみと共に地域の人々に親しまれることを願った。

（近藤　崇／大建設計）



1階平面図　1：1200

所 在 地 ——京都市東山区清水5丁目130番6他
敷地面積 ——66,759.01㎡（既存合同福祉センターと同一敷地）
建築面積 —— 4,178.59㎡（内今回計画分　2,649.58㎡）
延床面積 ——17,558.98㎡（内今回計画分 13,477.85㎡）
構造規模 ——SRC、一部S、4F、B2F
工　　期 ——1998年11月～2001年1月
最 寄 駅 ——JR京都駅より市バス「清水坂」下車
撮　　影 ——エスエス大阪

左頁：西側吹抜　右上から：東大路通側ファサード／エントランスピロティ／西側吹抜（左）／既存建物間サンクンガーデン（右）／北西からのながめ








たけの





作品
作風

設計・監理■
昭和設計

施工■
竹中工務店・中川工務店共同企業体

竹野町庁舎

竹野町は兵庫県最北端の但馬海岸の中心部に位置し、美しい自然に恵まれた町で、「緑と海と太陽の町」をスローガンに自然との共生を大切にするまちづくりを進めている。また、江戸時代から明治の末期にかけて栄えた「北前船」の寄港地としての歴史と文化を後世に引き継ぐため、「北前船の里」づくりに取り組んでいる。

築後半世紀経過した旧庁舎において円滑な行政推進を図るには支障が生じたこととともに、庁舎前に位置する幹線道路の道路改良事業の着手を契機に、新庁舎建設の計画が進められてきた。

計画にあたっては庁舎としての機能性・合理性の確保と同時に、町民にとって親しみやすい存在で、活気ある交流の場となることを基本理念とし、「北前船の里」にふさわしく、北前船をデザインモチーフに取り入れ、竹野町のランドマークとなるように計画している。

議場部分の外壁は北前船をイメージした楕円形とし、外装材に伝統とぬくもりを感じる木を使用し、庁舎の「顔」を造り上げている。

東西面の外壁は北前船の垣立(かきたつ)をイメージし、タイルとサッシュで格子状のパターンで表現している。

内部空間は、エントランスホールとなる3層吹抜けの町民ホールを中心に両側に執務室を配し、庁舎全体の構成が見渡せる計画としている。また内装材は木を多用し、優しく明るい快適な空間としている。景観面では周辺の緑と調和し、また、親しみやすく暖かみがあり飽きがこないよう、自然素材（自然の風合いのあるタイル、木）を外壁に使用している。

竹野町の新しい庁舎が町民にとって親しみやすい交流の場となり、町の活性化につながることを期待している。

（沼田　亘・古塚浩史・松隈守城／昭和設計）



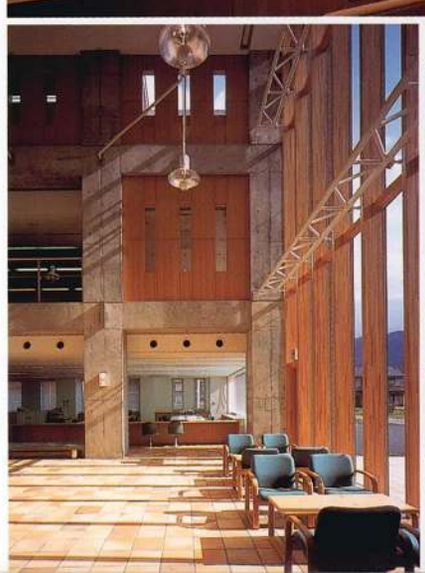
配置図　1：1800

所 在 地 ——兵庫県城崎郡竹野町竹野1585-1
敷地面積 ——5,357.41㎡
建築面積 ——庁舎棟　1,016.48㎡　付属棟　315.00㎡
延床面積 ——庁舎棟　2,440.28㎡　付属棟　529.20㎡
構造規模 ——庁舎棟　RC、3F　　付属棟　S、2F
工　　期 ——1999年11月～2001年3月
最 寄 駅 ——JR山陰線・竹野駅
撮　　影 ——松村芳治












京都図書館

作品風

設計・監理■
京都府教育庁管理課
日本設計

施工■
竹中・岡野共同企業体

京都府立図書館

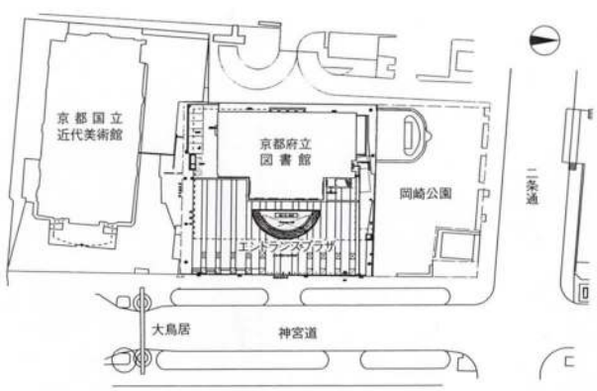
新しい図書館は、「誰でもいつでもどこにいても利用できる」ように図書館サービスを行きわたらせることを目標としている。旧建物のイメージを残してファサード保存し、ネットワークをつないで新しい情報の受発信拠点として、府民を中心とした全ての利用者を支援することを基本理念としている。

敷地は京都市の岡崎で、歴史的建造物である京都市美術館と向き合い、南側・西側はそれぞれ国立近代美術館、京都市勧業館に囲まれている。豊かな緑と歴史的な建物に囲まれた公園地域にある。

全体の構成は、低層部を明治期の歴史的ファサードを保存し、上層部を保存壁面からセットバックさせ、建築面積を抑え、図書館の容積の大部分を占める閉架書庫を地下に計画することで、以前からのたたずまいを極端に変えることなく景観の保全に努めている。新築部分の外観は保存壁面との連続性に配慮し、色調をそろえた石張りとした。上部は京都らしい格子組みのモチーフによるカーテンウォールとし、テイシュ入りガラスでデザインし「伝統と現代」が融和した建築を目指した。

内部の構成は利用者のためのサービス部門を地下1階―2階とし、閲覧室は木調のインテリアデザインとし明るく落ち着いた空間構成とした。管理部門は円滑な図書館サービスの提供や、事務・作業スペースの連携が密に行えるよう計画している。

（太田恭司／日本設計）



配置図　1：2500

所在地 ――京都市左京区岡崎成勝寺町
敷地面積 ――5,688.85㎡
建築面積 ――1,168.03㎡
延床面積 ――7,484.38㎡
構造規模 ――SRC、一部S、B2F、4F
工　期 ――1998年10月～2000年10月
最寄駅 ――京都市営バス「京都会館・美術館前」または
地下鉄東西線「東山駅」
撮　影 ――河合止揚









地域交流スペースから瀬戸内海を望む

作品
作風

設計・監理■
兵庫県県土整備部まちづくり局営繕課

施工■
建　築：フジタ・寄神・淡路土建特別共同企業体
電　気：ミナト電気工事
給排水・衛生：中央工業
空　調：堀川忠義商店
浄化槽：三業

特別養護老人ホーム あわじ荘

特別養護老人ホームあわじ荘は、車で明石海峡大橋を渡り淡路ICから約５分、北淡町の北部に立地している。敷地は、広大な土砂採取跡地内の一画で、丘陵地である。西側には瀬戸内海が一望出来る。

設計では、特に次の３点に留意した。

１.個人の尊重～個室化～

今回の計画では、プライバシーの確保を第一に考え最大限個室化を図った。「個室化」が進むことにより福祉施設から、より住宅に近い居住施設へと変容すると考える。

２.プライベートからパブリックへ

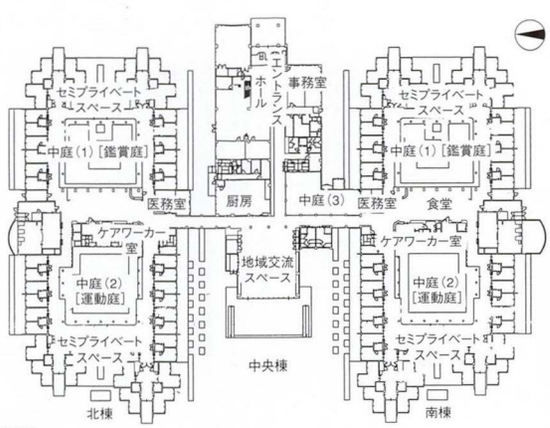
個室化の進んでいる施設の入所者はむしろ共同（で使用する）スペースに出ていく割合が高いという結果が出ている。この点に注目し居間空間（セミパブリック）の充実を図る。〈個室―セミパブリック―パブリック〉という階層的な空間を構成する事により、日常生活そのものを活性化する可能性を持つと考える。

３.グループ化による居間空間の充実

生活単位を６～８人で構成する。廊下の一部にグループごとの居間空間（セミパブリック）を設け、入所者相互ケアーを促進する。

建物の平面計画は、平屋建てとし北棟、中央棟、南棟の３棟で構成する。北・南棟は居住棟で南北２つの介護単位に分ける。各棟で入所者の日常生活をその単位内で完結することが出来る。また中庭を設けることにより自然採光を取り込むよう配置した。中央棟には、事務室・厨房等を配置し管理部門を集約した。

（宮下　誠／兵庫県県土整備部まちづくり局営繕課）



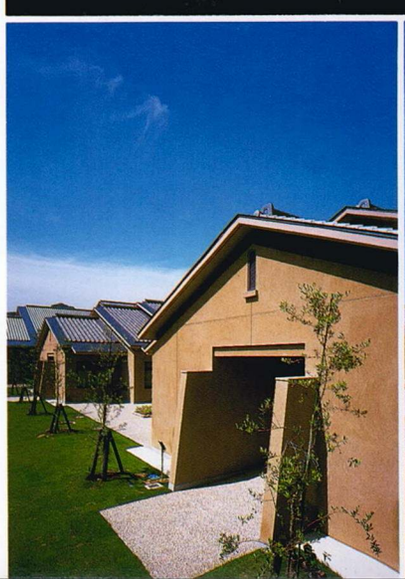
1階平面図

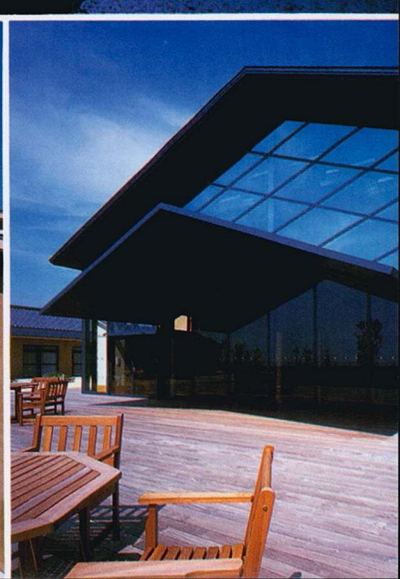
所 在 地 ―― 兵庫県津名郡北淡町野島貴船字平見299-1
敷地面積 ―― 33,674.60㎡
建築面積 ―― 6,892.26㎡
延床面積 ―― 6,422.66㎡
構造規模 ―― RC、1F（一部2F）
工　　期 ―― 1999年10月～2001年1月
撮　　影 ―― 福澤昭嘉



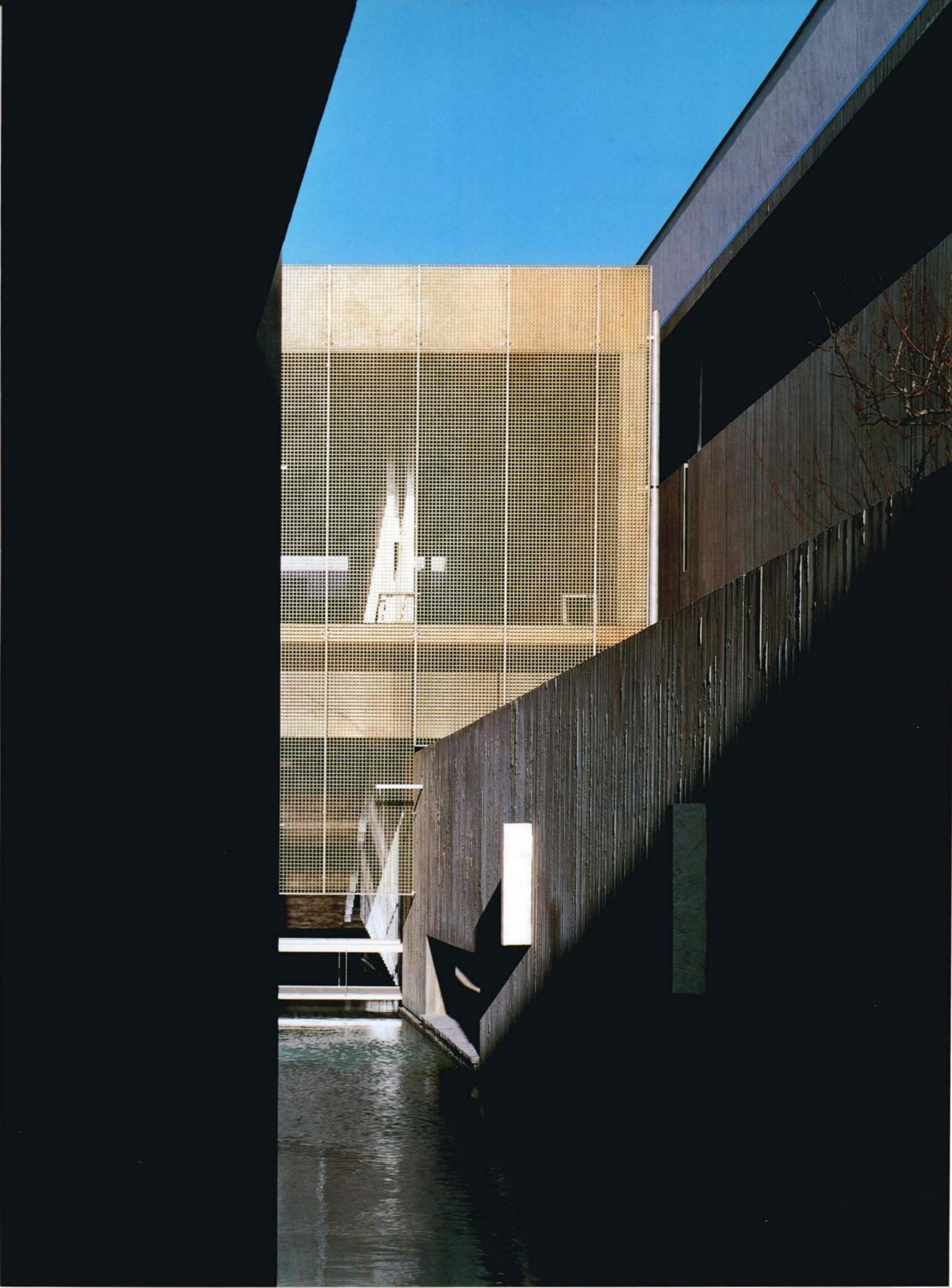








上から 南東側外観／アプローチ／中庭（3）／西側妻面／屋外舞台に利用可能なウッドデッキ



作品

設計・監理■
竹中工務店

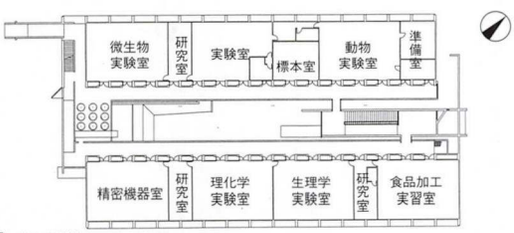
施工■
竹中工務店

兵庫大学健康科学部

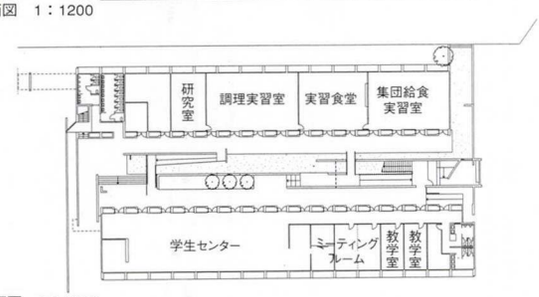
小さくて大きな中庭

6年前に竣工した「兵庫大学経済情報学部」の隣に、健康を主題とした校舎を計画しました。二階建て二棟平行配置の単純な構成ですが、変化に富んだ中庭を設けています。二棟に挟まれた細長い外部空間に、防火用水槽を兼ねた川を流し、それと微妙に絡み付くように視界を遮る障壁を散りばめ、床に高低差をつけてみました。また、中庭を包み込む壁を、モルタルの掻き落としや杉板型枠打ち放し仕上げにし、床を御影石の割肌にしています。その様相は、現代建築の中にあっては力強く、また少し懐かしささえ覚えるものといえるかもしれません。……中庭にさまよい込んだ観者は、吐水口からの音に心を奪われ、見え隠れする風景に誘われるように静かに川の岸辺を散策しだします。川面を駆け抜ける風が、降り注ぐ日差しや障壁が生み出す陰りが、木々の匂いが、また床素材の荒さや傾きが、観者の体に緩やかな刺激を与えていきます。小さく、また所によっては大きく分節化された個々の風景を繋ぐうちに、観者の動きと、自然の移ろいと、建築が織り成す風景とが重奏し合って、一瞬一瞬の新たな時を創造しては消えていきます……。そんな幸せな情景を、この小さくて大きな中庭に夢想しています。

（柏木浩一＋山本　匡／竹中工務店）



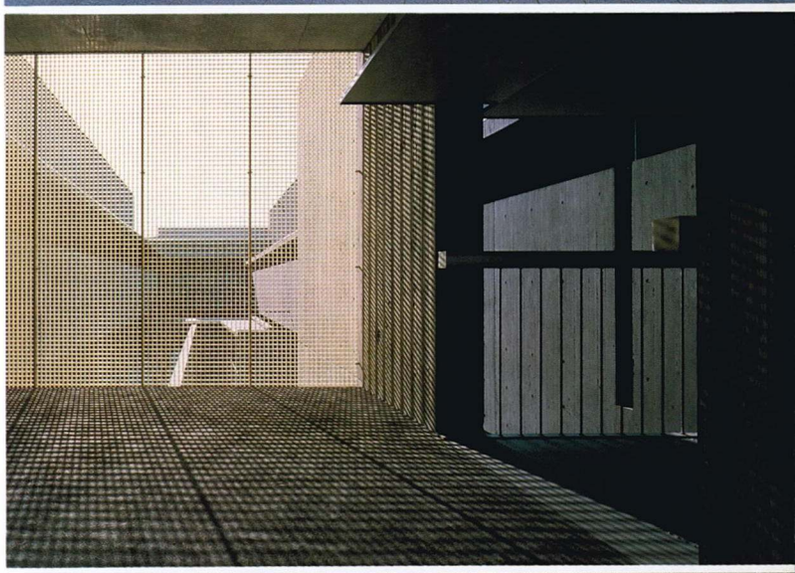
2階平面図　1：1200



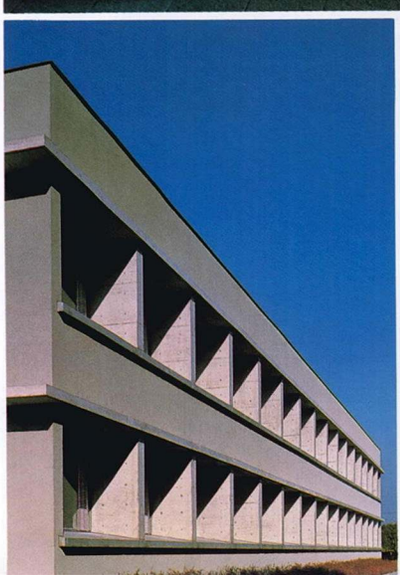
1階平面図　1：1200

所在地 ——兵庫県加古川市平岡町新在家2301
敷地面積 ——90,879.79㎡
建築面積 —— 2,136.42㎡
延床面積 —— 3,615.99㎡
構造規模 ——RC、2F
工　　期 ——2000年2月～2000年12月
最寄駅 ——JR神戸線・東加古川駅
撮　　影 ——古川泰造













作品
作風

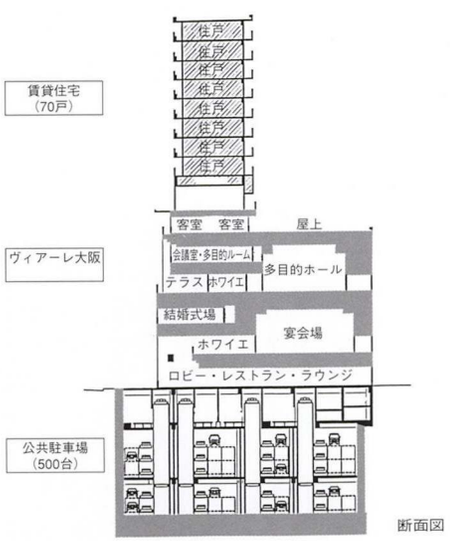
設計・監理■
大阪市建築技術協会・大阪市住宅供給公社
アール・アイ・エー・類設計室

施工■
鴻池・東急・藤木特定建設工事共同体

大阪市安土町駐車場・コーシャハイツ安土町・ヴィアーレ大阪

当該地は大阪市を代表する商業・業務地区である「船場地区」のほぼ中心に位置し、中小卸売り問屋が連担する等、商業・業務活動が盛んな地区である。安土町駐車場の整備に伴い、駐車場上部に都心型の公社特定優良賃貸住宅、及び単身者向け公社賃貸住宅の建設を行う一方で、大阪市職員互助組合において都市の公的会館として市民が利用できる新しい福利厚生サービス施設を併設しています。
都心の‘空洞化’という課題に対して住、職、遊が一体となっていた、かつての船場のような「都市の再生」を目標としています。
景観の配慮として外観は、オフィス中心の景観に対して「住まい」「商い」「文化」の表情を付加し、優しい表情のタイル貼り、わかりやすいサインと色つかい、陰影の深い形態でもって表現し、外構は四季の自然が感じられる都心のオアシス的な空地、緑地を歩行者空間として提供しています。

(冷水隆治/アール・アイ・エー)



断面図

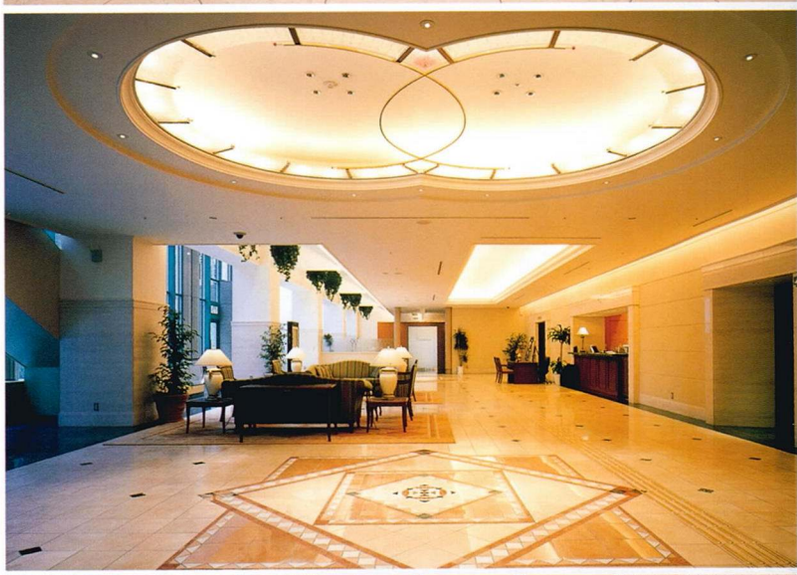
所 在 地 ―― 大阪市中央区安土町3-10-1、2、3
敷地面積 ―― 3,279.94㎡
建築面積 ―― 2,198.40㎡
延床面積 ――27,901.08㎡

「大阪市安土町駐車場」	営業用駐車場	11,308.87㎡
「コーシャハイツ安土町」	賃貸共同住宅	6,275.15㎡
「ヴィアーレ大阪」	会館施設・ホテル	10,317.06㎡

構造規模 ――SRC、15F、B3F
工　　期 ――1998年6月～2001年3月
最 寄 駅 ――地下鉄御堂筋線・本町駅
撮　　影 ――八幡輝幸／伸和

左頁：外観南東面
右頁上から：地下1階駐車場・待合ホール／1階会館エントランスホール／住宅エントランス外観／南面低層部分外観









gallery

阪南町の家

設計
正井　徹

パッシブソーラーシステムによる太陽熱を利用した空気式床暖房。
薪ストーブによる補助暖房。
住まい手のこだわりが生んだ、限界に近い木造３階建ての構造。
どうしても欲しかったバーベキューのできる「空のデッキ」。
広く住むための、ｎ+ＬＤＫという雛形からの脱却。
風を通し、視線を抜いて空間をより広く見せるための窓配置。
国産材（吉野杉）と土壁への固執。
「住」のシンボルとしての桧の梢丸太。
ランドクルーザー80を入れる車庫。
２方向道路からくる斜線の厳しさ。
・・・などなど。

これら様々な条件と、この界隈が持つ街の力がひとつになってこの住まいが生まれた。



正井（まさい）　徹（とおる）
1961　兵庫県淡路島生まれ
1983　近畿大学理工学部
　　建築学科卒業
2000　（有）正井建築舎設立

http://www.kenchikusha.com/

撮　　影―福澤昭嘉
企画編集―赤木　隆（作品作風小委員会）









コーポ住宅のまちづくり効果

本多　昭一

コーポラティブ住宅については本誌読者に説明するのは釈迦に説法であろう。従来は「家づくり」の面から論じられることが多かったと思うが、私はこれを「まちづくり」の面から再考したい。コーポ住宅には集合住宅型（京都洛西ユーコートなど）も連続建て・二戸建て（宇治・あじろぎ横丁など）、一戸建て（大津・樫小路など）もあるが、どの型のものにも、既に15年、20年経過した事例が出てきており、検討するにはいい機会ではないかと思う。

「まちづくりの面」とは、周囲との関係を配慮し、また住み手の好みを採り入れ、将来まで含めての望ましい居住環境を創り出すことであるが、そういうことは建売や分譲マンションではもちんのこと、注文住宅においても現在ではかなり困難である。ところが、10年以上経過したコーポ住宅を見ると、当初の設計が近隣関係等も考慮してあるためか、いわゆる「環境悪化」などの問題がなく、集会所・共同庭などの共用施設もよく活用されている。しかもそれはコーポ住宅敷地内のみでなく、さらに周辺の環境にも好影響を与えているようである。そんなことから、住宅入手の手法としてだけでなく、まちづくりの手法として光を当ててみたいと思う。

京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科教授

浪速見物に参りませう

坂　　雅勝

標題は、今年４月、天神橋６丁目にオープンした大阪市立「住まいのミュージアム」のキャッチコピーである。

大阪市の住まい情報センターの８階から10階に設けられた、このミュージアムは、２つのフロアから構成されている。

９階・10階の近世大阪のフロアでは、江戸後期・天保年間の大阪の街並みが多くの資料・研究に基づき、当時の工法により、原寸大で復元されている。

表通りには、風呂屋、小間物屋、町の会所・火の見櫓が、路地に入って裏長屋が、それぞれリアルに再現され、天下の台所と呼ばれた往時の賑わいや、落語でおなじみの熊さん、八っあんの暮らしぶりが、一日の移り変わりと共に体感できる。

また８階には、近代大阪のフロアとして、川口の居留地に始まり、船場の町家、郊外の近代長屋を経て、高度成長期の団地に至る明治から昭和にかけての大阪の住まいと暮らしの変遷を、本当に精密な模型を使って、物語形式で再現する展示などがある。

街の魅力は、そこに住む人々の生き生きとした暮らしにある。時代と共にその形は変わるが、変わらないなにものかがある。そんなことを実感させてくれる本格派のミュージアムである。

さあ、浪速見物に参りませう。

大阪市住宅局理事

ジャカランダの樹の下で

上田　信也

数年前から暫くの間、ケニアのナイロビの大学にて教壇に立った経験がある。赤道直下にもかかわらず、海抜1700ｍで水の豊富な（エンカレ・ナイロビ＝冷たい水）この首都は、100年前の英国人による鉄道敷設用キャンプに始まる。かつて、フランクフルト・アム・マイン市の建築監を務めたCIAMの立役者の１人であるエルンスト・マイは、ヒットラーを逃れロシアで数年間活動した後、戦前のナイロビに事務所を構え、今尚住まわれているデラメア集合住宅などを残した。これら植民地時代の街並みと高層建築が今や混在するダウンタウンでは、ジャカランダが紫色の花を咲かせ、毎秋訪問する客人を迎えてくれた。

樹の下には、物乞いが多く並び、市民は彼等に施しをする。生業の一つとして社会に定着している物乞いは、東アフリカの伝統的社会の底流にある相互扶助の精神であり、強者が弱者を助けることが社会のあらゆる活動に浸透していると考えられる。筆者のかかわった建築学科６年生の卒業制作研究に於いても、孤児、エイズ患者、精神障害者など社会的弱者に対し、建築は何が出来るかと問う試みが多くあった。限られた調査手段と乏しい情報量にも拘わらず、社会に建築の原点を求め、それを三次元空間に昇華させようと試行するのが彼地（かのち）の青年である。器用にプレゼンテーションをこなす此地の青年の制作を見るにつけ思い出す紫の花である。

大建設計取締役京都事務所長

Earth Sweet Home

木村　宗光

今では、環境共生住宅なる名称はどこかで目にし、その意味するところもなんとなくではあっても通じるものと思われるが、この言葉が出来た当時は、これを耳から聞いただけでは環境強制住宅と当ててしまう位で、それもそのはず新しい造語であった。この言葉の誕生した由来は、今を溯る10年前に国が音頭を取ってスタートした研究会に始まるのである。そして更に意外なことに、この名称は商標登録されているのである。

そして、地球温暖化を防止するため様々な手法が研究されたが、その中で大きなウエートを占めるのが住宅の省エネルギー化であり、住宅の高断熱化、高気密化が進められた。これらの対策は、また一方で新しい課題を我々に提供しているが、事実、建物の性能が向上し、随分住み心地が良くなったのである。しかし、人々の快適性に対する要求のレベルは、今後益々向上し、その留まる所を知らないのではないかと感じる。この悪循環を断ち切るにはどうすればよいのであろうか。それには、この様なライフスタイルの流れを変えることこそが、これから必要なのではないのかとさえ感じる。

ここで、あるＴＶのインタビューシーンを思い出した。著名な建築家の設計によるコンクリートと大きなガラスで作られた住宅の依頼人は、その出来映えに大いに満足をしていたが、ただひとつ冬は寒くて困ると言う苦情に、その建築家は、セーターを一枚余計に着て下さいと答えていたのが印象に残っている。

大和ハウス工業㈱取締役

現代の日本の空間、文化を探る

―見える和風、潜む和風―



妙心寺大心院

総論１．不易流行―日本的なるものの重力―／加藤　力

総論２．日本人の住空間―住宅、インテリアの視点から―／宮内 悊

―見える和風、潜む和風―

各論１．イス坐・ユカ坐／沢田　知子

各論２．住宅の間取り―欧米と日本の住宅プランの比較―／大江　孝十本山　仁

各論３．アメリカのオフィススペース／松岡　昭吾

各論４．門、塀―見える和風、潜む和風―／古川　修文

各論５．日本の入浴文化とユニットバスルーム／南金山　崇

コラム　次世代へ手渡したい「日本的なもの」あるいは「和風」／ペリー史子

企画

インテリア・住宅分科会

総論 1

不易流行——日本的なるものの重力——

加藤　力

京都工芸繊維大学助教授

1．はたしてこの生活は幸せだったのか？

明治以降特に戦後、日本はただひたすらに西欧の生活文化と様式とを摂取し、それを取り込むことに邁進し、疑いすらも抱かずに、わき目も振らず走りつづけてきた。だが、二十世紀を終わってみて、日本人と日本の社会にとってそのことがはたして本当に良いことであったのか、あるいは幸せであったのか、という点において反省や疑いの念がいま持たれはじめている。全てを西洋化すれば、日本の社会は豊かに、そして日本人は幸せになれるというのは、あるいは間違いだったのではないか、と気づきはじめたのだ。かねてから、はぐくんで来た日本人の日本的生活、すなわち和の生活とその様式のほうが現在の洋風化の生活よりもはるかに豊かで、上質であったのではなかっただろうか、といった懺悔にも似た声があちらこちらからしきりに聞こえはじめている。和の空間や生活の見直し、復権、再建、が至るところで巻きかえされそうになっている。一体、それでは日本人が心の奥底で求めてやまない和の生活と空間の本質とは何であろうか？　ここでは、インテリアという狭義の生活環境分野にその焦点をしぼって、この課題について論考を試みたい。

ところで、日本におけるインテリアと生活の中での洋風化の流れを戦前と戦後とに大きく分ければ、きわめて明確な違いのあることが分かる。明治以降の洋風化は皇室や政府を中心とした上流階級、もしくは国家という枠組みを前提とした言わば上からの洋風化の風であった。しかし、戦後のそれは、一般庶民を核とした下から沸きでるような洋風化の嵐のような風であって、戦前のそれとは全く意味の異なるものであった。問題の本質は常に、庶民・一般の人々の動きのなかに在る。したがって、ここでもそちらに焦点をしぼる。

2．「インテリアの発見」—それが意味すること

日本の洋風化を象徴的に表わすことが、戦後の公団住宅のDK（ダイニングキッチン）の出現であった。DKの採用を契機に、一般庶民の生活の中でもイス座のいわゆる洋風化の生活が始まった。それまで、一部特権階級の間でしか見られなかった椅子やテーブル、ベッドなど洋風家具を用いる生活の仕方は、またたく間に日本人の生活を席巻し、そればかりでなく日本人の意識をも変えていった。この椅子座の生活様式は部屋の用途を厳しく限定・固定化して、公私室の分離を促し、日本人の住まいと住まい方をかえた。結果として日本の生活空間の中に「個室の概念」を植え付けて行ったことは、周知の通りである。それまで、日本人の意識と日本の一般生活空間の中にインテリアという意識は殆んどなかった。だが、個室の出現と、インテリアエレメントと呼ばれる椅子やテーブル、カーテン・カーペットなどを持ち込む洋風の生活様式は、日本人の中にインテリア意識（しつらえ意識）を植え付けた。また部屋がそこに住む人間の個性を表出する手段たりえることに、間もなく気がついた。

戦後、日本人はしばらくの間、お仕着せのインテリアを黙って受け取っていたものの、やがて、日本人は自らの住まう空間においてダイナミックに自分自身を表現する術を持ちはじめた。すなわち「インテリアを発見」したのだ。このことは多くの壁面で構成された閉鎖的な都市型住宅であることも室礼（しつらい）の上で幸いした。これによって、インテリアコーディネーターやインテリアプランナーなどのインテリアの専門職種も生まれた。住宅にしろ建築にしろ器としての建物があって、はじめてインテリアが存在すると、誰もが思っていた。ところが「インテリアの発見」によって、そのことがいささか疑わしいことに生活者ははじめて気がついた。

3．インテリアが欲しいために人は住宅をつくる

器としての建物の役割は、確かに人間の身体や財産を外界から厳然と分け隔て、自然の脅威や外敵の攻撃から守ってくれる。建物はシェルターであることに間違いはない。それに対してインテリアは人間の身の周りの安全や快適、便利さや健康を直接的に保証・担保してくれるものである。そしてなによりも住宅のインテリアは、そこに住む人の個性を表現する場でもある。より良く住むために、より快適に暮らすため、そしてより個性的に生活するために、自らの住まいは存在する。そのことに日本人は気がついたのだ。生活者の住意識は変わった。住宅は快適の時代とか、成熟市場とか言われるが、意味はそのことにある。今、時代はインテリアが欲しいために住宅をつくる季節を迎えた。だがそのことに一番気づいていないのは、造り手の方である。相変わらず、器としての住宅ばかりを追い続けている。売らんとしようとするばかりだ。そこに住宅や建築のどうにも言い難い閉塞感・停滞感がある。造り手は、未だインテリアを建物の副次的なものとしか捉えることが出来ないままでいる。

何度でも言おう、人はインテリアが欲しいがために住宅をつくる。それなのに、相変わらず、器としての住宅ばかりが造り続けられている。無理して過度な性能や仕様を付加して器としての建物づくりにこだわり続けている。本当のところ、生活者のまなざしはもはやそんなところには無い。それでは生活者にとって、インテリアとは何であろう。端的にそして誤解を恐れずに言ってしまえば、インテリアとは生活である。生活に漂う空気であって、それは目には見えない空気のような存在である。

4．シックハウスの問題とは何であるか？

戦後の日本人の生活と家屋の洋風化は生活者に「インテリアの発見」をうながし、「住まうことの意義」を問いかけた。だが、快適なはずの洋風生活は、同時にさまざまな問題をも日本人の中に投げかけた。シックハウスの問題もその一つではないか？かって、日本の家屋は夏を旨とし、開放的、通気性・喚気性に優れたものであった。ところが、戦後、日本の住まいは壁で囲まれ、閉鎖的で、外界とは断絶された洋風の都市型住宅となった。また、生活も洋風化に伴なって、局所暖房から省資源化とは程遠い部屋全体の冷暖房を必要とする暮らしとなった。それでありながら近年、一方では省エネ化が叫ばれ、あれほどまでに風土・気候に合ったいままでの日本の家屋をあっさりと全否定。すき間もない高気密、高断熱住宅が良いとされ、一斉に造られ売られ、生活者はそんな家に住まざるを得なくなった。その上、早く安くつくるために乾式工法の、合板やビニールクロスが多用されたいわば接着剤漬けの家である。ホルムアルデヒドが放出、拡散、充満、密閉されて、こんな接着剤仕様の家が室内空気汚染を起こさないでいられようハズもない。

かってのような、開放的、通気性の良い日本の家であれば、何も問題はおこらなかった。だが、空気の逃げ場の無い家では、例えは悪いが、ガス室に入れられたと同然である。性能は確かに向上したものの、誰がこのような家を望んだであろう。生活者の望んでいるものは、見栄えのよい家ではない。性能の完備した家でもない。生活の周辺に漂う幸せな空気の家なのである。シックハウスが今、問題となっているのは、実はこのことを象徴的に物語っているのではないか。

また、阪神大震災からも学んだ点は大きい。家具が転倒、テレビや物が飛んできて怪我人が多数でたと言う。考えれば、かっての日本人の住まいは、母屋と言う人の住まう空間と、蔵と言う物の仕舞う空間とが厳然と使い分けられており、住まいこなされていた。人の住まう空間には必要最低限の物しか置かず、多くの生活品は蔵にしまっておき、季節・行事に応じて引き出してきて使い、身の周りはスッキリ、シンプルに暮らしてきた。そうであれば、地震で家具が人の上に倒れかかる、などということは起こりえなかった。しかし、西洋化の生活は、人と家具や家財が一つ部屋のなかで、一緒に暮らすことを意味する。これであれば、地震で危ないことは分かりきっている。すなわち地震による室内の惨劇は起こるべくして起こった災害で、かっての日本人の生活の中では、考えられだにしなかったことである。このような反省・後悔は他にも指摘を待たない。

日本人は戦後、洋風・様式の生活が、何か良いものであるかのように、それをひたすら手に入れようと努力してきた。だが、それには何処か、何かに落とし穴があって、そうそう良いものだけを簡単に手に入れようとしても難しい。とりわけ、人間の住まいは長い、長い年月かかって生活・慣習や風土・気候、それに工法・材料などとの関係の中で試行錯誤を重ねて成立してきたものである。先人達の知恵や工夫の積み重ねは言い難い深みをもつものだと、近年つくづくと思い知らされる。不易流行。世の中には代わって行くもの、変わってよいもの、かわらないもの、換えたくないもの様々である。

5．日本は神の国でなくして何の国であろう

戦後、日本人の生活は変わり意識も変わり、そして環境も変わった。しかし、変わらぬ事のない日本人の奥底に流れる日本的なるものとは一体何であろう？　変わることのない遺伝子としての和の精神とは、何であろう。かって、「日本は神の国」と発言して、マスコミにさんざんに叩かれた首相がいた。しかし、あの発言を聞いて、国民の多くは決してそれほどの違和感を感じなかったはずである。この場合、日本人にとっての神とは、「自然に対する畏怖の念」である。大いなる自然に対する恐れ、おののきにも似た敬愛の気持ちが神という言葉になる。其処の山にも此処の川にも、草木一本にも森羅万象、やおよろずの神が宿っていると考える。家にだって、家の建つ土地にだって精霊が宿っていると考える。だから、正月にはどんなに小さくてもいいから七五三飾りをかざる。未だ地鎮祭を執り行い、建て前をする。最先端のビルの屋上にも小さな社を祭る。それに社寺仏閣の前に来れば、手を合わさないまでも、黙礼ぐらいはする。これが神の国でなくして何の国であろう。火山の噴火によって、島民全員が避難を余儀なくされる国である。グラッと一揺れの地震で、６千人余の人々の命が失われる国である。台風の到来によって、地域一帯が、水浸しになる国である。それらは他人ごとでない明日は我が身の国である。自然の力が、この国には常にはたらいていて、だから自然とうまくやっていかざるを得ない国である。

科学の力によって、技術によってこれらは克服できると、考えた。だが、一向にダメではないか。強いて云えば西洋化によっても、解決されると考えた。だが、むしろ悪い方向に退いていく。日本人の奥底にいつも在るものは、自然とのたゆたうこと無い一体観である。自然と対峙する西欧のそれとは、このところにおいて一線を画す。

6．和の重力と知恵が、これからの環境をつくる

環境の時代である。地球資源が枯渇すると、慌てふためいているが、散々に大量摂取を繰り返して、大量消費してきた挙句にこの結果である。しかし、歴史的にみれば、西洋文明を取り入れる明治の前の江戸の社会は、見事なほどの循環型社会を築きあげていた。自然と共に、自然と共生し、自然の恵みのなかで日本の文化の華を咲かせてきたのだ。むろん、その時代への反論もあろうが、「日本人の英知・機知が輝いていた時」でもあった。その輝きの裏に横たわっているのが、日本人のゆるぎない自然観である。自然に対する敬虔なる崇拝の念でもある。

今、日本は深い苦悩の中で喘いでいる。そのあえぎの中でさえもまだ、これ以上自然を凌駕・破壊・蕩尽・開発・享受・廃滅・凌辱の手が可能だと考えているふしがある。しかし、もう一方で、もうこんな事をしていてはいけない。これ以上、同じ繰り返しはやめよう、とする樵然たる自己矛盾的背徳の気持ちもあわせて混在する。このとがめにも似た気持こそが今、問題にしている自然とのつながり、日本的なものの底に存在するもの、すなわち和の重力である。これからの環境時代を乗り越えていく方途は、この非合理とでも言える、日本的なるものの中に在る。

（かとう　つとむ）

総論2

日本人の住空間 — 住宅、インテリアの視点から —

宮内 悊

拓殖大学工学部教授・工学博士

靴をぬぐ習俗と空間のデザイン

新しい世紀になって、生活はいっそう変化のスピードを増したようだ。移ろいゆく生活の襞の中で、「見え隠れする日本的なもの」「変わった生活の中で、変わらない部分は何か」について書きなさいーというのが編集委員から与えられたテーマである。

生活の中で移ろいゆく部分と変わらない部分の関係は、大河の流れにたとえることができよう。表面はせわしげにさざ波が立っては消えるが、川底ではゆったりとした太い流れがある。もちろんさざ波と川底の流れは無縁ではない。その川底の流れにあたる日本住宅の基層は何であろうか。

私は、その第一は住まいの中で「靴を脱ぐ生活」であると考える。下駄や草履を履いていた日本人が、靴を履くようになり、平屋の戸建て住宅が暖冷房完備の高層住宅となっても、家の中で履き物を脱ぐ習俗は遵守されている。今後、日本人は住まいの中で靴をはいて生活すると答える人はまずあるまい。

住まいの中で靴を脱ぐ民族は少なくない。隣国朝鮮半島の人々もそうである。しかしわが国では、靴をぬぐ場所に脱いだ靴をコンパクトに収納する下駄箱を備え、外から人を迎え入れるフォーマルな空間として洗練させてきた。それが玄関である。江戸時代、地域の民政を司った町名主を「玄関」と総称したというが、それは玄関を構えることを許された身分に由来し、玄関がフォーマルな住宅装置であったことを伝えている。

一日中靴を履いて過ごす国々では、靴を脱ぐことに独特のこだわりがあるようである。幕末に来日した外交使節団とわが国との最初の交渉は、会議場で靴を脱ぐか否かであった。また戦前に来日したドイツ人の建築家ブルーノ・タウトは『日本の家屋と生活』の中で、上り段に腰をおろして靴を脱ぎ、その姿勢から上り段のうえに立ちあがるには「ちょっとした体操」が必要であった。そして村人が環視する中、夫人が靴をぬいで靴下だけになっている様子を「みじめで微笑まないわけにいかなかった」と述懐する。さらにB.ルドフスキーは、「靴をはかない清潔な床を礼賛しながらも、家に入る前に靴を脱ぐようにという注意には，あたかもボタン隠しを直しなさいとでもいわれたように——恥ずかしい感じがする。男性は，靴下のままでいると去勢されたように感じる。女性は，男達がその魅力の大半を携帯品預り所においてきたのではないかと思う。昼日中靴を脱ぐなどは言語同断で、ヨシワラやハレムを思わせる。靴をはいていない足は何となく感じのいやなもので，一般に淫逸を連想させる」と述べている。

つまり伝統的な欧米の暮らしでは、靴をぬぐのはベッドに入る時と入浴の時くらいのプライバシーの高い行為であり、靴箱は、衣類や寝具類を収納するワードローブなどとともに寝室の設備なのである。したがって欧米住宅のエントランスには下駄箱がなく、そうした家に住んでみると、靴をぬぐべきけじめがつかない。仕方なくカーペットの上にゴムテープを貼って、ここで靴をぬぎましょうと決めたのであるが、早速来訪した隣人はそのことに気づかず、字句どおり土足で侵入して来た。生活慣習の違いとはそんなものかも知れない。

空間のトランスフォーメーション

靴を脱ぐ生活では、戸外の泥やホコリを家の中に持ち込まず床が清潔なので、床を歩行面のみならず休息面にもテーブルや台としても利用することができる。そして可動な用具を出し入れすることによって季節や時々の生活の必要に応じてしつらいる。上田篤氏は、

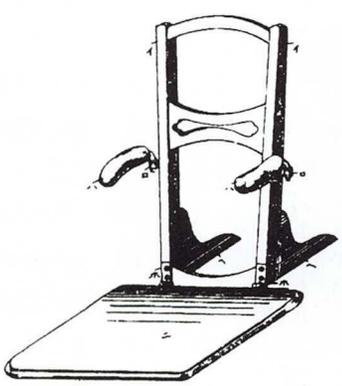


図1　日本の椅子の特許１号

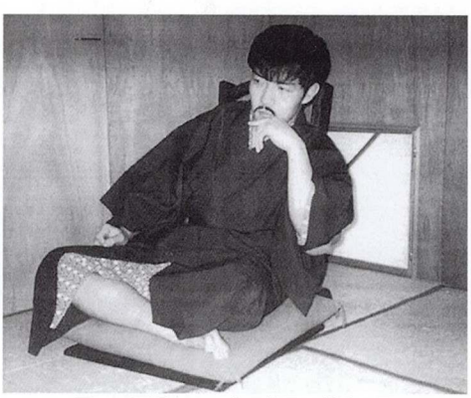


図2　再現した日本の椅子の特許１号

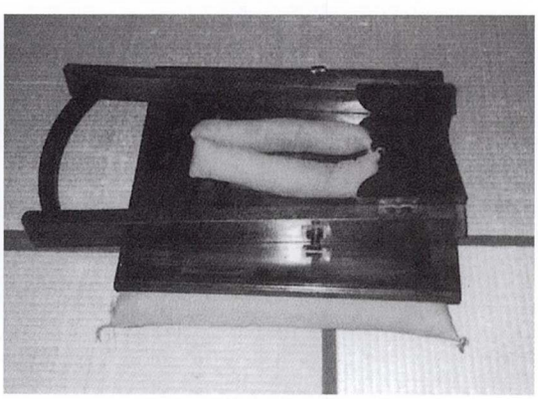


図3　同折りたたんだところ

このような空間構成法を「舞台装置型」と呼び、欧米の住宅は常に家具類を置かれている「博物館型」であると指摘した。「舞台装置型」の空間構成の歴史は古く、平安時代の『類従雑要抄』というインテリアデザインのテキストともいうべき本を見ると、手箱という用具が描かれていて、坐した空間が手箱から取り出した用具類によって、和歌集を読んだり、手紙を書いたり、化粧をしたり、香を楽しんだりする空間にトランスフォームさせたことが伺える。そして用具類を手箱にしまうと、また元の無性格な空間に戻る。

わが国のこのような住まい方は、明治期に入り、欧米の椅子やテーブルと出会っても続く。その様子を初期の特許家具にみてみよう。図1～3は、わが国の最初の椅子の特許（第563号「座椅子」（1888年・特許権者・木下裕、神奈川県三浦郡横須賀汐留町）を筆者が再現したものである。発明のねらいは「座上ニ於テ安楽ニ倚靠シ得ヘカラシムルニアリ」という。つまり坐って安楽に後ろによりかかれることをうたっている。そして背枠を支える持ち送りを廻すと、背と座は折り畳め、張りぐるみの肘掛もはずせるので、座椅子は容易にしまうことが出来る。椅子に関するその後の特許もこの種のアイデアが展開されていく。

一方、卓・机に関する特許の1号が図4～5「折込脚」（第692号、1889年・特許権者・成田麻次郎、東京府日本橋区蠣殻町、同・千代田仁兵衛、東京府本郷区湯島切通坂町）である。その主旨は「此発明ハ机卓等ノ片隅ニ附着スヘキ脚ニシテ其目的ハ机等ノ脚ヲ其裏面ニ折込ミ以テ運搬収置ニ便利ナラシムルニアリ」と述べられている。すなわち脚が旋回して折り畳め、起こすと2枚の脚が止め金によって連結して固定するというものである。その後の卓・机の特許も、このようなアイデアが展開され、1891年にはいわゆる「チャブ台」の原型といえる特許第1188号「卓子（折脚）」が公示される。つまり椅子、卓・机の最初の特許は、欧米のそれらから利便性を抽出し、これを床座生活に適応させるとともに狭小な住空間を効率的に利用するために、取り片づけやすくした考案である。

「舞台装置型」の空間構成法は、戦後しばらく続く。しかし、「チャブ台」がダイニングテーブルに代わり、家電製品が出現がすると終焉する。なぜなら家電製品は電源コード等が付いていて従来の用具のように取り片付けることはできず、そのスペースもない。むしろ食事はダイニングテーブルでとり、家事労働も立って行うという新しい生活像と合体して受け入れられた。そのための床材としてフローリングが普及していく。

しかし、そのような椅子坐志向は頭打ちとなり「洋室床坐スタイル」「フロアー・ライフ」「フロアー・リビング」などと呼ばれる生活様式が生まれる。すなわちフローリングを張った室内を床暖房し、あるいは温熱ヒーター付きの敷物を敷き、通常よりは低い椅子とテ



写真1　クラマタのテーブル・ジャパンインテリア

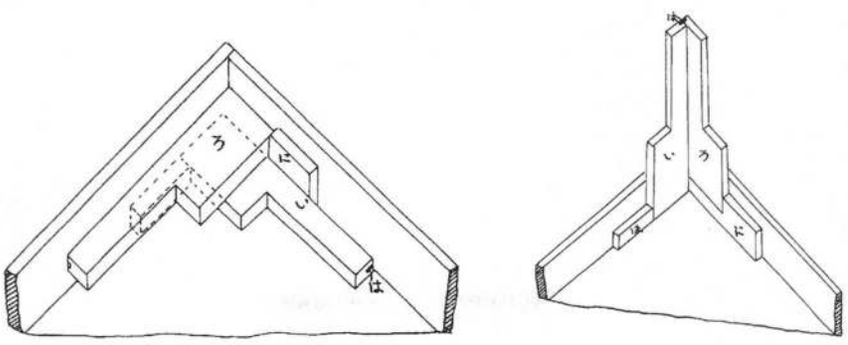


図4～5　日本の卓子の特許1号

ーブルを用い、オーディオ機器やＴＶ、ビデオ類をレイアウトした床の近くで暮らす生活様式である。彼らは、広々とした空間のもつ居心地のよさに気づく。便利な「博物館型」だが高さが低いので圧迫感がない。その空間で経時的に生活行為を展開させていく。その様子は、同一空間でいろいろな生活行為を重ねていくかっての空間利用法と似ていなくもない。積極的に言えば、空間の広さを重視して仕切らず、距離をとることによってプライバシーを確保するオープンプランニングへの志向性が認められるのである。換言すれば欧米の「博物館型」は、特定な機能を与えた空間を移動して生活する。新たな生活様式は、家具・家電製品に囲まれたという意味で「博物館型」ではあるが、いろいろな生活行為を経時的に展開していく方法において空間をトランスフォーミングしてきた伝統の継承であるといえるだろう。さらに１、２階を吹き抜け（アトリュウム）空間としたならば、豊かな空間が演出できるであろう。

清潔さの維持と精神のリフレッシュ

室内と屋外とを連続させた空間構成の手法は、日本建築の伝統であり、冒頭で述べた大河の底流の一つということができよう。それは居室ばかりでなく、浴室でも配慮されていた。かつて日本の豊かな人々は，庭を眺められる浴室をもっていて，入浴しながら，樹木や草花や潅木の四季折々の変化を静かに楽しんだのである。一方、近年の量産住宅をみると、耐水や耐震等に関する新しい建築技術によって、アウトドアリビングやガーデニングへと展開できるテラス、２階へ設けられたバルコニーなどが展開されている。じゅうぶんプライバシーが確保されているならば、都市での高密度居住であっても、かつての室内と屋外とを連続させた空間構成の復活が可能であり、楽しい浴室や温室も作ることができる。そうした空間は採光と通風をもたらし、生活を生き生きさせるに違いない。

B.ルドフスキーは『裏から見た現代住宅』の中で、欧米の衛生設備の歴史について解説するとともに、浴槽と便器を一緒にして寝室の付属物に堕したことを痛烈に批判している。彼によれば、そうしたのはキリスト教の牧師と医者であって、ローマの豊かな入浴文化がねじ曲げられたというのである。そして、西欧人もかつて暖かい季節には，屋外での入浴を楽しんだという。そして入浴が肉体を清潔に維持するだけにとどまらず、精神的にリフレッシュする効用もあることを力説する。その種類として、温水浴、蒸気浴、冷水浴、空気浴、日光浴などをあげる。直射日光に肌をさらすのではなく、空気にさらす空気浴は、冷水浴ほどのショックはなく健康増進に有効で、これを日光浴と組み合わせた戸外の部屋を提案している。

たしかに、湿度の高いわが国の夏を過ごすには、入浴はなくてはならない設備である。その空間が、そのまま前述した空気浴や日光浴を楽しむ戸外のスペースにつながっているならば、たいへん楽しいであろう。プラバシーが確保され、水を蒔き散らしてよい半戸外のスペースは、観葉植物を育てたり、星空を眺めたり、外気にふれ



写真２　屋上バス（提供　ナショナル住宅産業株式会社）



写真３　玄関（提供　ナショナル住宅産業株式会社）

つつ食事をしたり、さまざまな入浴法を楽しんだり、なにより子供たちから歓迎されるに違いない。

わが国の社会は高齢化し、都会的になり、これから自由な時間、楽しみの時間が増えていくことは確かである。しかし、住まいを拠り所としての人生であって、高いサービス料を払わずに旅行で味わった快適さや便利さ、楽しさを日々の生活の中に取り入れることに異論はあるまい。かつて日本人の豊かな入浴の楽しみを復活したいものである。ナショナル住宅産業㈱の「大空へと気持ちよくくらしを広げるアウトドアリビング」は、そんなことを予見させるコピーである。格子に護られて他人の視線を気にせずに、温水浴や空気浴、日光浴などが楽しめるとともに、浴後にお茶などで楽しい時が過ごせる。

“clean linen”と“darty linen”

清潔さは、生命の維持と本能的に結びついている。食物はもとより、身にまとうもの、さらには住む環境が不潔だと健康が損なわれるのではないかと心配になる。しかし、清潔さの基準はといえば、時代・社会・民族そして家庭によっても大いに異なるようである。

戦後日本人の瞼に焼き付いた映像の一つにマリリンモンローの入浴シーンがある。しかし彼女が、泡ぶくのバスの中からどのようにして上がり、着替えるのか、イメージできる人は少なかった。なぜなら床が、体に付いた泡を洗い流すようになっていないからである。そして日本人が海外旅行に出かけるようになって、バスルームを水浸しにした失敗談がしきりに噂されたものである。

もうふた昔以上も前になるが、筆者がロンドンに遊学した折りに、ある家庭に招待されたことがある。食事が済むと主婦はシンクに据えたバットに洗剤をため、その中で油で汚れた皿を洗う。しかしその後が違っていた。お皿を引き上げてステンレスの台に立てかける。つまり洗剤を水で洗い流さずに皿を乾かし、リネンでていねいに磨くのである。その様子から、やっとマリリンモンローがバスからあがった後の行為をイメージできた。日本人は風呂から上がるとき、石鹸を洗い流して手ぬぐいで水気を拭いた。茶碗も洗剤を洗い流してふきんで水気を拭く。一方、前述した主婦は、せっかく洗剤で洗ってきれいにした皿を汚い水で汚さないために厚いリネンで拭くのではなく磨くのである。ロンドンの水道には大量のカルキが投入されていて、食器を洗っても乾くと表面には白い粉末がキラキラ光って見える。そのことから洗剤を洗い流さない理由を納得したのである。

日本の某繊維メーカーの調査であるが、ドイツと日本の家庭が所有するシーツ、テーブルクロス、ふきん、タオル、おしぼり等の布類に関するデータを見たことがある。細かな数値は失念したが、ドイツの家庭の衣類の所有量は日本の10倍ほどであった。それらはいわゆるリネンと総称されるもので、中世以来花嫁が自分の衣裳とともに婚家に持参した歴史がある。今日でも結婚に際し、少なくとも1ダースのシーツやテーブルクロスを用意するという。当然のことながら住まいの中には、それらを整理して収納するスペースが必要で洗濯・乾燥室と関連づけて設備されている。

ドイツの家庭の几帳面さは、これらのリネン類をきちんと清潔に保持し、こまめにベットメーキングすることに表われている。

英語に“clean linen”,“darty linen”という熟語がある。前者は「家の中がうまくいっている」という意味であり、後者は「内輪のハジをさらす」という意味である。日々清潔なリネンでベットメーキングにはげむには、家族を思う心のゆとりがなくてはならない。それは平凡な日々の営みではあるが家庭がうまくいっているからに違いない。わが国でテーブルクロスを使わなかったのは、漆というすばらしい仕上げ材があったからかも知れない。それはともかくとして、清潔だといわれてきた日本人の生活ではあるが、かならずしもそうとばかりでもないようで、基準というものはきわめて相対的だということがわかる。

見え隠れする日本的なもの

日常生活の中に「見え隠れする日本的なもの」は何かという本題にもどろう。家の中で履き物を脱ぐ習俗はこれからも遵守されているに違いない。そしてそのことを基盤として、「博物館型」に設備された洋室の中で空間をトランスフォーミングする伝統を展開していくのではあるまいか。また進歩する技術に支えられて、半戸外を楽しむ生活を洗練させていくのではあるまいか。　（みやうち　さとし）

〔参考文献〕ブルーノ・タウト，篠田英雄訳，日本の家屋と生活，岩波書店1966，Bernard Rudofsky；Behind the Picture Window，日本訳，裏から見た現代住宅，小池新二，村山清訳，彰国社，1959。宮内悊，家飾具の歴史，第一法規出版，1989

各論 1

イス坐・ユカ坐

沢田知子

文化女子大学造形学部住環境学科教授

はじめに

住空間の内部形式は、「和室」と「洋室」に分けられる。「和室」には、和風の造作、和風のしつらい、ユカ坐の立ち居振る舞いが内包され、「洋室」には洋風の造作、洋風のしつらい、イス坐の立ち居振る舞いが内包される。本来、「和」と「洋」は、別個の形式として位置づけられてきたといえよう。ところで、日本人の生活様式の変遷は、一般に「洋風化」の流れと言われる。しかし、筆者の考察によれば、単純な「和から洋」への変化ではなく、紆余曲折をへて今日の「和洋混交」に至った。その要因として、「見える洋風化」の背後に、「潜む和風」の持続力を読み取ることができるように思う。

明治の上流階級における「ユカ坐・イス坐の併置」

明治期の上流階級の生活における「洋風化」には、ふたつの方向があった。ひとつは、天皇家や宮家の生活で、建物の形式は純和風でも、絨毯を敷き、土足で上がり、椅子・テーブルの食事、ベッドの就寝という、純洋風の生活をする方法であった。

一方、旧大名家や新興実業家の中には、「和洋併置形式」の邸宅を造るものもいた。岩崎久彌邸を例にとると、「和館」には、広間、家族の居室や食堂、使用人室、台所などが和風空間として造られる一方で、「洋館」は土足・椅子・テーブルの洋風空間となっており、一族の集まり・賓客を迎えてのパーティー、久彌の書斎などに使われた。食堂では、イギリス貴族のマナーに習ってフルコースの洋食がもてなされたという。「和」と「洋」の生活を別棟で営む、「ユカ坐・イス坐の併置」の形式である。

大正の中流住宅における「イス坐の啓蒙」

大正期に入ると、中流住宅にも洋風の導入が進むようになる。

日刊新聞「時事新報」の時事漫画欄を飾った風刺画に、北澤楽天の「日本人の二重生活」というのがある。結婚式と披露宴、花婿と花嫁、部屋と服装など、和洋ふたつの生活が並存する当時の世相を風刺的に描いており、興味深い。(図1)



図1　北澤楽天の時事漫画「日本人の二重生活」

一方、大正9年には行政側の拠点として生活改善同盟会が発足し、服装・食事・社交儀礼・住宅問題を含む広範な生活改善の方針が定められた。住宅改善の方針は、第一に「椅子式に改める」であった。座式の生活は非能率的で健康や衛生面でも好ましくないし、椅子式は世界共通の生活法だからという説明である。ただし、「靴草履のままで入ることはお勧めできない」とあり、スリッパを使う「上足のイス坐」が勧められている。

昭和初期の中流住宅における「ユカ坐・イス坐の折衷」

イス式生活への転換においては、服装が先か部屋が先かの議論、家具や暖房の問題などがあり、移行は容易なものではなかった。

大正末から昭和初期になると、和風住宅の玄関脇に洋風の「応接間」を設けた、「和洋折衷住宅」が普及する。先の改善方針では、居間・食堂などの日常生活の部分からイス坐を導入するよう勧められたのであるが、中流階級の人々が選択した方向は、日常生活に和室のユカ坐を温存し、非日常の生活に洋室のイス坐を導入することであった。(図2)

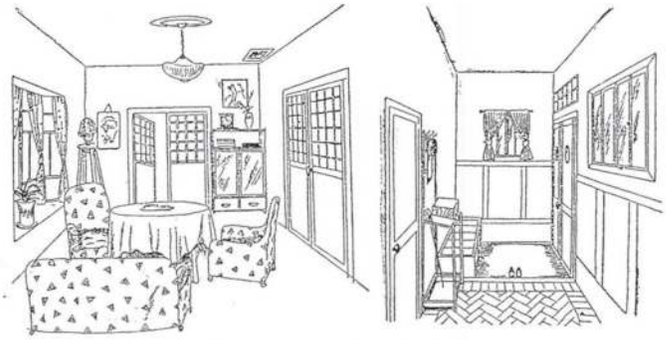


図2　和洋折衷住宅の「応接間」と「玄関」(『主婦之友　昭和3年2月号』「便利で住み良い模範的な中流住宅」の記事より)

また、藤井厚二は、『日本の住宅』を著すとともに、起居様式について、住宅の私的部分で坐式の生活をなお続けている人が多いこと、将来は椅子式に向かうとしても性急なイス坐化には疑問があることなどを主張した。

昭和6年には、建築学会のパンフレットにも「和洋折衷住宅」を肯定する文章が載る。西洋風のものなら何でも文化的であるとして心酔してきたことへの反省として、「椅子式と座式の併用による和洋折衷住宅は、住宅必然の本態である」との見解を示すのである。

さらに、第二次大戦下の状況に至ると、庶民住宅の方針においては、全室を畳敷とし、就寝室として転用することを可とした「ユカ坐容認」の施策が示される。

戦後の高度成長期における「イス坐の普及」

終戦後の日本は、420万戸という住宅不足をかかえる状況となった。一方、日本に駐留するアメリカ進駐軍の生活や、アメリカンライフの宣伝・啓蒙によって、洋風・イス坐生活への憧れがうえつけられる。

昭和20年代後半に始まった公営住宅の供給では、調理と食事を一体化した洋室が標準設計に採用される。イス・テーブルを用いた食事スタイルはまだ珍しく、洋室ではあったが、ここでちゃぶ台の食事をする光景もみられた。そこで、昭和30年から始まった公団住宅の供給では、ダイニングキッチンにテーブルを付設しておく事とした。(図3)

経済の好転により高度成長期が始まると、都市給与所得層のライフスタイルとして消費型生活が一般化していく。昭和30年代には「3種の神器」としてテレビ・洗濯機・冷蔵庫が導入され、昭和40年代に入ると「3C時代」といわれ、「カー・クーラー・カラーテレビ」が花形商品となった。加えて、応接セット・じゅうたん・ステレオ・ピアノなども憧れの商品とされた。こうした洋風の家財は、ダイニングキッチンに隣接する和室の畳の上にじゅうたんを敷いて並べられ、洋風の居間を形成する。こうした動向が注目され、洋風リビングのある標準設計として「nLDK」が誕生する。

ふりかえってみると、戦後の高度成長期には、終戦直後の欠乏状況の反動として高額大型商品への憧れ意識が強く、重厚な応接セットなどもその代表であったように思う。(図4)

低成長期以降における「ユカ坐回帰」

昭和50年代の低成長期に入ると、異なる動向が芽生えてくる。実際の生活を体験してみると、「ソファに腰掛けてくつろぐことはなかった」「場所をとることがいやになり、人にあげてしまった」など、イス坐家具を放棄する現象が生じる。このように、一旦導入したイス坐家具を放棄しユカ坐に戻る現象を、筆者は「ユカ坐回帰現象」と呼んでいる。洋風リビングでありながら、イス坐家具を放棄した室内には、再び「こたつ」や「座卓」がしつらえられ「洋室ユカ坐」の部屋が出現することにもなる。(図5)

家具メーカーは、こうした「和洋のミスマッチ」をヒントに、冬はこたつ、夏は座卓として使える洋風デザインの商品を開発し、「洋風こたつ」と称して市場を獲得する。「くつろぎのフロアライフ」がインテリア雑誌の特集となり、「カーペットよりはフローリング」といった自然素材への回帰も生じてくる。

今日では、ほとんどの住宅が洋室のＬＤＫ平面として供給されている。しかし、筆者の住まい方調査によれば、家具の保有状況の方は、イス坐家具に集約されることなく、ユカ坐家具も依然として堅持されている。(図6)

こうした変遷過程における和洋の体系の衰退状況を、筆者は「和洋混交」の極みと解している。



図3
日本住宅公団「牟礼団地」のダイニングキッチン



図4
大ヒットとなった応接セット「ベルサイユ」
(『マルニ木工創業五十年史』より)



図5
多摩ニュータウン集合住宅のリビングにおかれた「洋風こたつ」

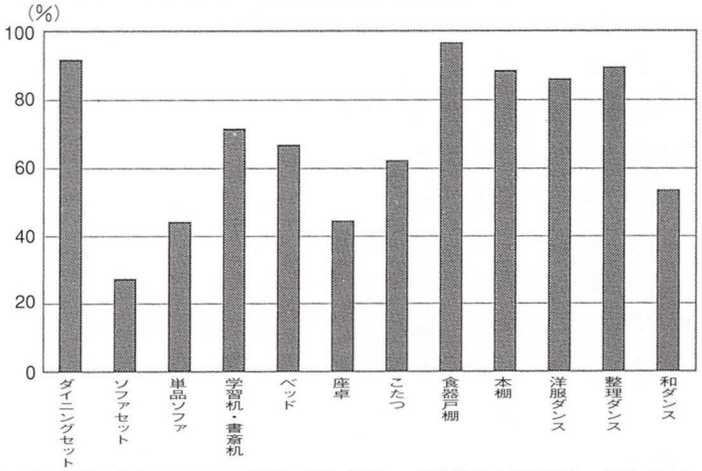


図6　集合住宅における家具保有状況(『新しい室内構成の汎用設計－家具の配置と住まい方に関する実態調査報告書　住宅・都市整備公団(1995年)』より)

おわりに

明治の「洋館」、大正・昭和初期の「応接間」、戦後の「応接セット」など、「見える洋風」は非日常の生活と結びついている。一方、日常の生活やくつろぎの場面などには「潜む和風」の強い持続力が働いている。生活様式の変遷には、「空間的・物的な洋の導入」と「立ち居振る舞いとしての和の慣習」のせめぎあいがあり、これによって今日の和洋混交が生じてきた。住居内では履物を脱ぐスタイル、これによって維持される清潔なユカ面、このユカ面の上に展開する立ち居振る舞いや物のしつらえ方などを、「潜む和風」の要として挙げることができると思うのである。　(さわだ　ともこ)

各論2

住宅の間取り—欧米と日本の住宅プランの比較—

大江　孝＋本山　仁

松下電工㈱住建分社住建デザイン室

ここでは現在の日本の住宅プランについて考察する。本来住宅の間取りとそれに伴う、しつらいとふるまいは暮らしの中で伝承されてゆくものであったが、近代以降の変化の中でそれらは伝承されるよりもその多くは捨て去られてきた。そういう状況下にあって、日本の住宅のプランの現状はどうなのか、日本独自の展開があるのかどうか、特にLDK空間に焦点をあてて欧米の住宅、昔の日本の住宅と比較しながら論じてみたい。

欧米の住宅の間取り

図1はアメリカの一般的な住宅プランの概念図である。

LivingRoom

Salonに近いもので、あくまでも客と共に寛ぐことができるしつらえのフォーマルな空間である。

DiningRoom

家族そろって正餐をとる場であるが、最もフォーマルな場であり客を招いて食事をすることが前提となる。家族であらたまった話をする時などもよくDinningRoomが使われる。

Nook、Breakfirstplace

キッチン脇にあり簡単に朝昼食をとる場でインフォーマルな空間。

FamilyRoom

家族がくつろぐ部屋。インフォーマルな空間で基本的には接客する場ではない。TV等もこの部屋にある。

部屋数が少ない場合、あるいは十分な広さが取れない場合はどうか。それでもDiningとNookは設ける傾向にあり、FamilyRoomとLivingRoomは1部屋にしてTV等はあるがフォーマルなしつらえにしてLivingRoomとしての性格を強める傾向にある。これは比較的住宅の小さい欧州にあてはまる傾向でもある。

図2はイタリアの住宅のプラン例である。ここではCucina（キッチンと簡単な食事テーブルのある空間）とSoggiorno（フォーマルなディナーができるテーブルとリビング的なソファーや椅子がある大きな1部屋）の関係がそうと言えよう。欧米では生活行為の「はれ」と「け」の分離が、フォーマル空間、インフォーマル空間としてプランに単純明快に落とし込まれていることがわかる。

過去の日本のプラン

昔の日本の住宅プランを一概に語ることは容易ではないが、その特長の一つに、行為によって部屋を明確に使い分けるために「はれ」の場と「け」の場の存在があった。

図3は田の字型プランの典型的な日本の民家である。

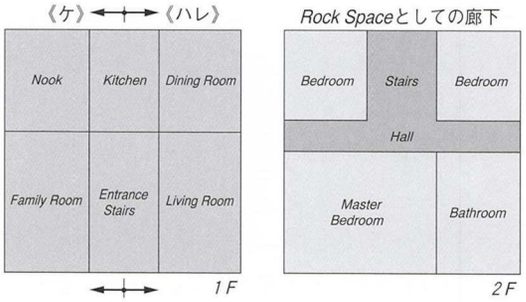


図1-（1）
アメリカの一般的住宅プランの概念図

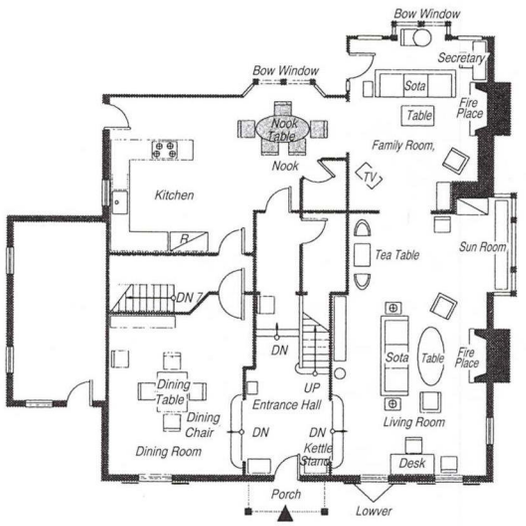


図1-（2）
典型的なアメリカ住宅のプラン

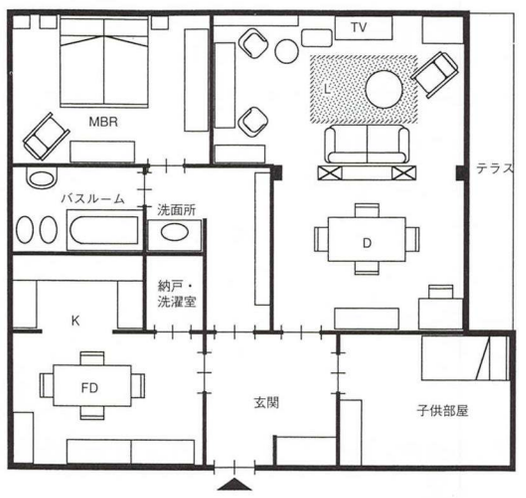


図2
イタリアの住宅プラン例

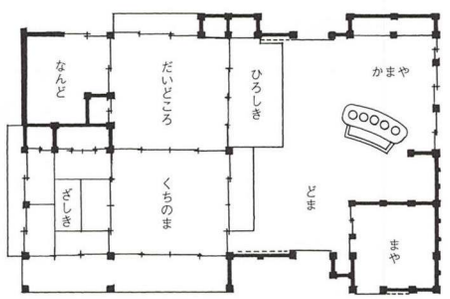


図3
田の字型プランの典型的な日本の民家

座敷

接客やまつりごとの為のフォーマルな空間。

だいどころ

家族が食事をしたりくつろいだりするインフォーマルな空間。

現在の日本の住宅プラン

nLDKプランについての是非は最近も盛んに論議されているようであるが、いまだに住宅の大半はその影響化にあると言っても過言ではない。現在の日本の住宅プランはLDK+nB＋和室の構成が主流である。(図4参照)

LDK

いまやLDKには、その構成からLDK、L+DK、LD+K、L+D+Kと様々なプランのパターンがあるが、共通しているのはLDKは家族がくつろいだり話したり、食事をとったりと日常生活行為の場として位置づけられるインフォーマルな空間であるということである。しかし実際は接客やもてなし、家族のセレモニー等「はれ」的な行為でもよくLDKが使用される。つまり「はれ」と「け」の行為が混在する空間であり、「ふるまい」と「しつらい」の不一致が起こりやすい。

和室

それに対してフォーマルな場は床の間付の和室である。接客やあらたまった食事、訪問者の寝室等多様で便利な空間として位置付けられる。しかし接客等「はれ」的な行為に和室が頻繁に使われず、場合によっては箪笥、衣装ケースなどを置くような納戸的な使われかたも実際には見受けられる。

プランの比較

一見全く違うようにみえる欧米の住宅プランと昔の日本の住宅のプランには、よく似た共通性がある。それは、「はれ」と「け」、フォーマルとインフォーマルの生活空間の区分の方法と使い方である。欧米では置き家具を使用するために部屋のしつらえは固定され、その結果、プランではくつろぐ場と食事する場は別々に設けられる。昔の日本の住宅ではくつろぐ場と食事する場が家具、道具で補設され1部屋で事足りる。という違いはあるが、フォーマルとインフォーマルな部分を明確に分けてそれぞれの場がプランされている事は共通である。座敷は「はれ」の場でフォーマルな空間であり、欧米の住宅で言えばLivingroomとDiningroomの役割を果たし、だいどこは「け」の場で家族の為のインフォーマルな空間であり、Family-RoomとNookの役割を果たした。(実際に座敷は英訳でFomalRoom、だいどころはFamilyRoomとされている。)

一方で現在の日本の住宅では比較的規模の大きい住宅であっても「はれ」と「け」、フォーマルとインフォーマルを意識したプランはなかなか見つからない。LDKと和室の性格付けはきわめて曖昧になったままである。一見洋風化していると考えられている日本の住宅も実はプランの概念という点では全く異なっている。雑誌等で見られるLDK空間のイメージ写真では、「家族対話型のインフォーマルなLDKプラン」＋「かなりフォーマルなしつらえのストイックなインテリア」であるが、常にフォーマルに維持するのは窮屈で大変努力のいることである。かといってインフォーマルなしつらえでは、客のもてなしや知人や友人を家に呼んで食事や何かをする機会が増加している昨今の事情を考えると十分対応できない。生活者が積極的に和室のくらしを望む場合はともかく、和室の持つフレキシビリティーにたよって解決を図ることだけでは、この混乱した状況から抜け出せない。住宅での生活に、来客やセレモニーのようなフォーマルな行為と家族で過ごすインフォーマルな行為がある事は古今東西共通のことで、それを前提に単純にプランされたものが欧米の住宅であり、日本の昔の住宅もまたそうであった。ところが現在の日本の住宅は「間取り」「しつらい」「ふるまい」がちぐはぐな状態に陥っている。食寝分離論からLDKプランへの発展はあくまでも戦中戦後の貧しい住宅事情を解決し、人が生活する住居の最低限のガイドラインを設けるための活動であった。決してLDKプランという普遍的なプランをつくるためではなかった。ところがいつのまにか、住宅が広くなった現在にあってもLDKプランは生活者と設計者の両者にとって呪縛となっている。



図4
現代の日本の住宅LDK空間

これからの住宅プラン

原口秀昭氏は「20世紀の住宅　空間構成の比較分析」において、『西洋の近代、日本の昭和は空間構成の時代であった（中略）近代建築では空間構成において合理性を欠く傾向にある』と述べている。確かに今の空間は合理性を欠いているが、豊かな空間性を実現する様々な仕掛けが可能であり、住宅空間も大変魅力あるものになっている。ドラマティックな吹き抜け、スキップフロア、外と内とを一体化するデッキなど空間構成手法は枚挙にいとまがない。

しかし、それに偏りすぎて「はれ」と「け」、フォーマルとインフォーマルの使い分けといった単純なプランの基本が見えなくなっている。今でも欧米の住宅の場合はドラマティックな空間構成よりも住宅のアーキタイプのほうが大切にされているようにみうけられる。

逆説的ではあるが、表面的な洋風化にとどまることなく、欧米の住宅プランの概念を理解し、そこから「間取り」「しつらい」「ふるまい」の一致する住宅プランを提案することにより、結果的には昔からある日本の住宅のよさを取り戻すことができると考えられる。

(おおえ　たかし＋もとやま　ひとし)

参考文献　A&I Report住宅設計64, 65, 66松下電工、原口秀昭「20世紀の住宅　空間構成の比較分析」鹿島出版会、平井聖「図説　日本住宅の歴史」学芸出版社

各論3

アメリカのオフィススペース

松岡昭吾

鹿島建設㈱関西支店建築設計部長

アメリカのオフィスを見ていく事で、逆に日本のオフィスの特徴や日本的な何かが浮かび上がってくるかもしれない。自分自身の体験を通し、アメリカのオフィスについて気がついたことを書いてみたい。

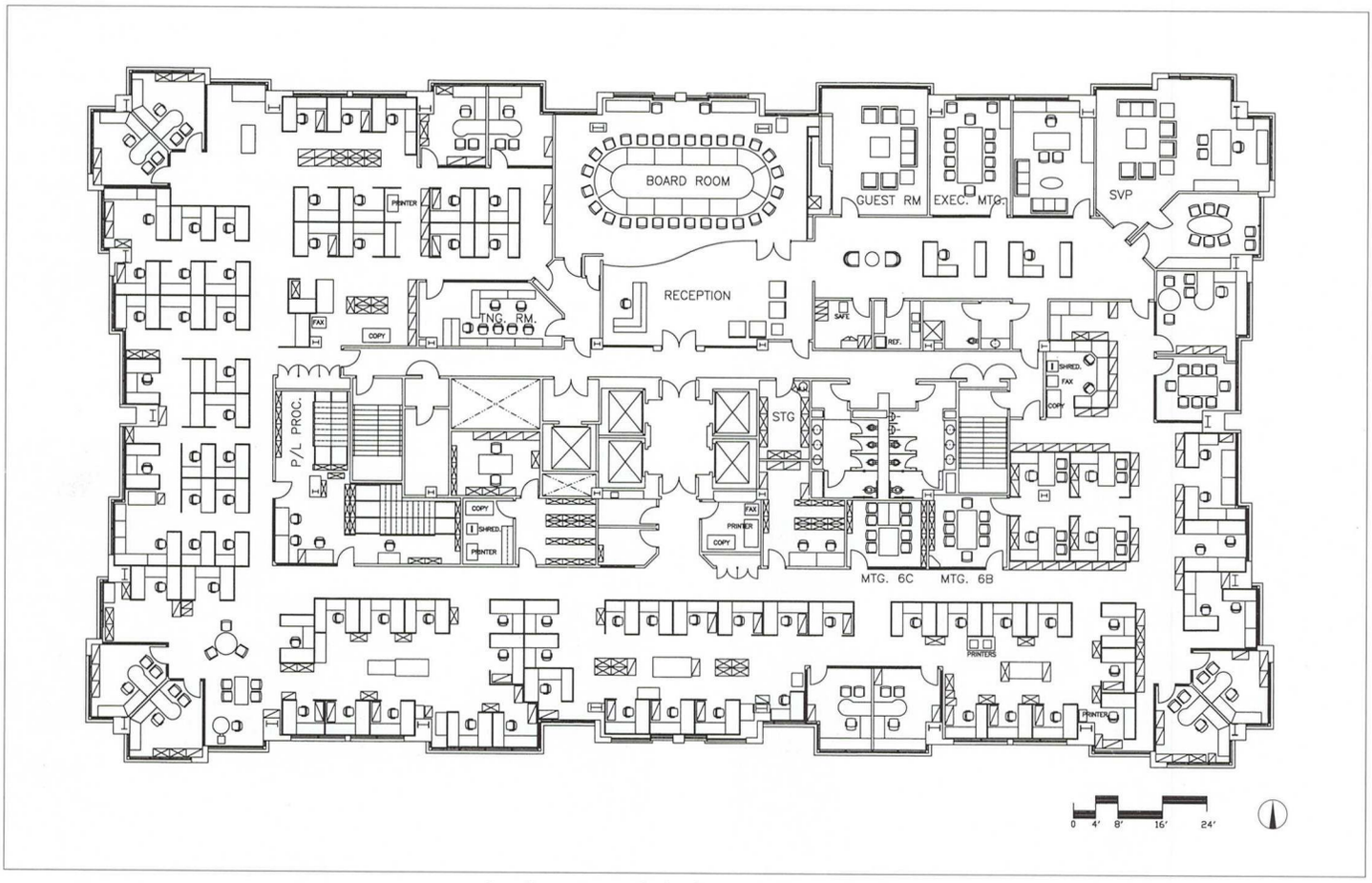
オフィススペースのヒエラルキー

アメリカのオフィスは本来個室スタイルが主流であったが、近年、個室部分が減少しオープンオフィスの比率が増えている。この原因は近年の執務スタイルの変化や、オフィススペースのフレキシビリティの確保、日本企業の完全オープンスタイルのオフィスからの影響、さらにオープンオフィスを支えるシステムファーニチャーの発達等が考えられる。とはいえ日本的な完全なオープンスタイルのオフィスは殆ど無く、オープンオフィスと個室の折衷が主流である。

アメリカでは課長ぐらいから上位の人が個室を持っているのが一般的で、個室を持てるということが彼らのステータスのシンボルになっている。アメリカの社会というと一見平等に見えるかもしれないが、組織の中ではヒエラルキー（日本的な年功序列ではない）がはっきりしており、色々な所でその階級差を制度化している。その一番端的なものがオフィスである。個室が与えられるかどうかは一番大きな分かれ目であるが、オープンオフィスでも机の大きさ、椅子の形、パーティションの高さ等々。また個室においては部屋の大きさ、壁やカーペットの仕上程度、そこに置かれる家具の数・種類とそれぞれ階級によって細かく差がつけられている。

一例をあげれば、

- 一般事務員のステーションのサイズは1.8m×1.8m、パーティションの高さが1.2m、肘掛の無い椅子。
- 主任クラスが1.8m×2.4m、パーティションの高さが1.6m、肘掛付の椅子。
- 係長が2.4m×2.4m、パーティションの高さが1.6m、肘掛付のミッドバックの椅子に打合せ用の椅子付。
- 課長から個室で3.6m×4.2m、肘掛付のミッドバックの椅子でグレードの高い生地貼りに打合せ用の椅子付。



オープンオフィスと個室の折衷タイプのレイアウト

・部長が4.2m×5.4m、肘掛付の革張りのハイバックの椅子に打合せ用の椅子、ソファーとテーブル。

勿論これは一例で、各企業がそれぞれのスタンダードを持っている。したがってオフィスに行ってその人のスペースを見れば一目でその人の会社における階級が分かる。

なぜこのように細かく、しかも目に見える形でレベルをつけるのかといえば、企業の中は厳然とした実力主義の階級社会で、各人の役割と責任が明確であり、その階級による待遇を誰にも分かるようにする事で彼らにモチベーションを与えている。従来の日本的年功序列の平等主義に根ざしたオフィスのレイアウトとは歴然とした違いが出ている。

執務スペースのプライバシーの尊重

もう一つの特徴は執務スペースのプライバシーの尊重である。

彼らとオフィススペースの設計で打合せをすると必ず出てくるのが、執務空間での各人のプライバシーという点である。個室であれば問題は少ないのだが、最近のようにオープンオフィススタイルが増えてくるとシステムファーニチャーのパーティションの高さや遮音性、通路からの席の見え方等、事細かにチェックが入る。

アメリカ人の仕事の進め方は日本人のようにお互いが協力・補完しあって仕事を進めるのではなく、自分の業務範囲を明確にしその業務を確実にこなし、他人の仕事には口をはさまないというスタイルである。

端的な例は電話への対応で、アメリカでは隣の席で電話が鳴ってもこれを取らない。電話を取っても隣の人の仕事内容を知らないわけで仕事の話には答えられないし、隣の人に代わって何か答えれば越権行為になる。もしプライベートな電話なら取る事がかえってプライバシーの侵害にもなりかねない。だから今アメリカのオフィスではヴォイスメールが大変普及している。

つまり各人がそれぞれの仕事をその責任範囲で確実に行う事が第一で、そのためには各人のプライバシーが守られなければならないと考えている。もし各人が確実に自分の仕事範囲をこなしているのに仕事全体で何らかの齟齬が生じたら、それはそれぞれの仕事の範囲を決めた管理者の責任ということになる。

つまり監督は監督、選手は選手というわけだ。

オフィスに表現される企業のアイデンティティー

三番目に、アメリカの企業はそのオフィススペースにも企業としてのアイデンティティーを表現する。受付やロビー、会議室、エグゼクティヴエリアには特に気を遣っている。オフィスの印象からクライアントがその企業のイメージ作り上げ、そのイメージがこれからのビジネスに大きく影響する事を重視しているからである。アメリカでは新しいオフィスへ移る際、ビル側から与えられるキャッシュ・コントリビューションと呼ばれる内装工事費で自分達のスペースをデザインする。日本のように出来上がったスペースに家具を持ち込んだら、次の日から仕事が出来るという訳にはいかない。つまりアメリカのオフィス空間はオーダーメイドで、日本のオフィス空間はレディメイドということになる。また、これは個人のレベルでもいえることで、アメリカ人は自分のオフィススペースに自分のアイデンティティーを表現する。別な言い方をすれば、自分のスペースに自分の体臭をつけると言った方が適切かもしれない。新しいオフィスで自分のスペースが決まると、真っ先にそこに家族や恋人の写真を飾ることから仕事が始まる。さらに個室の場合は自分の好きな絵や置物、各種の表彰状等を持ち込み「自分のスペース」を作っていく。

日本のオフィスは「畳敷きの大広間」

このようにアメリカのオフィスを見ていくと、日本のオフィスがオープンで階級差が少なく、職場でのプライバシーや個性を抑えた無機質なスペースである事に気がつく。例えて言えば、日本の事務所は「畳敷きの大広間」で仕事をしているようだ。どのオフィスも現代の畳のOAフロアーにお仕着せのスチール家具、規則正しいシステム天井、隣のテナントとの境は現代の襖とも言うべきスチールパーティションで簡単に仕切られている。大変フレキシブルだが無性格な空間である。これを日本的なオフィス空間と呼ぶべきか、あるいは単に貧しいオフィス空間と呼ぶべきか。

しかし、この現実には単にデザインだけではなく、事務所スペースのリースのシステムや制度の問題が関わっており、その障壁が取り除かれて自由に自分達のスペースを作れるようになった時、本当の日本的なオフィススペースが出来てくるのかも知れない。

（まつおか　しょうご）



家族の写真と趣味の海の写真で埋めつくされたマネージャーの個室



プライバシーを配慮したオープンオフィス

各論4

門、塀—見える和風、潜む和風—

古川修文
法政大学工学部建築学科助教授

門と塀

ここで改めて“門とは何か、塀とは何か”を云々する気はないが、しかし門や塀が題名の文である以上、多少は述べざるを得ない。

門という字は扉を表わしたものといわれている。中国の書物『東雅』によれば「両扉を門といい、単扉を戸という、されば門の字は両扉の形に象れるなり」と述べられている。日本でも平安時代中期の『倭名類抄』に「門は和名はカドで、出入りのために通るところで、門舎は六品以下の人や一般庶民は通ることができないところ…」とある。

塀はどうか。塀は国字であって漢字ではない。漢字には屏の字があるが、その意味は「門の前後に設け、内部から外を見えないようにする土べいのような目かくし」（長澤規矩也編、新漢和中辞典三省堂）であって、衝立か屏風のイメージである。これに最も近いのは沖縄のヒンプンである。日本では屏に土偏をつけて塀とし、家屋や敷地を囲う土塀や石垣、垣根の意味を持たせたものである。中国で日本の塀に対応するものとしては墻が最も近い。

さて、門も塀も人の住まいには重要なものであり、いろいろな目的や効用があるが、ここでは住環境の視点にたって述べてみたい。

なぜ人は囲うのか

新潟県に流れる阿賀野川の支流の一つに常浪川がある。この川は新潟県と福島県の県境を南から北へ向かって流れ、上川村を通って津川市内で本流の阿賀野川と合流する。今から10年も前、常浪川をどんどん上流にさかのぼって、人家などない杉の小道を十数kmも行くと、川のほとりに忽然と30戸ばかりの集落が現われたものだった。室谷集落であった。常浪川はこの辺りでは室谷川といい、川の名前も変わるほど辺境の地であった。新潟県がこの地に治水を目的にしたダムの建設を計画し、平成３年に室谷集落は全戸集団移転を余儀なくされたのである。

旧集落は川岸に出来たすり鉢状の地形にあって、中門造りの民家が並ぶいかにも日本の農村の伝統を伝える風景であった。家々は東に向かって並び敷地には塀や生け垣は全く無い。隣家との境は1本の木であったり倉が目印であったりするだけである。境界となるべきバリアは一切無いが、人々は道無きところを歩くようなことはせず、隣家に行くにしてもたとえ多少遠回りであっても道として決められた所を歩いて行く。各家は囲いも境界線もないのに、あたかも各家が塀で囲まれているが如く、行き来する。そんな生活習慣が先祖代々から続いてきたのである。

さて、その集落が、一瞬の期間に滅失し、わずか500m離れた高台に新たに再生された。それまでの中門造りを基本としていた各家は、その拘束から解放されたかのように各自自由な家を選択した。外観も間取りも様々なものが出現した。一つの伝統的集落が集団移転をして、滅失したもの、継承したもの、再生したもの、新生したものは何か、人々はどのような考えで、何を選択したかを見ると、極めて多くの教訓や示唆が内包されている。

ここではそれを言及するつもりはないが、屋外の景観に現われた最も顕著な変化は塀や生け垣が出現したことである。なぜ「囲う」という意識が生じたのか、移転前に全戸を対象にしたアンケート調査の中で「新居では塀や生け垣を作る」と回答した家は一軒もなかったが、しかし移転後８年経って27軒中11軒の家が囲いを作っている。その理由を尋ねたところ「隣の家が近くて気になる」、「除雪する範囲を明確に区切るため」などというものであった。生活様式の変化が人々にして囲うという意思をもたらしめたのであろうが、経済的、物質的あるいは文化的といってもよいかもしれない向上は、一方では運命共同体的意識で続いてきた集落が個人主義に変わって行く方向に向けられ、その現われの一つが「囲い」の出現となったのである。

たかが塀、されど塀 —囲いは環境を変える—

沖縄本島から西へ80kmほどのところに渡名喜島がある。そこの渡名喜集落は各家の敷地を道路より１mも掘り下げて石垣で囲い、さらにゴムの木に似た厚い葉を持つフクギで四周を囲っている。暴風から家を守るための知恵である。道路に立って敷地の中を覗くと、目の高さに赤瓦の屋根が見えるが、集落の中はまるでフクギの林の道を歩いているように見える。石垣の石は珊瑚の自然石で、昔、海へ行く度に一つずつ運んで積み上げて作ったという。集落の道には海から運んだ白砂がまかれていて、白い道とフクギの緑と空の青、海の青さが訪れる者を強烈に魅了する。人々は夕方、道の白砂を箒できれいに掃き清める。一日の歩行で汚れた砂に感謝をこめて丁寧に箒目をつけているようにもみえる美しい習慣である。

しかし聞くところによるとこれはもっと現実的な理由から始まったもののようだ。渡名喜島は毒蛇のハブが多く、日中は石垣の中に潜み、夜になるとハンターに出歩く習性を持っている。朝になってハブの歩いた痕跡が砂に残り、ハブの住処を見つけて退治する知恵として生じた習慣であったという。ところがハブの住処をなくそうという名案が出て、珊瑚石を積み上げた石垣を撤去し、代わりにコンクリート塀を作ってしまった。ハブは住処を追われて退散したが、

代わりに予想外の現象が起きてしまった。風が吹く度に道の白砂がコンクリート塀を乗り越えて家の中まで入ってくるようになったのだ。珊瑚の石垣はハブも住処にするほど隙間だらけである。風が吹いても隙間を通して風の出入りが行われる。多少の砂は石垣の中に入るが、雨が降ると再び道に流れ戻される。石垣は呼吸ができる機構である。それに対してコンクリートは風を一切通さない。風は行き場がなくなって白砂を舞い上げながらコンクリート塀を乗り越えて行く。今はハブはいなくなったが、人々には夕方、道をはき清める習慣だけが残った。

コンクリート塀といえば今一つ申し上げたい例がある。四国の室戸市の太平洋岸に点在する集落は凡そ1.8mもの高さの石垣を構えているところで有名である。川や海から運んで積み上げた石垣は見事なもので、その天端に母屋の屋根だけが顔を出している風景はいかにも強風地域で真摯に生きる人々の心情が伺える。

しかし、今はその風景が大きく変わっている。石垣は地震に弱く、コンクリートは石垣ほど厚みを必要とせずしかも高くできるという理由でコンクリート塀に変えた家が増えている。だが、ここでもコンクリート塀は居住環境を変えてしまった。

昔はどこからともなく涼しい風が入ってきて、夜は蚊帳を釣って寝てもクーラーなどは要らなかったというが、コンクリート塀に変えた家は不思議なことに風の流れが悪くなり、しかも真夏はコンクリートが熱せられて、その放射熱で暑くてたまらないということであった。それを解消するため、母屋はコンクリート塀から遠く離し、前庭を作った。そして母屋は二階建てに変わった。高いコンクリート塀の奥に、立派な庭と現代風の二階建て住宅がある。塀は長く培われてきた空間構成や住環境、風俗習慣まで変えるのである。

吉田兼好が「家の造りやうは、夏をむねとすべし」と述べているように、日本の住まいは空気の流れを妨げない開放的造りが基本である。まさに住まいは自由に呼吸をしているのである。

これは家屋に限ったことではない。日本の囲いは外部と内部を完全に遮断はしていない。垣根にしても板塀にしても、土塀であっても、視線すらも完全に遮断するものではなく、ましてや空気の流れにおいては自由に出入りできる機構である。動物だけでなく建築においても呼吸を止めることは死を意味することである。

和風とは何か

さて、和風とは何か。和が日本で洋が外国という意味ならば、私は和風などというものはないと思う。和風とはその土地土地の長い歴史によって培われてきた伝統こそ和風だと思っている。例えば沖縄の住宅に建仁寺垣を持って行ったとしたら、それを和風と見る人はいないであろう。和風は形でなくその土地に根ざした心である。

（ふるかわ　のぶひさ）



写真１　さんごの石垣はコンクリートに変わった（渡名喜集落）



写真２　100年以上の歴史のある石垣には風格がある（室戸市）



写真３　囲いは住環境を変える（室戸市）

各論5

日本の入浴文化とユニットバスルーム

南金山　崇

東陶機器㈱浴室開発部部長

Ⅰ．日本の入浴文化

ここ数十年、技術や生活の変化に合わせて住宅あるいは住宅設備は大きく変化してきた。浴室も同様で、在来工法に替わってユニット工法が主流になるなど技術的にも大きく変わってきたが、使用者である我々の生活変化はそれを上回るものがある。

そこで今回は、浴室と入浴文化という視点でいわゆる「日本的なもの」といわれるものの「今」と「今後」、および入浴に最も関わりの深いユニットバスルームについて考察してみることにする。

日本的なるものとは

日本的な入浴スタイルと言われて、五右衛門風呂を思い浮かべる人は最近はさすがに少ないと思う。普通は湯舟から大量のお湯をあふれさせながら一気に湯につかり、“アー”や“フー”などのため息をつく光景ではないだろうか。このようなことも含め、日本人の入浴スタイルが欧米諸国と大きく異なっている点を挙げてみると、概略次のようなところに集約できると思う。

●湯舟と洗い場が分かれている。
●深い湯舟に首までつかって温まる。
●浴室は一つで家族全員が同じお湯を使用する。
●主人や家族が先に入浴、主婦は最後。

日本人なら誰でも当たり前と思っている入浴スタイルだが、「日本的なもの」を理解するためには、これがいつどのようにして形成されてきたのかを知る必要がある。

日本的なるものに至る背景

そもそも、一般の庶民が湯につかるという入浴スタイルになったのは、日本の長い歴史の中では比較的新しく江戸時代中期以降である。それまでは、寺院や一部の特権階級層がたまに使用する程度で、しかも湯ではなく蒸し風呂形式が多かったとされている。というのも、湯を沸かすには燃料の木材が大量に必要であるがそれを集める手間がかかり過ぎるという点にあったようである。

一方、庶民の方はというと都市部での火事を嫌った幕府が一般家屋における浴室の設置を厳しく制限したため、自宅に浴室を持ついわゆる「内湯」が普及せず湯につかることは少なかった。そのため庶民はもっぱら川や池で、あるいは行水で汚れを落とすのが一般的であった。ところが、江戸時代中期以降になると銭湯という形で公衆浴場が設けられるようになり、これを機会に庶民が湯につかるという生活が一般にひろまっていった。多人数で使用する銭湯では当然のことながら、“湯舟につかって温まる”“身体は洗い場で洗う”というスタイルにならざるを得ず、それがそのまま一般的な入浴方法となっていった。

さらに時代を経て、いわゆる内湯という形で自宅に浴室をもつ層が一部の商家などを中心に広がっていった。このような家では商いが終わった後、家族が続けて入浴をするのが一般的であった。続けて入るのは燃料節約や保温手間の関係から手早く済ます必要があったからである。入り方もまず主人が先に女房はいわゆる「仕舞い湯」として最後に入るのが普通であった。これもそれまでの封建的な家族観に基づいて自然に形成されていった。

以上のような過程を経て、いわゆる欧米とは異なった入浴文化が形成され、昭和時代まで受け継がれてきた。

家族から個へ

しかし近年、特に昭和50年代以降都市部の家庭を中心に大きな変化が見られるようになった。それらを挙げてみると、

●順序も時間もバラバラの入浴。（以前は家族が次々に入浴していたが、最近はバラバラで最初と最後の入浴者との時間差が6時間を越える家庭も5％以上はある。）
●シャワーのみで済ませ、湯舟には入らない。（20代の20％は年中シャワーのみという生活になっている。米国では30％を越える人がシャワーのみ）
●夜ではなく、朝出かける前にシャワーや入浴をする。（朝シャワーの人も20％を越えている。ちなみに米国では75％の人が朝シャワー）

以上のような入浴スタイルの変化要因としては、長距離通勤・通学者の増大等による帰宅時間の変化、共働き世帯の増加、経済の24時間化に伴う夜型生活化、あるいはシャワー設備の普及でいつでも入浴できるようになった事などが挙げられる。しかし、最大の理由は家族というもののあり方が変化してきているところにあると思われる。いわゆる家長である父親を中心として生活を営んでいた日本的な家族という形から、生活スタイルの異なったそれぞれの個人がまずあってそれらが家族を構成している、というような意味に変わってきているからと言えるのではないだろうか。

Ⅱ．ユニットバスルーム

最近では、ユニットバスルームをおいては入浴文化を語ることができないほどポピュラーな存在になってしまった。ここでは、入浴文化とユニットバスルームについて少し考えてみたい。

先述のように昭和50年代以降都市部の家庭を中心に浴室の使われ方に大きな変化が見られるようになったが、これと軌を一にするように一戸建住宅へのユニットバスルームの普及が始まった。普及し始めた当初の理由はもちろん先に述べた入浴文化の変化というようなものと関連があったわけではない。しかしその後、当初の意味を超えて日本独自の物としての進化を遂げつつあるが、これについてのちほど説明をしたい。

当初のユニットバスルーム

ユニットバスルームは、昭和38年大型ホテルの現場向けとして日本で始めて開発された。これは、在来工事の中でも特に手間のかかる防水工事やタイル貼工事等の省力化・工期短縮を狙いとしたものであった。その後、施工面の優位性が評価されて集合住宅にも徐々に採用されるようになってきた。(写真１)

昭和40年代後半に入り、一戸建住宅にも一部採用され始めたが、実際に使用してみるとその防水性の高い特性から木造建築の躯体・土台などへの悪影響がほとんどないことが高く評価されるようになってきた。というのは、それまでの在来施工の浴室では、躯体のゆがみなどの原因による仕上げ材のタイル・目地あるいは下地材のヒビ・亀裂からの湿気の侵入を防ぎきれず、土台などの建築躯体の傷みにつながることもあったからである。

ユニットバスルームの進化

このように、省施工・短工期に加え防水性の価値も評価されるようになったユニットバスルームは、全ての建築物の浴室で広く採用されるようになっていった。ただ、当初のユニットバスルームは単に在来浴室をユニット化したという趣が強く、いかにもプラスチックといった感じの仕上材か、あるいは従来のタイル仕上げが多かったため、安っぽい感じがした上に、目地のカビや汚れの問題も残っていた。その後、目地の無い壁材や高級感のある素材が次々に開発されるにいたって、浴室の主体はユニットバスルームに急速に移っていった。

最近では、インテリア性の高いカウンター素材やドーム型の天井材等も加わり、開発当初の安っぽさから脱却した日本独自の空間として進化している。(写真２)

和風的なものの行方とユニットバスルーム

先に述べたように、江戸時代以降当たり前のように受け継がれてきた日本的な入浴文化というものは、ごく最近になって大きく変化しつつある。われわれ浴室設備メーカーとしても時代に合わせた商品を開発する上で興味のあるところでもあるので、ここで今後どのようになっていくのか考えてみたい。

今後の社会は、今まで以上に個人の生活スタイルをより尊重する方向に向かうと思われるが、住宅や浴室のあり方もそれに沿って大きく変わることになる。このような変化は日本人のライフスタイルをますます多様化させるとともに、入浴スタイルにも以下のような動きが出てくるのではないかと思っている。

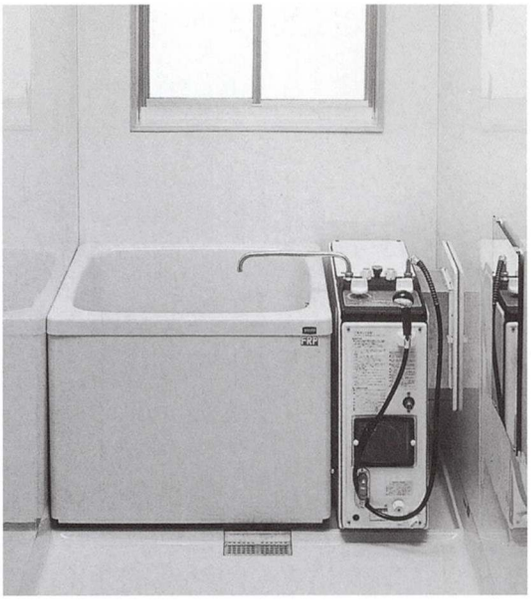


写真１
初期のタイプのユニットバス

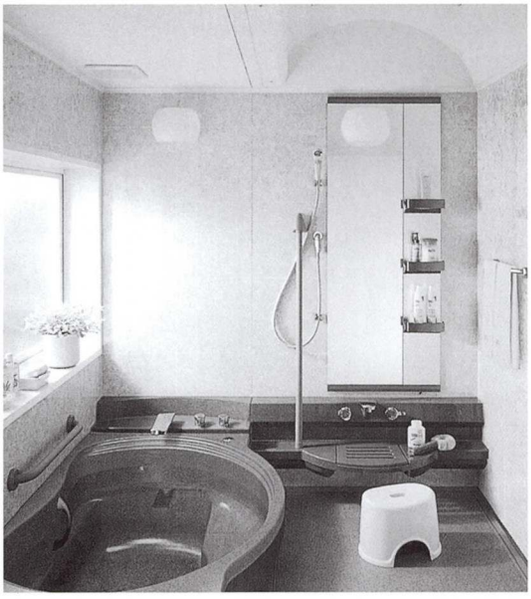


写真２
最近のタイプのユニットバス

●浴室あるいはシャワー設備の複数化
●浴槽の無いシャワーだけの浴室
●個人毎に湯を替える、いわゆる欧米型の入浴方法

最近では、二世帯住宅でなくても浴室とは別にシャワー室を有する世帯や、浴槽がありながらそれには入らずシャワーだけで済ませている世代は確実に増えている。これらが増えれば、いつ入るかわからない浴槽に湯をためて保温し続けるという、いわゆる日本的な浴室の必要性もまた薄れてくることになるのかもしれない。

ユニットバスルームも既に一部では、これらの動きに対応した新しい商品の開発が進んでいるし、今後更に開発を進めていくことになろうが、それを上回る早さで日本の入浴文化は変わろうとしていることだけは確かである。しかし、これらの動きを日本的なものの衰退と見るのではなく、このようにして新しい日本的なものが生まれてくるのであると考えることにしたい。　(なんきんざん　たかし)

コラム

次世代へ手渡したい「日本的なもの」あるいは「和風」

ペリー　史子
大阪産業大学工学部環境デザイン学科助教授

次世代へ手渡したい「日本的なもの」あるいは「和風」

アメリカで初めて迎えた夏、大学キャンパスの芝生の上を乱舞する蛍にびっくりした。どうしてここに蛍がいるの？これは日本で味わうものではないのかと。アメリカ人の友人達にとっては特別な風景ではないそれは、しかし、私には夏の風景としての「蛍」、どこかで見たような小川のほとりで舞う蛍、蛍の光が涼しさを呼び起こすような感覚があり、幻想的な風景にまで展開していった。現実の日本では蛍がこれほどまでに乱舞する風景など見られないのに。

次世代へ持っていきたい「和風」あるいは、「日本的なもの」を考える時、日本という風土が生みだし、育んできた感覚を呼び起こすような何かを受け継ぎ持って行かせたいと思う。その何かとは、建築・インテリアの完成したかたちというよりは、そこに伺われる様々な空間構成要素や素材であり、空間から生み出される空気が醸し出すものであろう。継続してきたもの、忘れられながらまた呼び戻されたもの、思い出されるのを待っているもの。変化していく次世代の生活を、より豊かに味わいのあるものにするために、いくつかのエッセンスを、思いつくままに書きとめてみよう。

風が通るインテリア

日本の建築・インテリアの特徴が語られる時、その一つとして自然との共生、外部空間とのつながりがあげられるが、「環境と和する」という点からも今後さらに大事にしたい。

「風が通る」とは、単に風が吹き抜けるというのではなく、風がインテリアに入り、インテリア空間を回遊してまた外に抜けていく、あるいはそのように感じると言うことである。

そのためには、まず開口部、窓の位置や大きさ、形が重要であるが、振り返って見ると、様々な配置、手法、意匠がある。欠円窓や、雪見障子や……これらをインテリアにもっと応用したい。空が見える窓や地面が見える窓、切り取った風景が見える窓、戸を外してしまって一面が見渡せるような開口部。内部の間仕切りにも個室を作るという考え方から、風を通しつつ必要な所を仕切ると言う考え方へと変え、可動的な襖、障子を畳の部屋だけでなくもっと柔軟に、上手に使うことを考えたい。さらに襖の引き手や欄間、特に透かし欄間には目を見張るような意匠がある。「源氏物語」の中にでてくる「几帳」（布を垂らす仕切りの装置）、今はもう見ることも稀になった着物をかける「衣桁」も一種の仕切りの装置であり、布は風や気配を敏感に伝えるであろう。

空間を仕切る装置として、生活の場にこれらをもっと上手に取り込み、次の次世代にまで引き継がせたいと思う。風が通ると言うことは、ある意味では、人と人の精神的つながりを保つことであり、共有する空間、時間を持ちやすくすることにもなろう。また、受け継がれた意匠の新しい表現方法がいろいろな角度から現れてくることを期待したい。

音を感じるインテリア

室内を歩くときの足音を考えているだろうか。裸足の足音、靴下の場合、スリッパの場合、また、中庭などでの履き物の場合。雨音、風の音、木の葉の音、季節を運ぶ音が聞こえているだろうか。遮音だけではなく、音を伝えることにも注意を払いたい。人の動き、空気の動きに伴う音は私たちの感覚に訴え、空間を豊かにする。衣擦れの音と言う言葉もあるが、気配を伝える音、音の記憶、それらを維持できる環境を大事にしたい。

素材を味わうインテリア

横になるのは気持ちいい。では、その時、肌に触れる素材は何がよいだろうか。蒸し暑い夏ならばさらりとした感触が得られるイ草、麻や竹があり、日光や視線を遮る簾も涼しげに見える。また、漆仕上げや襖の唐紙の感触も独特で、触れた時に気持ちよい。漉かれた和紙は丈夫で手触りもよく、光の透け方がきれいである。畳の柔らかくさらっとした感触も忘れることはできない。手入れに時間がかかっても、逆にそれが楽しいと思えるように、日常生活の中で使い続けたい。冬に結露で濡れるアルミサッシは終わりにしたい。

明かりや色調

金沢の成巽閣を訪れたとき、壁や天井に用いられている紅樺色と群青色とに、このような色もあるのかと、とても新鮮で驚いた。色の名前には日本独特の名称もあり、また、重色目（かさねのいろめ）といわれる配色の基本形式がある。数多くある色の組み合わせには、「桜重」（さくらがさね）「蝉の羽」（せみのは）「氷重」（こおりがさね）等の名称もあり、名前からも色そのものからも季節や自然の風物が感じられる。日本の風土や空気に沿いつつ作られたであろうこれら日本名の色は、もっとみんなに知られ、使われていいのではないかと思う。暗がりや明かりの質を考慮した、明かりの計画に気を配られた空間で。

（ペリー　ふみこ）

「建築と社会」誌

特集一覧●1979~2000

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6348-0635、FAX 06-6348-0634）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1979 vol.60	●転換期の再開発＊	●大阪南港 ポートタウン＊	●商業空間＊	●コンクリートのひびわれ	●日影規則＊	●ホテル建築と情報システム	●農村施設の変貌＊	●建築の終局強度の検討	●庄内のまちづくり＊	●80年代のインテリア＊	●第26回青年技術者＊	●建設業の労務事情＊
1980 vol.61	●80年代の都市と建築—まちづくりの歴史と展望	●今後の省エネルギーの趨勢 ●建築金物	●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集	●住宅の耐久性＊	●建築行政と法規＊	●最近の防水工法	●都市景観とアメニティ＊	●屋内体育施設の設備＊	●水ぎわのまちづくり	●今後の外装吹付仕上材＊	●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション・集合住宅	●これからの建築設計と新耐震設計法＊
1981 vol.62	●職能論＊	●中国の論文—北京の都市計画＊	●ポートピア'81＊	●台所まわりの計画と設備＊	●シーリング材の知識＊	●災害と法—安全な環境をめざして＊	●都市住宅—住まい手からの発想＊	●建築物と風—デザイナーのために ●日建設計作品集＊	●住宅・都市整備公団—関西における都市整備を中心とした新公団の役割＊	●間仕切壁の性能評価＊	●第28回青年技術者＊	●障害者の暮らしやすい環境と設備
1982 vol.63	●新たな商業空間の展開＊	●省エネルギーと開口部＊	●医療施設—地域医療と設備計画＊	●近畿の地盤と地質＊	●都市景観—まちなみ美観への誘い＊	●大阪市庁舎（第1期）＊	●ホール建築と音＊	●大スパン構造＊	●昭和設計作品集＊	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築＊	●風土・空気と人間＊
1983 vol.64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設＊	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール＊	●集合住宅と生活音
1984 vol.65	●21世紀への関西—魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル＊	●ビルのリフレッシュ—内外装補修技術の現状と展望—＊	●建設産業とロボット開発＊	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル＊	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々＊	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 vol.66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道—建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール—それが生みだす文化—	●建物の表情—最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合—人体と建築にみる— ●日建設計作品＊	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 vol.67	●これからの住空間—都市型集合住宅にみる	●屋根—そのデザインと素材	●現代デザイン—ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発—その創造的仕掛けの鍵をもとめて— ●ツイン21	●CAD—その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統—東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店 創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化—設計の多様化をめざして—＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり—I—	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり—II— ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木—構造技術の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語—人がかわる、まちがかわる—	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン—東海支部—＊	●建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	●木構造を使ってみませんか—集成材による構造—＊	●接着—建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台—仮設の魅力に学ぶ— ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境—限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生—構造技術の役割— ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境—人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと貌	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって—会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美—建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音—騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法—会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江—その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・能登—風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会—80人の眼—＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興—法・制度の運用と新たな展開へ— ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法—会員作品—	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州—諏訪とその周辺—	●街並みの演出—最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備—ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98—21世紀に向けて	●ゆれをとめる—たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃—街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法—まちづくり・すまいづくりへの展開—	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア—都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部—しまなみ海道と中国地方の街づくり—	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山—地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る—測定方法と測定結果が意味するもの—	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法—パートII—	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ—わざ、もの、こころ—	●時間	●私の空間作法—会員作品— ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者

＊は欠号

レンガ RENGA

Miyatake Atsuo
宮武 淳夫 遠藤秀平建築研究所

図と地ーレンガ



人工性

レンガの建材としての歴史は古く焼成レンガで古代ローマ時代、その起原は一般にメソポタミアやインダス文明の日干しレンガにまで遡るとされる。現代では幾分懐古趣味的な素材であるが、その存在意義は自然との明確な違いとしての人工性にある。

日干しレンガは土・水・藁の3要素の単純な混合物であるが、人為的組成操作が介在する点に特徴がある。この組成合成という抽象行為により木や石等の自然素材がもつ複雑なテクスチャーとは異なる、人工素材が持つ均質なテクスチャーが獲得された。更に直方体という合理的幾何学的な図形の発明と、その反復積層という構築方法が生み出す均質な全体性によって、かつて自然界（地）に存在したことのない人工世界（図）を描き出したといえる。

脆　性

土を原料とする材料の発展を日干しレンガから始まって焼成レンガ、更に今日のセラミックまでの連続として観ると、組成操作による耐久性の強化、構造材から仕上げ材への変化のプロセスとして捉えられる。しかしこの強度への飽くなき追求は外部作用に対する過剰防衛への強迫的反復と同一線上にある。

構造的自立性を兼備えた日干しレンガが、長時間の熱作用の受容反復による脆弱化によってその表情を変化させてゆく姿は魅力的であり、いずれ朽ちゆく状態を予感させる。現代の表層的に防衛された都市の日常が隠蔽する、終末を喚起させる力がある。



日干しレンガで作られたインダス文明のモヘンジョダロ遺跡

リサイクル

建築材料には常に固有の存在意義がある。しかしリサイクルを前提にする時、その終末をも想定する必要がある。

万里の長城のレンガ（塼）を粉砕し、その上澄みを再焼成して作られた「澄泥硯」とよばれる硯があると聞いた。これは短時間の熱作用が表情を強化させる土の特性によるもので、レンガの終末を通して硯という別の存在への再生を可能にするものである。レンガに想定されている完全な終末としての土（地）への回帰が、メタモルフォーシスとしての再生の可能性をも示唆している。



澄泥硯

「素材と技術が生み出すデザイン」は相対する具体的な事例や視点に光をあてることにより、異なるものの見方の可能性に挑戦する。今回は古くから活用されてきた「レンガ」を取り上げ、その今日的な可能性を探ってみたい。

（「素材と技術が生み出すdesign」幹事会）

◀ 目地－地と図

竹中工務店 Ueda Michinori 植田 道則



人の手の介在する世界

建築デザインの“地”について考えている。

建築において、大きさや形の統一された素材であっても、そのほとんどが、材料と材料を繋ぐものを必要とする。主たる材料を“図”とするなら、その材料と材料を繋ぐ部分は“地”となる。この地にあたるものが、目地である。目地は、決して一定ではない。寸法を、頑なに守れば守るほど、全体の調和がとれなくなってしまうからだ。その調整を図るものは、機械でもなく、まぎれもなく人間の知恵と感覚である。

建築生産が、“超”早くなってきているという今日の状況において、人の手の臭いが残ることの重要性を忘れてはならない。ちょうどそれは、メディナや路地といった入り込んだ迷路が、その街を訪れた異邦人にとって、新鮮に映り、人々の記憶の中にいつまでも残っていくのと同じように、この“地”としての目地の中にも、豊かな魅力が秘められている。

つつましやかな表現

主材料レンガの変遷に比し、目地表現の変遷は、それほどドラスティックなものではない。至ってシンプルなものだ。また、表現においてもそれ自身単独で成立するものではないことから、主たる材料からくるいくつかの制約を踏襲するもので、言うなれば、幾分“地”味なものだったのかもしれない。

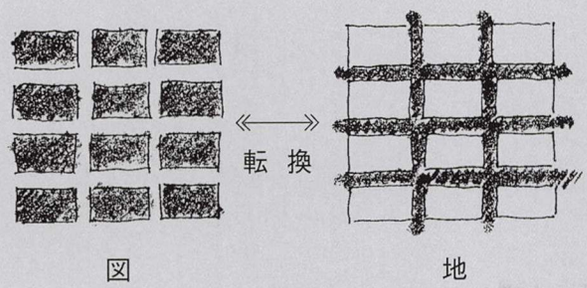
しかし、同じ材料を使っても、目地表現一つで、古来の組積造のイメージを抱かせる表現から、均質なグリッドパターンによって、モダンなイメージを醸し出せるものまで、範囲は広い。主たる材料の持ち味を活かしつつ、全体に大きな魅力を与えるつつましやかな表現材料である。

リサイクルとモデュール

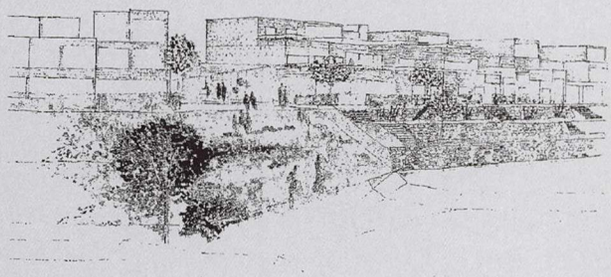
材料表現に一定の寸法の規則性を与える目地の存在はリサイクルの点においても、大きな意味をもっている。

日干し煉瓦から、今日のセラミックタイル等への動きとはまた違い、別の意味で、目地は、施工寸法に規則性を与えることにより、誤差を吸収して主材料の無駄を無くすことや、異種の取り合い、出会い帳場の世界を人間の制御可能なものにする。

このマテリアルをコントロールすることが、廃棄物の低減、処理のしやすさ、流用、転用、可変性についての環境問題を解決する根本的な役目を担っている。そして、その時、地は図になるのではないだろうか。



見方を変えれば、図は地に、地は図へと生まれ変わる



目地（ディテール）は、全体のイメージをも作りあげる

著作権並びにCADデータ流通／交換

中元三郎
㈱安井建築設計事務所情報システム部部長

建築界でCADが設計製図に利用され普及し始めたのは1980年代だった。それ以前のCADの“D”はDesignの意味が強く、広義のDと呼ばれていた。これと対比してDrafting利用は狭義のDと言われ、主流ではなかったように記憶している。

1970年代の後半、盛んに開催されたCADセミナーの米国講師は「CADは実施設計製図（Production Drawing）利用に最適だ。様々な履歴が残せるので、法的対応に向いている」と力説していた。訴訟社会の米国ならではの考え方と聞き流していたが、現在の日本は、その真っ只中にいると言っても過言ではない。

CALSの実施により、電子情報化された設計図が様々なフェーズで情報利用される状況が目前に迫っている。ISOではサービス提供側の説明責任が求められ、情報保存の重要性が増している。

図面が情報化され、より有効にデータが流用活用される時代にあって、設計や施工に携わる者がどのように対応すべきか、著作権法から考えてみたい。

著作権と工業所有権

著作権と工業所有権は、共に「知的所有権」と総称されている。工業所有権には特許権・意匠権・実用新案権・商標権があり、主として技術的な発明や発見を保護する目的で作られている。いわゆる「特許」と呼ばれるもので、当事者が特許庁に出願し許可登録されるものであり、存続期間は特許権で20年、実用新案権は6年、意匠権は15年、商標権は10年（更新継続可能）とされている。

一方、著作権は著作物の保護を目的として日本では明治2年（1869年）に出版条例が制定され、3年後に文部省布達で改正、後の出版条例や版権条例に受け継がれた。

現在の著作権法では「著作物とは、思想または感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術または音楽の範囲に属するものをいう」（著作権法第2条1項1号）とされている。

工業所有権では出願・登録によりその権利が発生するが、著作権は出願・登録することなく著作物を創作した時点で権利が発生する方式（無方式主義）が取られている。

権利の存続期間は、次のように定められている。個人は著作者の死後50年、法人等の団体名義は公表後50年と定められているが、法人は創作後50年以内に公表しなければ権利は消滅する。

著作者になるためと著作者の権利

著作者には通常、著作物を創作する個人がなるケースが大半である。作家や画家でなくとも、創作活動を行った結果、著作物を創作すれば特別な登録をしなくても、だれでも著作者となれる。

しかし、雇用契約等で職務として著作物の作成を行うことがある場合の著作権の帰属は法人となるが、著作権法第15条により、次の四つの要件を満たしている必要があるとされている。

①著作物作成の発意
——著作物の作成行為を自ら指揮・監督し、創作する。
②職務上の作成
——使用者と雇用者に雇用契約が存在し、職務として著作物を創作する。
③法人名義の公表
——法人等が著作物を自らの著作物だと公表するか、予定している。
④特約のないこと
——創作者個人が著作者となると、契約等で特約していないこと。

これ以外に、映画のような著作物は、映画製作に多数のスタッフが参加することから、通常、プロデューサーや監督など、制作全体に寄与したものが著作者になると定められている。

著作権は、売買可能な「著作権（財産権）」と、売買不可能な「著作者人格権」に分類される。著作権を分類・区別して話す人は少なく、一般的に、著作権と考えているのは売買可能なものを示している場合が多い。

他方、著作者人格権は著作者個人に専属しているので、売買はもちろん、相続することもできない。

著作者の権利関係を**図1**に示す。



図1　著作者の権利

著作物の種類

著作権法での著作物の定義は先に述べたが、これではあまりに抽象的であるためか、著作権法第10条1項に各著作物の種類を9種類に大別し、例示している。

これを基にその具体的内容を考えると、**表1**のように考えられる。

表1　著作物の種類と内容

著作物	具体的内容
言語の著作物	論文・小説・随筆・脚本・詩・詠・俳句など文字または記号を用いて表現するものや、講演・演説・説教・祝辞など口頭の陳述表現
音楽の著作物	交響曲・歌謡曲・ジャズ・行進曲など楽譜や旋律を用いて表現するもの。楽譜に基づかない即興曲も含む
舞踊または無言劇の著作物	舞踊・バレイ・ダンス・パントマイムなど、踊りや振り付けなど身体を通して表現されるもの
美術の著作物	絵画・版画・彫刻・漫画・挿絵・書画・舞台装置など造形的な美を表現したもの
建築の著作物	建物・庭園・橋梁・公園などの建築構造物で社会通念上、美術的・芸術的な範囲に入るもの
図形の著作物	地図・学術的な図面・図表・模型など
映画の著作物	劇場映画・テレビ映画・ビデオソフトなど連続的な映像により表現されるもの
写真の著作物	写真。思想または感情を一定の映像によって表現したもの
プログラムの著作物	コンピュータプログラム・テレビゲーム・データベースなどコンピュータに対する指令を組み合わせて表現したもの

建築の著作物

表1に示したように、建築著作物には建物以外に土木建造物も含まれる。建物著作物は単に外観に関する美術的創作性にとどまらず、建物の配置や環境への適応性など、美術的である以外に学術的な性質も有していると解説されている。

また、建造される構造物の設計図は建築物の草案であって、設計図それ自体も著作物としての保護を受けるとされ、地図などのような「図形の著作物」とは別に扱われている。

では、設計者の創作した設計図と建築主との関係はどのように解釈すべきだろうか。設計契約に基づいて建築主が建物を建てる行為は複製権の使用と考えられ、「建築主は1回だけ設計図に基づいて建物を建てる権利を許諾された」と考えられているのである。したがって、建築主は同じ建物を建てる場合でも、以前の設計図を再利用して、もう一棟同じ建物を建設することは出来ないことになり、再度設計契約を結ぶ必要が生じることになる。

増改築に関してはどうだろうか。同一性保持権から、著作者に無断で建築著作物を改変してはならないと、言えるのだろうか。

著作権法では所有者の使用目的を重視し、実用性の面から「建築物の増築、改築、修繕または模様替えによる改変」は認められる（著作権法第20条2項2号）と定めている。これにより、2階建を3階建に増築したり、建物そのものを取り壊したりすること（帝国ホテル問題）は著作者人格権の侵害にならないと判断されている。

しかし、他人の設計図を流用し改変を加え自己の名前で建築確認申請を行うとか、建築主が設計者に無断で設計図を改変して建設することは、認められていない。

業務委託契約約款では

1999年、官庁や民間の建築設計に関する業務委託約款が改訂された。それぞれの約款には、「著作権の帰属」「著作物等の利用許諾（官庁）、著作物の利用（民間）」「著作者人格権の制限」「著作権等の譲渡禁止（官庁）、著作権の譲渡禁止（民間）」という著作権に関する条文が記載されている。官庁版では、著作権に関して設計者と発注者の共同という表現もあるが、設計者にその権利が帰属していると記載しており、従来の認識とは異なっている。

建築主の利用範囲に関しては、「建築の著作物」の著作権法第20条2項2号で定めている範囲に加えて、「維持、管理、運営、広報など必要な範囲で」と記載しており、様々な場面で設計図書が生かせるよう、対象範囲が広げられていることに注目すべきだろう。

著作者人格権の制限の部分では、建築主は建築物の内容を自由に公開できるが、設計者には公開に一定の制限を加えている。約款の条文では、設計者は建物の内容を公表したり、建物に実名や変名表示を建築主の許可なく行ってはならないとし、氏名表示権や同一性保持権も行使してはならないとしている。

つまり、こうした契約書を取り交わすことで、設計者は建築主に無断で雑誌や新聞に建物を発表することは出来ず、自分の経歴書にも建築主の許可なく建物写真などを掲載することが出来なくなる可能性が生じることになる。

しかし、設計者に著作権が存在していることが明確に記載されることで自身の作風継承や設計に対する自由度は確保されるので、不利益だけが先行するように考えるのも得策ではない。

CADデータの流通

建築CALS／ECに代表されるように、建築界を取り巻く情報利用環境はめまぐるしく変化しており、成果物の電子化とそれらの納品は普通のこととなりつつある。

今回の契約委託約款の変更は、こうした動きと無関係ということではなく、すべての電子情報を含む成果物は建築主に集まり、設計段階・施工段階・維持管理段階など必要な場面で関係者に配布される「データ流通原則自由の流れ」が作られたと考えるべきである。

しかし電子化されたデータの流通が原則自由であったとしても、権利を放棄している訳ではない。また設計委託契約約款では、電子化されたデータのきめ細かい取り決めや利用制限を明記していない。契約では想定していない電子データ化への業務指示やそれに伴う費用負担、見知らぬ第三者へのデータ提供など派生するトラブルを回避するためにも、電子化された情報の扱いについては設計委託契約とワンセットで、電子データ受け渡しに関する取り決めを建築主と取り交わしておくことが肝要だろう。

㈳日本建築学会情報化小委員会の設計データ流通WGで、こうした電子データの流れと取り扱いに関する考え方を1993年より検討してきており、活動の中間報告として1998年7月号の建築雑誌に「CADデータ流通の実状と問題点」を発表している。WGでは、データ流通の実状を踏まえ、今年度中にも電子データ流通のガイドラインを策定し発表を予定している。ガイドラインでは電子データ利用の目的や利用者の限定、目的外の利用への対処、データの管理者や管理義務内容、紙情報と電子情報の食い違いによる優先、契約時における電子化業務範囲の確認などについて解説される予定であるので、データ受け渡し契約などを行う場合の参考になると思う。

紙媒体から電子媒体へ－その課題－

従来、設計図は紙に画かれ、建物を建てるための情報として配付され、それぞれの目的に応じて画き写され、加工し利用されてきた。

今やCADデータを含めて設計情報は電子化され、設計段階から施工段階、施設の運用維持段階に至るまで上流工程のデータにそれぞれの段階で必要とする情報を付加・修正・更新することで、その目的に応じた情報が作られるのではないかと期待されている。

国土交通省では2001年3月に、電子納品運用ガイドライン（案）を出し、当面の措置としながらも、土木関係事業について成果物の電子納品を促している。建築関係についても、引き続きその検討が進められており、運用時期も近い。

設計情報が電子化されることによっていくつかの重複業務を削減し、業務の効率向上や高質化、不注意な書き写しから起こる誤りを防止できる。しかし、活用の容易さは権利の侵害や瑕疵の拡大をもたらす危険性もはらんでいる。両刃の刃である。

紙媒体は取り扱いの容易さや長期保存に圧倒的強みがあることは、歴史が証明している。電子媒体が紙媒体に取って代わるには、ハード的・ソフト的に解決しなければならない問題がいくつも残されている。

（なかもと　さぶろう）

超高層免震－設計手法と設計上の留意点－

山本正幸
㈱竹中工務店東京本店集合住宅チーム構造GL

免震構造の基本的な考え方は、中低層の比較的剛性の高い（短周期）建物に免震装置を導入することにより、超高層建物のようないわゆる柔構造（長周期）とすることで、地震入力を大幅に低減するものである。したがって、超高層建物を免震構造化することには、異論を唱える方もいる。

しかし、免震装置の更なる長周期化や積層ゴムの引張り特性の把握等により、超高層建物も免震構造化することで、免震層での減衰効果を含めて大きな免震効果が得られることが分かってきた。

ここでは、超高層免震構造の特徴と設計手法、設計上の留意点等について述べる。

超高層免震の特徴

図1は地震波の応答加速度スペクトルと呼ばれるもので、設計に使われる各地震波の周波数領域に対応した応答加速度をプロットしたものである。一般的に、地震は0.5～1秒以下の短周期領域で大きな応答をするので、建物の固有周期を2～3秒（領域Ⅰ）に延ばすことにより大きな免震効果が得られる。超高層建物はもとから1～2秒の固有周期を有しているので、免震効果を出すには4～5秒（領域Ⅱ）の免震周期を実現する必要がある。この領域まで周期を延ばすことが出来れば、中低層の建物ほどダイナミックではないことが分かる。

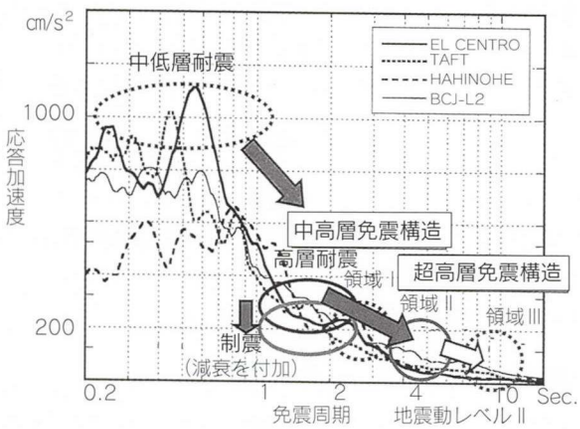


図1　建物の周期と地震時応答加速度の関係

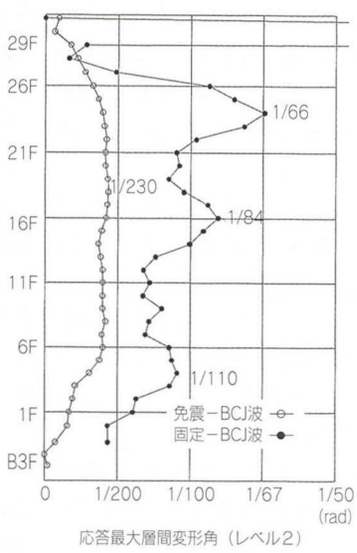


図2　超高層建物の免震効果

が、免震層での減衰効果とあいまって、応答加速度を1/2～1/3に低減することは可能である。

図2は、後で述べる元麻布ヒルズ計画について、その免震効果を、極めて稀に発生すると考えられる地震（以下レベル2地震と呼ぶ）時の層間変形角について示したものである。基礎固定の耐震では1/100を大きく超える応答となるが、免震構造化により1/200以下と1/2～1/3に低減されていることが分かる。

超高層免震を実現するためには、もう一つ重要な課題がある。それは、建物が高層になると、建物の外周部の免震装置には、地震により引張り力を生じる可能性が大きくなることである。積層ゴムは一般的に、圧縮には強いが引張りには弱いため、引張り領域で使用するにはその領域での特性把握や、引張り領域での性能向上が必要となる。

設計手法

超高層建物でも大きな免震効果を得るために、竹中工務店では長周期化の可能な免震装置として、NTN精密樹脂㈱と共同で低摩擦型の滑り支承（SSB）を開発した。また、二番目の課題である引張り領域での性能改善に対しては、㈱ブリヂストンと共同で引張り抵抗力の強い高強度積層ゴム（HSR）を開発した。

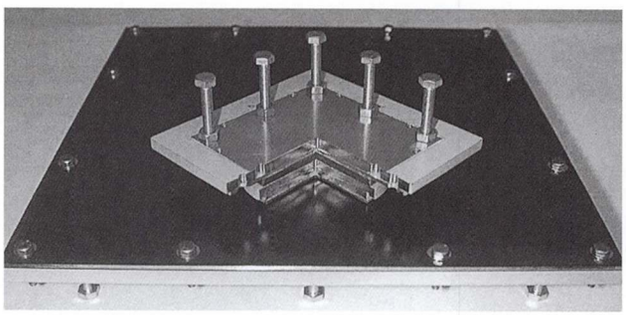


写真1　スーパースライディング支承断面図

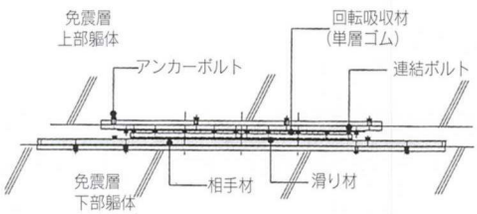


図3　スーパースライディング支承（SSB）

写真1及び図3に、開発した低摩擦型の滑り支承であるスーパースライディング支承（SSB）を示す。滑り面はテフロンのシートとステンレス版にテフロンをコーティングした相手材からなっており、0.02という低い摩擦係数を実現している。これは100kgの体重の人でもわずか2kgの力で動かすことが出来るレベルであり、従来の0.1レベルの滑り支承に比べると画期的な低摩擦である。滑り材ユニットの上部には天然ゴムの回転吸収材を設けて、施工誤差や地震時の構造体の変形を吸収している。

写真2は、引張り強度を従来の積層ゴムの2倍程度に高めた高強度積層ゴム（HSR）を示す。炭素量を調整することにより、20kg／cm²程度の引張り応力下でも、200%程度のせん断ひずみに対して安定した復元力特性を確保している。



写真2　高強度積層ゴム（HSR）

滑り支承は単独では復元力（元の位置に戻る力）がないことと、台風など

の風荷重に対して滑動させないために、積層ゴムと合わせて用いるのが一般的である。また、摩擦係数が軸力に依存して変動するため、軸力変動の少ない内柱下部に用いるのが好ましい。

超高層免震の構造設計上のポイントは、地震時の積層ゴムの軸方向力を精度良く算定することである。図4に示すように、積層ゴムは引張り領域では圧縮時に比べて軸剛性が徐々に低下し、小さな応力度で降伏するので、この性状を設計に反映する必要がある。当社では、静的弾塑性解析時に、この特性を考慮して各層の復元力特性を設定している。また、地震時には水平動による引抜き力のほかに、上下動による軸方向力の変動も加算されるので、これらを適切に考慮しなければならない。

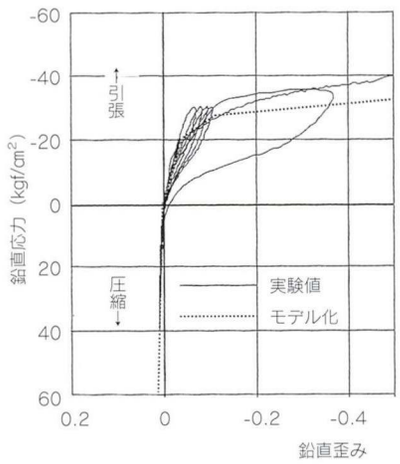


図4　積層ゴムの軸方向特性（HSR）

設計例

設計例として、高強度積層ゴムを用いた元麻布ヒルズ計画と、滑り支承を用いた橋本計画を紹介する。建物の外観パースと、免震層の配置図は、それぞれ**写真3、4**と**図5、6**に示す通りである。

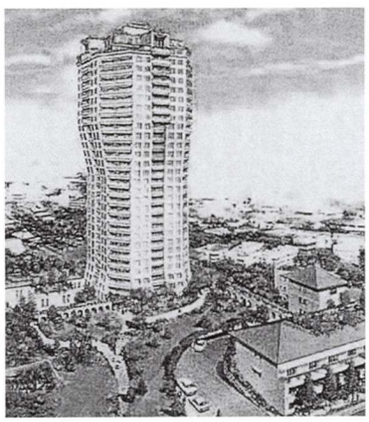


写真3　元麻布ヒルズ計画の外観

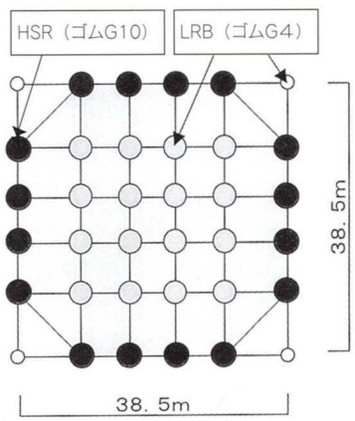


図5　元麻布ヒルズ計画の免震装置配置

元麻布ヒルズA棟は地上29階、地下3階建てで、建物高さは96.25mである。地下3階と地下2階の間に免震層を設け、建物の外周部に1400φの高強度積層ゴムを16基、内部には合計20基の鉛入り積層ゴムを配置している。上部構造は柱CFT梁SC構造である。上層部で広がった立面形状をしているが、下層部でも広げてバランスを保っている。レベル2地震時の等価周期は約4.4秒である。

橋本計画B、C棟は地上32階建てで、建物高さは99.95mである。建物内部に800φ～900φの滑り支承（2個でワンセット）を合計29基、外周部には1300φ～1500φの積層ゴムを合計17基配置した。上部構造は鉄筋コンクリート構造である。レベル2地震時の等価周期は約5.9秒である。滑り支承により免震の周期が非常に長くなっているので、外周部の引抜き力も低いレベルに収まっている。したがって、特に高強度積層ゴムは用いず、一般の積層ゴムで対応している。



写真4　橋本計画全体概観

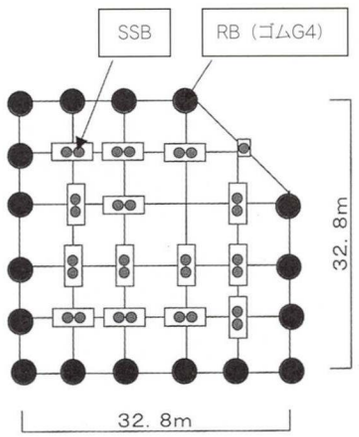


図6　橋本計画の免震装置配置

設計上の留意点

超高層免震建物の計画上の留意点としては、第一に塔状比（建物の高さと幅の比）が挙げられる。建物外周部の積層ゴムの引張り力を設計可能なレベルに押さえるために、この塔状比を4程度以下に押さえる必要がある。また、柱配置についても外端部のスパンを相対的に大きくするなど、外周部の長期軸力を増大させて地震時の軸力を極力低減することが重要である。免震層の水平変形用のクリアランスも、中低層の場合に比較してやや大となるので注意が必要である。

構造設計上の留意点としては、台風などの比較的頻繁に生じる水平力に対して風揺れ等の居住性を損なわないように、免震層の降伏荷重（鉛ダンパーの量や滑り支承の比率等）を設定する必要がある。

引張りを受ける積層ゴムの設計に当たっては、軸方向特性のモデル化にもよるが、引張り応力度だけではなくひずみレベルでのチェックも重要である。また、アンカーボルトやフランジプレートに対しても、引張り力を考慮した設計が必要となる。

地震動の特性についてはなお不明な点が多いが、長周期成分に大きなパワーを持った地震動も観察されており、十分余裕を持った設計と同時に、地盤の剛性低下による長周期化などについても適切に考慮する必要がある。

（やまもと　まさゆき）

家庭に入ってきた燃料電池

立森正史
大阪ガス㈱家庭用コージェネレーションプロジェクト部部長代理

燃料電池

燃料電池とは、簡単にいえば電気分解の逆の原理である。水に電極を入れ電気を流すと水素と酸素が出てくるが、燃料電池はその逆で、反応物質である水素や酸素を反応容器（電池）の外側から供給して連続的に電気を起こすものをいう。同じ電池でも乾電池や蓄電池は反応物質が電池内に内蔵されており、この点で大きな違いがある。

現在開発されている燃料電池においては、外から供給される水素は一般的に都市ガス（天然ガス）、LPG、灯油等の化石燃料から水素を作り、酸素は空気中の酸素を使って発電させる。

燃料電池は一般的に、水素と酸素の電気化学反応から直接電気エネルギーを得るため、従来の化石燃料の燃焼熱を利用した発電方式と比較して発電効率が高く、環境性がよいという特長がある。

固体高分子型燃料電池（PEFC）は、作動温度が80℃以下と低いため、起動停止が容易なことや、小型でも比較的高い発電効率が得られることから、自動車用電源として、近年活発な技術開発が進められている。PEFCは、排熱温度が低いものの、熱電比が家庭での需要にマッチしており、その特性を活かして、家庭用コージェネレーションシステムとしての実用化が期待されている。

PEFCの発電原理

PEFC電池本体の構造は、図1のようになっている。高分子膜の両側に白金系の電極触媒を付着させた部分が発電部分であるが、そのさらに両側を改質ガスと空気の流路となるセパレータが取り囲み、電池の基本単位を構成している。所定の電気出力を得るために、このセルの基本単位を多数重ねることにより電池本体（セルスタック）が形成されている。

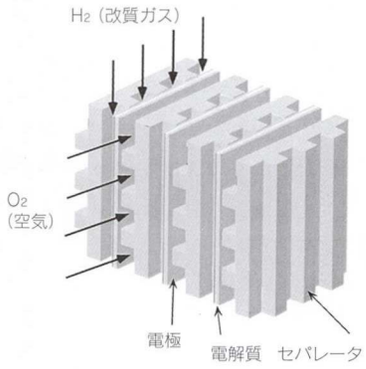


図1　セルスタック構成図

「水の電気分解の逆反応」により発電していることはPAFC（リン酸型燃料電池）と全く同じであるが、水素イオンの移動媒体が、リン酸溶液ではなく、水素イオンを伝搬する高分子膜であるのが唯一の違いである。

供給された改質ガス中の水素は燃料極で電子を放出して水素イオンとなる。水素イオンは電解質膜（プロトン交換膜）中を移動し、空気極で電子、酸素と反応して水となる。このときの電子の移動が電力として利用できる。

家庭用コージェネレーションシステム

日本における家庭用コージェネレーションシステムのコンセプトを図2に示す。

家庭で使用されるエネルギーは、電気エネルギーと熱エネルギーの大きく2種類に分けられる。

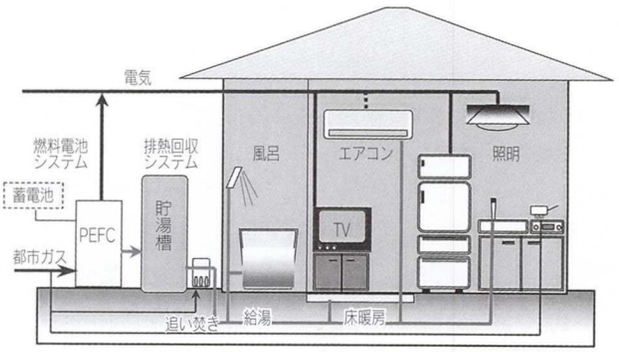


図2　家庭用PEFCコージェネレーションシステム

家庭用燃料電池システムは、いわば「電気もとれる湯沸かし器」であり、都市ガスなどの化石燃料を原料として、電気とお湯を作り出すことができるエネルギーシステムである。

すなわち、都市ガスを燃料としてPEFCで発電し、電気は系統連系で消費機器に送られる。一方、このとき発生する排熱は温水として回収されるが、電気と温水の需要は時間的にズレがあるのでいったん貯湯槽に溜めて、必要に応じて風呂や給湯、床暖房等に供給される。このとき、湯切れや温度低下を防止するために、バックアップ給湯器を備えておく必要がある。

PEFCシステムの構成は図3に示すとおりである。都市ガスは燃料処理装置で改質されて水素リッチガスとなってセルスタックに送られる。セルスタックで発電された電力は直流なので、インバータで交流に変え、出力される。一方、燃料処理装置とセルスタックから出てきた排熱を回収して温水として出力される。

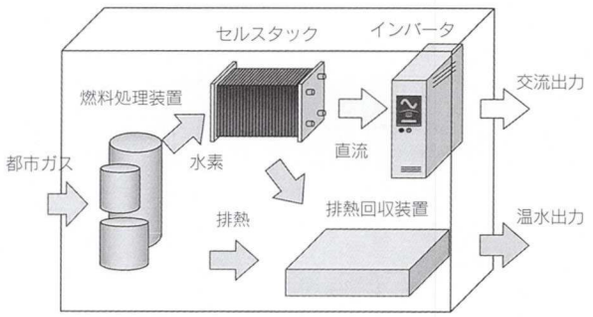


図3　PEFCシステム構成

一般的に、家庭で使用されるエネルギーの使用量や使用方法は、家族構成、住居の大きさ、生活スタイルなどにより大きく異なるが、燃料電池の最適容量は0.5～1kWと見込まれている。

家庭用の負荷パターンとシミュレーション結果

導入初期では、標準家庭よりも少し大きな住宅への導入が考えられる。延べ床面積が150m²程度で、4人家族の標準的な家庭を想定した負荷パターンは図4のようなものである。（負荷は30分間の平均値を用いており、夏季の冷房には電気エアコン、冬季の暖房には床暖房と電気エアコンを併用することを想定し、負荷パターンを作成している）

電力負荷では、電気エアコンを用いる冬季、夏季の夜間に1.5～2.0kWのピーク需要があるが、それ以外は電力需要は1.0kW以下であり、余り多くないのが実状である。

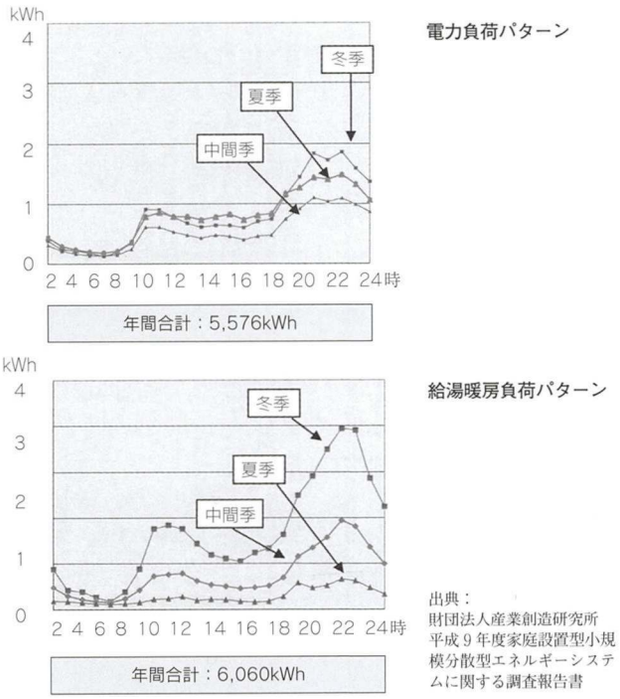


図４　一般家庭での負荷パターン
（想定家庭：延べ床面積150㎡　４人家族）

年間のトータルでの電力負荷は5,576kWhであり、年間平均での電力需要は約640Wということになる。大阪ガスでは、500Wと１kWの２機種を開発している。

表１に0.5kW、１kW両機種の目標値を、**図５**に主な技術開発目標をあげる。

表１　2005年商品化開発目標仕様

	500W機	１kW機
発電効率	35%以上	35%以上
排熱効率	30%以上	35%以上
排熱温度	60℃以上（給湯のみ）	70℃以上（暖房あり）
系統連系	あり	あり
運転形態	連続運転	連続運転
負荷変動	50/100%	30/50/75/100%
耐用年数	10年	10年

※効率は、定格時の効率でLHV（低位発熱量基準）ベース値

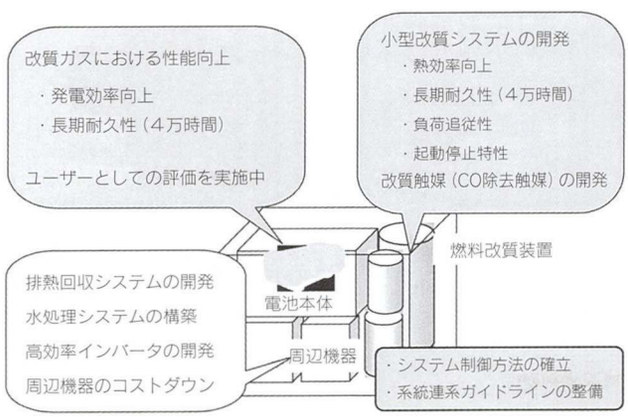


図５　主な技術開発項目

NEXT21での実居住実験

大阪ガスにおいて、NEXT21（実験集合住宅）で行われた（2000年１月より）家庭用PEFCコージェネレーションシステムの実験の概要を、以下に説明する。

NEXT21（**写真１**）では、個別エネルギーシステムとしての商品性評価のために、２住戸に試験機を設置し、居住実験を行っていく予定であるが、今回は、パッケージ化された天然ガス燃料の家庭用PEFCコージエネレーションシステムの一次試作機２基（500Wおよび１kW）を設置し、500W機については、世界初の実居住実験を行った。（１kW機は前出のNEDO助成事業によるものであり、500W機については、大阪ガスと松下電工が共同で試作したもの）



写真１　NEXT21

なお、これらのシステムは2000年４月に運転を中断し、2001年度に改良したシステムで再開する予定である。

PEFCコージェネレーションシステムは発電効率が高く、排熱を回収・利用することで、住宅においてもすぐれた省エネルギー効果を実現でき、CO_2削減にも非常に有効であるという特長を備えている。

NEXT21においては、実際に居住者が日常の生活を行う中で、試作したPEFCコージェネレーションシステムがどのような運用になるかを検証し、また、どのような不具合が生じるかを抽出することを主たる目的として居住実験を行った。

設置した500W試作機を**図６**に示す。

・発電容量／500W
・燃料ガス／都市ガス13A
・システムサイズ／L 600 ×W500×H900（㎜）
・排熱回収／温水（60℃）
・貯湯容量／150リットル
・運転形態／系統連系

2000年４月15日までの運転実績は、

・累積運転時間／194時間
・起動停止回数／37回

であった。

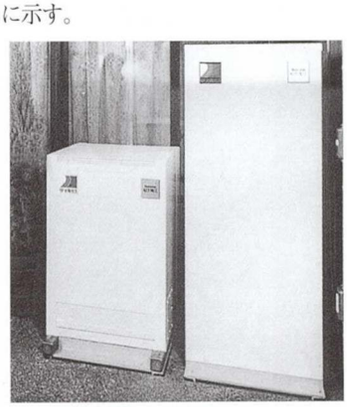


図６　PEFC500Wシステム

（たてもり　ただし）

まちなみ見学会・第5回

京都・西陣を中心とする町家の再生

小笹光彦
ランテック計画事務所

平成13年5月19日（土）、㈳日本建築協会事業委員会見学会小委員会により、「まちなみ見学会」が開催された。今回は昨年度の「奈良市奈良町」につぐ第5回であり、近年、町家の保全・再生の動きが活発な西陣を中心とする京都の町家が取り上げられた。

当日のスケジュールは午後1時に「よしやまち町家校舎」に集合し、続いて「町家写真館」「関西木造住文化研究会実験住宅」を訪れ、伝統的な町家の再生とその活用状況を実際に見学するものであり、午後4時半ごろに解散した。

初夏の京都は爽やかな快晴であったが、見学のスケジュールがかなりの距離を歩くハードなものであったため、気持ち良く汗ばみ、心身ともに快適な見学会であった。

「よしやまち町家校舎」

「よしやまち町家校舎」は、近くに位置する学校法人京都建築学園京都建築専門学校の町家校舎として再生されたものである。西暦2000年の節目に学校創立50周年を迎えた記念事業として町家を購入し、「町家校舎」として甦らせ、ゼミ活動等に伝統的な町家空間を活用しているものである。

まず、参加者総勢約50名が2階にある4室ぶち抜きの演習室にあげてもらい、高木伸人氏（京都市景観・まちづくりセンター事業課長）と木村忠紀氏（棟梁、京都府建築工業協同組合理事）のお二人から30分程度、京町家の保全・再生について、解説、説明を受けた。その後、校舎の改修状況を見学し、次のポイント「町家写真館」へと自由散策の形式で移動した。

㈶京都市景観・まちづくりセンターは町家の保全・再生の取り組みを推進するために、町家居住者、町家に関する専門家などでネットワークを形成したもので、様々な情報の提供やネットワークの活用、その仕組みを整備する機関である。

説明によると、5～6年前までは、町家に関する都市計画的な基礎データーはほとんどなかった。また、既存の町家を再生、活用しようという発想もなかった。これは京都だけではなく、全国的な風潮でもあった。しかし、バブル期に次々と町家が破壊されるのを目にし、民間レベルで町家再生の気運が高まり出した。西陣、その他の地域でも町家保全のためのネットワーク化が活発になり始めた。

これにより、平成9年に行政が腰をあげ、平成10年に当財団が設立された。そして、10団体、市民約600名のボランティアにより、町家の現況調査が始められた。すでに調査の済んでいる範囲の町家の総数は約28,000軒で、その約半数以上は現在も住居や仕事場として、しっかり手を入れて健全に使用されている。



100万人を超える都市で、現在もなお、これほどの木造建築が密集して残っているのは京都だけであり、これを大切にしていきたいとのことであった。しかし、これを保全、維持していくためには多くの問題がある。例えば、住みにくさの解消、耐震・防火の問題、補修・改修の情報不足など。これらの問題を一つひとつクリヤーしながら住民の理解を得て、まちなみを単なるものとして捉えるのではなく、住み手の生活を大切にしながら、どのようにして町家を維持していくかが、今後の大きな課題であるといえよう。

このモデル事業が「よしやまち町家校舎」と、その隣の「よしやまち町家」である。住み手に自信を持ってもらい、町家での日常生活を楽しんでもらうことが、今後の展開につながるだろうとの指摘であった。当日は学校側のご厚意により、説明に先だち抹茶と干菓子がふるまわれた。学生さんたちがお茶を運んでくれたのであるが、近頃は畳や床の間のない住居で育つことも多く、このような場で接待を経験すると、自然にすり足になり、和室空間の使い方の基本的な作法が身につくようになるとのことであった。

西陣界隈をゆく

いわゆる西陣とは、京都市の北西部の上京区、北区にまたがる西陣織機業の地。区域的にはかなりあいまいで、一般的には、中立売通より北、紙屋川より東、鞍馬口通より南、堀川通より西の一帯を指すようである。15世紀後半の応仁の乱のとき、山名宗全を中心とする西軍がこの地に陣を構えたことから、西軍の陣を意味する地名として定着した。

西陣織の特色は、その製法技術がすぐれた点にあった。古代以来、宮廷貴族の用途に供するため、一般には幅の狭い織物しか織れなかった時代に、広機を使って広幅の織物をつくり、綾、錦などの精巧な織物を織った。

江戸期に入り、幕府などの保護もあり、ますます隆盛をみたが、享保15年（1730）に「西陣焼け」と呼ばれる大火に見舞われ、立ち直ったころ、再び天明8年（1788）の大火に遭い大打撃を蒙った。さらに「天保の改革」の絹禁止令により、一時成長を止められたが、その都度立ち直り、あくなき技術革新を続け、今日の西陣の基礎を固めた。しかし、近年の産業構造の大変革により、現在は西陣も苦境にある。この西陣のまちを散策しながら、事例を見て回った。

● 「聚楽老人デイサービスセンター」

民間の社会福祉法人が、まちなかでの福祉サービスを展開するにあたり、新規に施設を建設するのではなく、既存の町家を購入し、老人向けのデイサービスセンターに再生した事例。

約80坪の総2階の町家は非常にゆったりしており、家庭的な雰囲気でサービスを受けることができ、利用者にも好評。町家の構造がしっかりしていたので、基本形はそのままにし、車椅子での施設内移動が可能なように改修。2階はそのままにしてあり、貸会場として地域に開放していくようである。

● 「町家写真館」

江戸末期から明治初期にかけて建てられた町家を、水野克比古氏が自作写真のギャラリーとして再生した事例。

氏は古き京都にこだわり続ける著名な写真家で、写真集100冊発刊を記念して、昨年11月にオープンしたとのこと。約50坪の敷地に建つこの町家は、町家そのものの味わいを大切にしながら、ギャラリーにふさわしく改修したものである。

この建物は代々糸問屋であったそうで、すぐ近くの今出川大宮は「千両ヶ辻」と呼ばれた西陣の中心地であったらしい。このあたりの経過を館長の水野歌夕さんから説明を受けた。

●「machiya de ほっ」

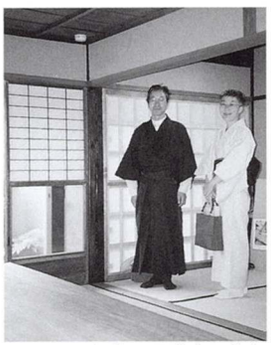
先代から受け継いだ町家を奥さんが描く遊墨漫画のギャラリー、兼着物絵師である主人のアトリエとして活用している事例。

江戸末期に建てられた町家は、糸屋に始まり、時代にあわせて様々に変遷してきた。つい最近まで電気屋を営んでおり、メーカーの大きな看板ですっぽり覆い隠されていたが、それを取り除き、修復をして現在の姿となった。

遊墨漫画とは、墨字と漫画を組み合わせたもので、笑いで人の心を和ませる「ユーモアセラピー」の普及をめざしているとのこと。

●「focal point」

元織物工場であった奥の部分を活用して、借り主が町家の表の部分に住みながら、奥を喫茶店として再生した事例。


和装で見学会に参加

昔は織機が6台稼動していたという空間は、高い天井、白壁と梁とのコントラストが美しく、ゆったりしている。昔の面影を残しながら、天窓や階段などの造作に工夫を凝らし、和風のユニークな空間にしつらえている。

この大正時代的な空間で暑さしのぎのアイスコーヒーを味わった。和装で参加した見学者のペアのくつろぐ姿は、まるでタイムスリップしたかと思えるほど、絵になる光景であった。

●安倍晴明神社を過ぎて

陰陽師の漫画で近頃評判の安倍晴明神社の前を通り過ぎ、今出川通りを渡ると、応仁の乱の張本人の一人、山名宗全の邸宅跡があった。なんでもない石碑が建っているだけだが、西陣の名付け親ともいうべき宗全の入道姿が偲ばれる。

もう少し北へ歩くと近年整備された「石畳の街並み」に出くわした。やや几帳面すぎる石張りだが、この街路に面して「織成館（オリナス）」や「町家倶楽部」があり、街並みとしては西陣らしい雰囲気を漂わせている。街路のグレードが高いと、周辺の街並みも美しくなるのだろう。これも街並みを保全していくための一つの方策であろう。

コラム●西陣の町家ときもの

「西陣の町家に敬意をもって、着物で参加させてもらいました。」（今回の受付での言葉）

いま男が着物を着て町を歩くにはずいぶん勇気がいるのです。まして袴姿で歩くとなると通り過ぎる人の視線がとんでくるのがはっきりと分かります。（まあ私の場合とんでもない着方をしているので仕方のないことでしょうが。）

それでも着て町に出るのは、着物の復権をはかるとか、着物の良さを見直そうとか、日本人には着物だとか、そんな大それた発想ではありません。ちょっと好きなだけなのです。

しかし今回の町家・まちなみ見学では、それにかかわる人々の思いや執念がひしひしと伝わり、そのまま残すことにとどまらず、今に活かす取り組みの重みを感ぜずにはおれません。いいものでありながらなぜ使われなくなったのか、時代とのギャップをどう取り払うのか、飾りではなく使い続けるためには……、そして着物の町・西陣では着物についても同様の試みがあるのでしょうか……、思わず考えてしまいました。

と、話を無理矢理まちなみ・町家とひっつけてしまいましたがこれは言い訳で、単に「着物で西陣を歩きたかった」、それだけなのです。　**（武部雄三）**

「関西木造住文化研究会実験住宅」

夕刻4時ごろ、最後の見学場所「実験住宅」を訪れた。ここで田村佳英氏（建築家、関西木造住文化研究会代表幹事）から、当研究会が現在取り組んでいる主な活動について、ビデオを交えながらの説明を受けた。

当会は、今後の都市における住まいのあり方、暮らし方を「地域固有の木造伝統住文化の保全・再生とまちの安全性の共存」という視点から、現在の都市をケーススタディとして取り上げている。建物単体だけではなく、都市・文化・地域社会とのかかわりのなかで、様々な研究、実験を通して、総合的、理論的に研究・提案・実践している。

とりわけ、耐震性、耐火性あるいは伝統的軸組構法による木造土壁のせん断耐力試験などの安全性の検証に力を注ぎ、各種の実験結果として、従来の一般認識をはるかに上回る耐震性能、防火性能を有していることを証明してきたとのこと。

さらに、この町家を仕事場、実験の場として使用すると同時に、実際に住んでみて、様々な伝統的木造町家の問題点を洗い出し、改良の手法を模索、提案中であるらしい。

適切な対応を施した木造建物は、本来100年以上もつものであり、生活文化を継承していくためにも、三世代が住み続けられる住まいが必要である。100年を尺度として考えた場合、住まいのあり方や優先すべき事項の本質が見えてくるとのこと。

利便性ばかりを追い求める結果、寿命の短い設備、機器、新建材などに頼りすぎる現代の住生活こそ様々な大きな問題をはらんでいるのではないか。この後始末の手法については、今から考えておかねばならないのではなかろうか。

伝統構法の再生とは、単なる工法、技術等のハード面ばかりでなく、その技術を使いこなす知識、知恵と、生産・流通・家づくり・暮らし方・地域づくりまで、「くらしと空間と地域」の良き関係を再生することにほかならないとの指摘であった。

＊

西陣を散策すると、空き地、ガレージ、マンション、プレハブなど様々なものが入り乱れ、かつての美しい街並みは今、大きな危機にあることが実際の目で確かめられる。その反面、京町家の良さをいかした新しい活用法もあちこちで芽ばえているようでもある。

この街並みを保全していくためには、その最小単位である町家を保全・再生することである。伝統的な町家を住居とするにしても、店や仕事場にするにしても、結局のところその使い手が町家の特徴と良さを理解し、それをいかして生活を楽しむすべを知っていることこそ、その原点であるように思える。

今回の見学会は「まちなみ見学会」というよりもむしろ「町家見学会」であった。それだけに、事前打ち合わせ、資料作成などの段取りが大変であったことだろう。当日、司会進行を担当された松本剛氏（大阪府建築都市部住宅管理課総括主査）をはじめ、関係者の皆様方、大変素晴らしい見学会を有難うございました。

（おざさ　みつひこ）

現代の工匠から日本の建築文化の原点を学ぶ

伝統の自然材料と木造伝統構法の知恵と技を生かして、築150年以上の町家を家族3世代が安心して暮らせる住まいによみがえらせることを目指したKARTH（カース）実験住宅KN 1を会場に、"21世紀の新しい生活文化を考えるシリーズ" セミナーが始まる。

第1回は「京の土壁文化の魅力を五感で体感・科学する！」。アエコンを用いない夏の過ごし方、土壁の断熱・調湿効果・居住性を体感しながら、『土壁』の魅力と特性を学ぶ。

今後、「建具の文化」「畳の文化」「屋根の文化」「紙の文化」をテーマにセミナーを予定している。

日　時　2001年7月21日(土) 13：30～16：30
会　場　関西木造住文化研究会（KARTH）
京都市上京区上立売通り浄福寺西入る姥ケ東西町632（京都市営バス停「千本今出川」または「今出川浄福寺」より北へ徒歩約10分）
講　師　佐藤嘉一郎（佐藤佐官工業所代表）
参加費　1,000円（当日会場払い）
定　員　30名（先着順）
申込み　7月14日までに氏名、所属、連絡先住所・TEL・FAXを明記し、FAXまたはEメールで関西木造住文化研究会（TEL075-411-2730、FAX075-411-2725、Email：tamura@mrh.biglobe.ne.jp）へ。

風の路シンポジウム2001

「使い捨てのできる生活こそが安定した豊かな暮らしをもたらしてくれる」。反核、反原発の立場でエコロジー、環境保護運動に取り組む槌田敦氏（名城大学経済学部教授）の講演＋ディスカッションが開かれる。

テーマ　～誰も言わない語らない～
使い捨てのできる生活
日　時　2001年7月14日(土) 13：30～16：30
講演13：30～　ディスカッション15：00～
会　場　西宮市フレンテホール　TEL 0798-32-8660
西宮市池田町11-1　ＪＲ西宮駅南
参加費　1,000円（会場にて）
申込先　主催の㈳日本建築家協会近畿支部風の路シンポジウム2001（〒541-0051　大阪市中央区備後町2-5-8　TEL 06-6229-3371、FAX 06-6229-3374、Email：jiakinki@osk2.3web.ne.jp）へ、住所・氏名・TEL・FAXを明記して申し込む。

インテリアブラッシュアップセミナー

大阪ガスインテリアデザインスクールの今回のセミナーでは、質のいい中古マンションを全面改装して住んでいる様々な事例を通して、新しいリフォームスタイルを提案する。

講　師　中谷（なかたに）　昇／㈱アートアンドクラフト代表
――京都工芸繊維大学建築学科卒業。マンションディベロッパー、ハウスメーカーを経て、アートアンドクラフトを設立。現在、中古マンションや戸建ての売買・リフォームから、「地域のまちづくり支援」までを手がける。
日　時　2001年8月4日(土) 14：00～15：30
会　場　大阪ガスインテリアデザインスクール
大阪市中央区備後町3-6-14
定　員　80名（先着順）
参加費　無料
申込先　電話にてスクール事務局（TEL06-6262-4089）へ。http://www.og-school.com/でも受付。

アンソール版画展

ベルギーの画家、ジェイムズ・アンソール（1860～1949）が初めて銅版画を制作したのは1886年、26歳のとき。《大聖堂》には、群集、仮面、廃墟が極端な遠近法で描かれている。

人間性の寓意を幻想的に描き出したアンソールの133点にのぼる銅版画を中心に、手彩色銅版画30点、リトグラフ等を加え、220余点が紹介される。


《大聖堂》1886年
©SABAM, Bruxelles & APG-Japan/JAA, Tokyo, 2001
collection : James Ensor Archief / Florizoone Patrick, Slype

会　期　2001年7月11日(水)～8月12日(日)
平日　10：00～19：00
土日　10：00～18：00
休館日：毎週月曜日
会　場　東京ステーションギャラリー
ＪＲ東京駅・丸の内中央口下車・赤煉瓦駅舎内
入　場　一般800円、大高生600円、中小生400円

イタリアと日本：生活のデザイン展

イタリアの建築・デザイン・ファッションが提案する明日の生き方、明日の日常についての価値観を改めて検証し、見過ごされてきたヴィジョンとアイデアを見出していこうとする展覧会。入場料1,000円（一般）。総合監修はアンドレア・ブランジ氏（ミラノ工科大学教授）、総合会場構成は建築家・伊東豊雄氏が担当。

●横浜会場―パシフィコ横浜―
日　時　2001年7月28日(土)～8月22日(水)
場　所　横浜市西区みなとみらい1-1-1
●神戸会場―神戸ファッションマート―
日　時　2001年9月1日(土)～9月30日(日)
場　所　神戸市東灘区向洋町中6-9

現代日本彫刻展2001

宇部市野外彫刻美術館では、「凛（街とモニュマン）」をテーマに第19回現代日本彫刻展が開催される。

宇部市野外彫刻展、全国彫刻コンクール応募展、現代日本彫刻展、この三つのUBE Biennaleを通して都市空間と彫刻とのかかわりを追究してきて今回で40周年。特別展示として、日本を代表する彫刻家の向井良吉、柳原義達両氏の彫刻も出品される。

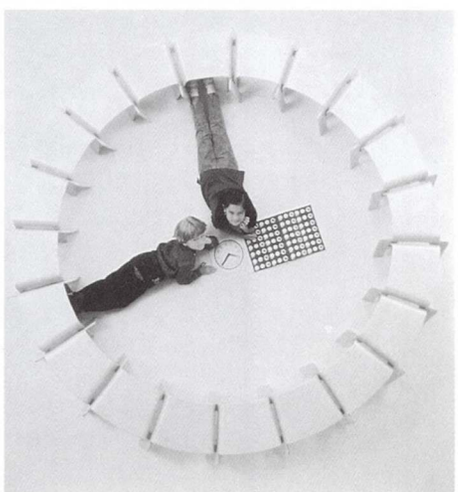
会　期　2001年7月12日(木)～11月11日(日)
会　場　宇部市野外彫刻美術館（宇部市常盤公園内）
山口県宇部市大字沖宇部254
ＪＲ小郡駅から市営バス白鳥号で常盤公園入口
主　催　宇部市、現代日本彫刻展運営委員会、毎日新聞社(現代日本彫刻展事務局　TEL0936-51-8518)
作　家　秋山陽／伊藤誠／生形貴晴／海老塚耕一／大隅秀雄／小川徹也／鎌塚昌代司／桑田覚／小室至／坂口正之／高岡典雄／田辺武／蔡國強／戸田裕介／野村敦／袴田京太朗／前田哲朗／松井紫朗／三島喜美代／安松洋子

「キッズ・サイズ・デザイン展－子供たちの〈もの〉と〈心〉の世界」

欧米、アジア、アフリカなどで日常的に使われてきた子供たちのための家具・遊具、規格化量産され世間的評価を得たヨーロッパの家具、イームズなどの有名デザイナーによる作品まで、多様な用途の作品約140点が「眠る」「生きる」「遊ぶ」「動く」「学ぶ」のテーマのもとに展示される。

本展は、ドイツのヴィトラ・デザイン・ミュージアムによって企画され世界を巡回しているもので、9月には徳島県立近代美術館、11月に東京・リビングデザインセンターOZONE、2002年に福島の郡山市立美術館、香川の丸亀市猪熊弦一郎現代美術館で開催される。

会　期　2001年7月14日(土)～9月2日(日) ―無休―
10：30～19：30（最終日は18：30まで）
会　場　サントリーミュージアム［天保山］
大阪市港区海岸通1-5-10　TEL 06-6577-0001
入　場　大人1,000円、高大生700円、小中生400円


「キン・ダー・リンク」スツール　1993年／アメリカ

医療福祉建築賞2001募集

㈳日本医療福祉建築協会の顕彰事業「医療福祉建築賞2001」は、1998年4月1日～2000年3月31日に新築または増改築された医療・福祉施設及び保健施設を対象に募集が始まる。

当該施設の開設者または管理者、設計者、施工者のいずれでも応募可。ただし選考委員または委員の所属する組織が関与した施設の応募は不可。

応募期日　2001年8月10日(金)～9月10日(月)

提出資料　①所定の応募申込書、建築概要書
②設計主旨
③図面(配置図、平面図、断面図) A3判
④写真(周辺環境が分かる、また室内については家具・機器等が設置された) 約15葉
①～④をA3判クリアファイル1冊に収める。

応募料　1作品につき5万円を応募時に納入。

選考委員　小滝一正(横浜国立大学大学院教授)
大道　久(日本大学医学部教授)
岡　秀世(I.C.D.建築設計事務所)
筧　淳夫(国立医療・病院管理研究所)
上泉和子(青森県立保健大学教授)
小松正樹(清水建設医療福祉本部)
山崎　敏(トシ・ヤマサキまちづくり総合研究所)

提出先　㈳日本医療福祉建築協会
〒108-0014　東京都港区芝5-26-20
TEL03-3453-9904　FAX03-3453-7573

福祉建築アイデアコンペ

㈳日本建築家協会(JIA)近畿支部は、少子高齢化と環境共生、省資源の社会における豊かな住環境を支える住まいの水まわりに関する、実現可能で夢のある第3回福祉建築アイデアコンペを実施する。

テーマ　21世紀の住まいのコア―老後の快適な水まわりとは？―

応募資格　資格は問わず、個人、法人、グループ単位でも可。

登録締切　2001年8月15日(水)

作品提出　A2サイズパネル1枚にまとめ、9月10日までに、JIA(〒541-0051　大阪市中央区備後町2-5-8　TEL 06-6229-3371)へ。応募要項請求も同所へ。

審査委員　難波　利三(作家)―委員長―
大喜多　潤(兵庫県立総合リハビリテーションセンター主任作業療法士)／折目允亮(ジャーナリスト)／繁成　剛(近畿福祉大学教授)／杉村和子(㈳日本福祉士会会長)／田中直人(摂南大学教授)／山本佳那(ファッションコーディネーター)

賞　福祉建築アイデア大賞(1点)賞金20万円
優秀賞(若干)賞金5万円
佳作(若干)表彰状

第2回印旛村野外芸術展INいには野

千葉県印旛村いには野地区(北総・公団線「印旛日本医大」駅周辺)に、10月中旬、全国公募『印旛村野外芸術展INいには野』への応募作品が展示され、住民アンケートと審査委員会(10月下旬)を経て、入選(設置場所2カ所につき各1点)、佳作(同各3点)を決定し、平成14年3月中旬に実物大作品が完成、設置される。

このため印旛村(佐藤榮一村長)は、"癒し""健康"をテーマにパブリックアート作品の募集を始めた。

応募期間　2001年6月15日(金)～9月28日(金)

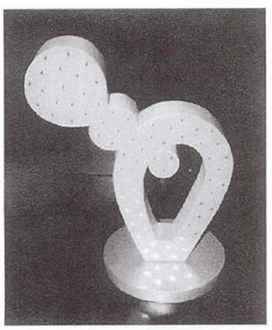
応募資格　不問。ただし第1回本展入選者、佳作者は除く。

応募料　無料

応募申込　希望者は所定の応募申込書に必要事項を記入して、郵送で9月28日までに申し込む。

申込提出　『印旛村野外芸術展INいには野』事務局運営担当(〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-2-8　パブリックアート研究所内)

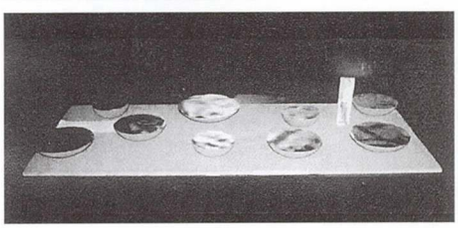
審査委員　青木純一郎(順天堂大学学部長)／大西長利(東京藝術大学名誉教授)／北詰栄男(メタルアートミュージアム光の谷館長)／佐藤榮一(印旛村長)／島田勝吾(彫刻家)／高柳和江(日本医科大学助教授)／建畠晢(美術評論家)／タナカノリユキ(美術作家)／三木康弘(都市基盤整備公団)



◁[入選]
■設置場所1
都市基盤整備公団販売センター前広場
「Sunward」吉水浩
※平成13年7月設置予定

第1回
印旛村野外芸術展
INいには野
受賞作品

▽[入選]
■設置場所2
美瀬の林公園内



「風の光景」信ヶ原良和※平成13年7月設置予定

応募詳細は、事務局運営担当(TEL 03-3407-9132)へ。

「イソバンド・イソダッハ・デザインコンテスト」審査結果

大同鋼板㈱が創業50周年記念事業として開催した第2回イソバンド・イソダッハ・デザインコンテストには、海外を含めて159件の応募があり、4月19日に審査(伊東豊雄／鈴木博之／服部正幸・大同鋼板社長)を終えて、グランプリ1点、優秀賞3点、入選10点、特別賞50点が選ばれた。



【グランプリ】小嶋一浩・三瓶満真／C+A「宮城県迫桜高等学校」

このコンステトは、1998年4月～2001年3月31日に竣工した、イソバンド、イソダッハを使用した建築物・建築物を応募対象としている。

●グランプリ
小嶋一浩・三瓶満真／C+A「宮城県迫桜高等学校」

●優秀賞
遠藤秀平・㈱遠藤秀平建築研究所「浅草の家(宮城邸)」
西村眞孝・㈱日建設計「かわさきファズ物流センター事務管理棟」
モーヨンイ(韓国)「サムスン体育館」

「3Dマイホームデザインコンテスト」結果

3D住宅デザインソフトシリーズのユーザーを対象に、メガソフト㈱が昨年10月から今年2月にかけて実施した第4回コンテストでは、18作品がグランプリ、準グランプリ、各部門賞などを受賞した。

累計出荷25万本を超えた「3Dマイホームデザイナー」ソフトで作成したモデルのコンテストには、建築・CGの専門家も加わり271点の審査に当たった。

• グランプリ／中村満明
「ジーンズハウス@カントリー」
• 準グランプリ／千代崎博美「HOUSE-01」



【グランプリ】「ジーンズハウス@カントリー」中村満明

日本建築協会

月間の動き

【平成13年 5 月分】

理事会

第２回常任理事会
23日　４時～４時45分・於本会会議室
出席者　市川会長ほか11名
議　事（1）平成12年度事業報告（案）の件
（2）平成12年度決算報告（案）の件
（3）入・退会者承認の件
（4）後援・協賛名義使用承認の件
（5）評議員候補者承認の件
（6）経過事業報告

企画委員会

第２回企画委員会
23日　２時～３時45分・於本会会議室
出席者　片倉委員長ほか４名
議　事「協会21世紀を考える委員会」答申の具体化

編集委員会

第２回編集委員会
９日　６時～７時30分・於本会会議室
出席者　宮田委員長ほか７名
議　事（1）６月号「成熟社会をささえるまちづくり」特集経過報告
（2）７月号「現代の日本の空間、文化を探る」特集経過報告
（3）８月号「環境―近未来に向けて今できることー」特集経過報告
（4）作品作風小委員会関係報告
（5）収支目標
第２回広告企画小委員会
９日　５時～６時・於本会会議室
出席者　宮田委員長ほか７名
議　事（1）６月号「成熟社会をささえるまちづくり」特集経過報告
（2）７月号「現代の日本の空間、文化を探る」特集経過報告
（3）８月号「環境―近未来に向けて今できることー」特集経過報告
（4）作品作風関係報告
（5）独自特集企画
（6）「21世紀の協会検討委員会」委員推薦
第２回設備分科会
８日　６時～８時30分・於本会会議室
出席者　近藤国夫幹事ほか５名
議　事（1）8月号「環境―近未来に向けて今できることー」特集の企画
（2）「設備の頁」の企画
第２回構造分科会
11日　６時～７時45分・於本会会議室
出席者　木下幹事ほか６名
議　事（1）「構造の頁」の企画
（2）10月号構造特集の企画
第２回計画分科会―建築系―
14日　７時～９時・於本会会議室
出席者　菅野幹事ほか６名
議　事　９月号特集テーマ案の検討
第２回法令分科会
15日　２時～４時・於本会会議室
出席者　中島幹事ほか５名
議　事（1）６月号法令特集経過報告
（2）「法令コーナー」の企画
第１回施工材料分科会
24日　５時～６時30分・於本会会議室
出席者　太刀川幹事ほか３名
議　事　「施工材料の頁」について
第２回作品作風小委員会
24日　７時～８時30分・於本会会議室
出席者　倉渕副委員長代行ほか５名
議　事（1）作品の選定
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定
（4）「Sketch Book」欄の掲載予定

事業委員会

事業委員会総会十懇親会
15日　６時～８時30分　事業委員会総会
於スーパードライ梅田会議室
出席者　川村委員長ほか12名
議　事（1）各小委員会からの報告と検討
（2）「21世紀の協会検討委員会（仮称）」委員の推薦
第２回若い会員の集い小委員会
８日　７時～８時45分・於本会会議室
出席者　杉本副委員長ほか２名
議　事（1）委員退任の報告
（2）今後の企画について検討
第２回情報小委員会
９日　6時～7時45分・於本会会議室
出席者　天野副委員長ほか７名
議　事　実施報告と今後の予定
第２回見学会小委員会
10日　６時～７時50分・於本会会議室
出席者　福島副委員長ほか６名
議　事　実施報告と今後の予定

出版委員会

第２回出版委員会
17日　６時～7時・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか５名
議　事（1）＜プロのノウハウ＞と特装本の経過報告
（2）今後のテーマと執筆者選定

見学会

第１回見学会・やまと郡山城ホール
14日　２時～４時40分・参加者26名
第２回見学会・まちなみ見学会（第５回）
京都・西陣の町家
19日　１時～４時30分・参加者39名

講演会

第３回企画・茶室講演会（第１回）
28日　６時～８時・参加者92名
於大阪市立大学文化交流センター・ホール

建築クラブ

第349回朝食会
８日　８時～９時30分・於大阪全日空ホテル
演　題　「生き甲斐のゆくえ」
講　師　木津川　計氏（立命館大学産業社会学部教授）
参加者　40名

入会者(敬称略)

［団体会員１社］
㈱田中荘介商店
［個人会員４名］
阿部　正和（大阪市計画調整局）
迫　　淳海（清水建設㈱）
真柄　卓司（㈱大林組）
亘理　良昭（㈱東畑建築事務所）

◀会員の訃報
勝元　昭教氏　平成13年５月27日逝去

〔お願い〕
万一、印刷不良のものがお手元に届いておりましたら、お取り替えいたしますので、ご連絡下さるようお願い申し上げます。

暑中お見舞申し上げます

平成13年盛夏

青山幸夫

株式会社　青山建築積算事務所 代表取締役

〒550-0004　大阪市西区靭本町1-6-10本町西井ビル
電話06（6443）0430
〒610-1125　自宅・京都市西京区大原野上里勝山町14-6
電話075（331）8082

恩庄治郎

大阪化工株式会社　代表取締役社長

〒565-0821　吹田市山田東1－12－12　電話06（6876）2334
〒565-0821　自宅・吹田市山田東1-12-12　電話06（6877）1406

名誉会長

佐野正一

株式会社 安井建築設計事務所 代表取締役会長

〒540-0034 大阪市中央区島町2丁目4番7号 電話06（6943）1371代
〒662-0064 自宅・西宮市雲井町4の9　電話0798（72）1569

市川宏

株式会社　東畑建築事務所 取締役会長

〒541-0044　大阪市中央区伏見町4—4—10　電話06（6202）0391

木内啓介

西日本建設業保証株式会社　取締役社長

〒550-0012 大阪市西区立売堀2丁目1番2号 電話06（6543）2553

城口庸平

株式会社 大阪城口研究所　代表取締役会長

〒530-0017　大阪市北区角田町2番15号　電話06（6372）7151代

上西圭治

株式会社　大気社　相談役

〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18 住友中之島ビル
電話06（6448）3603

久米宏和

社団法人大阪建設業協会　専務理事

〒540-0031　大阪市中央区北浜東1番30号　電話06（6941）4821
URL http://www. o-wave. or. jp/

代表取締役会長 **徳岡昌克**
代表取締役社長 **徳岡浩二**

株式会社　徳岡昌克建築設計事務所
MASAKATSU TOKUOKA ARCHITECTS

〒530-0047　大阪市北区西天満6丁目3番11-205号
〒169-0072　東京都新宿区大久保1丁目9番21-302号
〒661-0965　尼崎市次屋3丁目6番60号
〒520-0501　滋賀県滋賀郡志賀町北小松1157番地
〒812-0007　福岡市博多区東比恵3丁目25番5号
TEL 06 (6499) 0701
FAX 06 (6499) 2223
E-mail：tokuokak@osk4.3web.ne.jp
http：//www2.osk.3web.ne.jp/~tokuokak/

植野知雄

株式会社　寿建築積算事務所　代表取締役

〒542-0083　大阪市中央区東心斎橋1丁目16-29　つるのすビル
電話06（6244）1561代

取締役会長 **橋本正章**
取締役社長 **此谷浩**

株式会社　小西設計

〒550-0012 大阪市西区立売堀1丁目12－16　電話06（6532）4051

内藤正克

株式会社　内藤建築設計事務所　相談役会長

〒675-1379 兵庫県小野市上本町240 小野ビル　電話0794（62）4757代
〒675-1362 自宅・兵庫県小野市久保木町1063　電話0794（62）4668



「暑中見舞い欄」撮影：上田セキ子

（50音順）

原　田　明　治

財団法人　大阪住宅センター　理事長

〒542-0081 大阪市中央区南船場4丁目4番3号
御堂筋アーバンライフビル4F
電話06（6253）0071

松　原　満佐子

有限会社　柳　々　堂　　代表取締役

〒550-0003 大阪市西区京町堀1-12-3　　電話06（6443）0167～8
FAX 06（6443）1826

村　石　　全

株式会社クトクコーポレーション
ミユキ建設株式会社　　代表取締役社長

〒556-0021 大阪市浪速区幸町2丁目5番3号　電話06（6568）3671
〒596-0011 工場・岸和田市木材町9番地の3 電話0724（37）2524
〒649-7167 工場・和歌山県伊都郡かつらぎ町移430番地
電話0736（22）7880

福　谷　　剛

株式会社 ゼネラルプリンティング　代表取締役社長

〒550-0013 大阪市西区新町1丁目34-20　　電話06（6531）6001
〒666-0129 川西市緑台1丁目8－7　　電話0727（93）0409

三　栖　邦　博

日　建　設　計　　取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4丁目6番2号　電話06（6203）2361

和　中　　勝

株式会社　和　中　商　店　取締役会長

〒531-0072 大阪市北区豊崎5丁目8番11号
電話06（6371）0731～5
〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町11-5　　電話03（3464）9723
〒453-0804 名古屋市中村区黄金通3丁目34番地 電話052（481）7338
〒662-0836 自宅・西宮市大畑町10-22　　電話0798（67）0386

真　塚　達　夫

株式会社　東畑建築事務所　取締役社長

〒541-0044 大阪市中央区伏見町４－４－10
電話06（6202）0391

薬　袋　公　明

日　建　設　計　　相談役 名誉会長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4丁目6番2号 電話06（6203）2361

数　井　利　美

株式会社　西村建築事務所 取締役社長

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-8 楠六パレスビル
電話078（521）0205～0207
〒654-0103 自宅・神戸市須磨区白川台2丁目39－13
電話078（792）5862



暑中お見舞申し上げます

平成13年盛夏

設計事務所有志

株式会社 伊藤建築設計事務所

代表取締役会長　織　田　愈　史
代表取締役社長　森　口　雅　文

本　　社　〒460-0003 名古屋市中区錦二丁目2番13号（名古屋センタービル）電話〈052〉222-8611
東京事務所　〒101-0021 東京都千代田区外神田三丁目5番12号（聖公会神田ビル）電話〈03〉5294-6211

URABESEKKEI 株式会社 浦辺設計

URBAN DESIGN & ARCHITECTURE FOR BEAUTIFUL ENVIRONMENT

代表取締役　松　村　慶　三

大阪市北区梅田1丁目12番39号・新阪急ビル　〒530-0001　電話 06 (6341) 1680
岡山事務所　岡山市問屋町26－103　〒700-0977　電話 086 (245) 0090

株式会社 瀬戸本淳建築研究室

代表取締役　瀬　戸　本　淳

〒650-0024 神戸市中央区海岸通1丁目1－1神戸郵船ビル　TEL078-333-0138

株式会社 創美設計

代表取締役　中　原　英　雄

大阪市北区南森町1丁目2番25号 南森町iSビル 〒530-0054 TEL.(06)6312-3001代表

株式会社 大建設計

代表取締役社長　小　林　正　春
常務取締役 大阪事務所長　島　幸一郎

大阪市西区京町堀1-13-20　電話06(6449)6800(代表)
東京·名古屋·福岡·札幌·仙台·横浜·長野·京都·広島·北九州

株式会社　東畑建築事務所

取締役会長　市　川　　宏
取締役社長　真　塚　達　夫

本社・大阪事務所　〒541-0004　大阪市中央区伏見町4-4-10　Tel (06) 6202-0391
http://www.tohata.co.jp
大阪・東京・名古屋・九州

建築・土木の設計監理
日建設計

取締役社長　三　栖　邦　博

大　　阪	541-8528	大阪市中央区高麗橋4丁目6－2	電話（06）6203-2361
東　　京	112-8565	東京都文京区後楽2丁目1－3	電話（03）3813-3361
名古屋	460-0008	名古屋市中区栄4丁目15－32	電話（052）261-6131
支所・その他	東北（仙台）・神奈川（横浜）・北陸（富山）・神戸・広島・九州（福岡） シンガポール・上海・台北・ソウル・クアラルンプール		

コストコンサルタント　建築積算・概算・VE　建築積算システム開発
NISSEKI SURVEY
株式会社 日積サーベイ

代表取締役　生　島　宣　幸
本　　社　〒540-0012 大阪市中央区谷町3丁目1番9号 MG大手前ビル
TEL 06-6944-2755　FAX 06-6944-2390
東京事務所　〒105-0001 東京都港区虎ノ門2丁目6番9号 NH虎ノ門ビル
TEL 03-5157-5697　FAX 03-5157-5698
http://www.nisseki-survey.co.jp

株式会社 安井建築設計事務所

代表取締役社長　佐　野　吉　彦

本　　社　〒540－0034　大阪市中央区島町2－4－7　☎（06）6943-1371（代表）
支　　社　大阪・東京・名古屋・神戸・広島・福岡



暑中お見舞申し上げます

平成13年盛夏

建設業有志

人・都市・自然のシンフォニー

Asanuma

株式会社 浅沼組

取締役社長　浅沼健一

本社・大阪本店　大阪市天王寺区東高津町12番6号　電話06(6768)5222
東京本店　東京都新宿区荒木町5番地　電話03(5269)3111
名古屋支店　名古屋市中村区名駅南三丁目3番44号　電話052(571)5571
支店　北海道・東北・横浜・神戸・広島・九州

OBAYASHI

株式会社 大林組

取締役会長　大林芳郎
取締役社長　向笠慎二

東京本社　東京都港区港南2－15－2　電話 03(5769)1111
本店　大阪市中央区北浜東4－33　電話 06(6946)4400
支店　札幌・東北・横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州

株式会社 奥村組

取締役社長　奥村正太郎

本社　〒545-8555 大阪市阿倍野区松崎町二丁目2番2号　電話 大阪(06)6621-1101(代表)
東京本社　〒108-8381 東京都港区芝五丁目6番1号　電話 東京(03)3454-8111(代表)

100年をつくる会社

鹿島

KAJIMA CORPORATION

代表取締役社長　梅田貞夫
専務取締役関西支店長　井保武寿

本社　東京都港区元赤坂 1－2－7　電話 03(3404)3311(大代)
関西支店　大阪市西区阿波座 1－3－15　電話 06(6536)3311(大代)

公成建設

代表取締役社長　絹川治

本社　〒600-8322　京都市下京区五条通西洞院西入　☎075-365-8300
大阪支店　〒531-0072　大阪市北区豊崎2丁目4番3号　☎06-6375-1121
名古屋営業所　〒453-0023　名古屋市中村区若宮町3丁目48　☎052-471-1223

人がつくる、人の場所。

SHIMIZU CORPORATION

清水建設

取締役社長　野村哲也
専務執行役員関西事業本部長　増島修二

本　　社　東京都港区芝浦１－２－３　電話 03(5441)1111
関西事業本部　大阪市中央区本町３－５－７　電話 06(6263)2800

大地への愛　人間への愛

錢高組

社長 錢高一善

本　　社　大阪市西区西本町2丁目2番11号
なにわ筋ツインズ　ウエスト
大阪（06）6531－6431
東京本社　東京都千代田区一番町31番地
東京（03）3265－4611
支社・支店　大阪・東京・北海道・東北・北関東・千葉
横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国
九州
URL http : // www. zenitaka .co. jp

TAISEI

大成建設株式会社

社長　葉山莞児
常務 関西支店長　氏原完典

本　　社　東京都新宿区西新宿1丁目25番1号 新宿センタービル　TEL03(3348)1111大代表
関西支店　大阪市中央区南船場1丁目14番10号　TEL06(6265)4504
支　　店　東京・名古屋・九州・札幌・東北・広島・横浜・北信越・四国・千葉・関東・神戸

株式会社 竹中工務店

取締役社長　竹中統一

〒541-0053　大阪市中央区本町4丁目1－13　電話 大阪 (6252) 1201番(代表)

戸田建設株式会社

代表取締役社長　戸田守二
取締役大阪支店長　浜辺鶴志

本　　社　〒104-8388　東京都中央区京橋1丁目7番1号　TEL 東京03(3562)6111
大阪支店　〒550-0005　大阪市西区西本町1丁目13番47号　TEL 大阪06(6531)6095
支　　店　東京・千葉・関東・横浜・北陸・神戸・名古屋・札幌・東北・広島・四国・九州

不動建設株式会社

取締役社長　福田誠

大阪本社　大阪市中央区平野町4丁目2番16号　電話０６（６２０１）９２０３番
東京本社　東京都台東区台東1丁目2番1号　電話０３（３８３７）６００９番
支　　店　北海道・東北・千葉・横浜・北関東・名古屋・神戸・広島・四国・南四国・九州・北九州

FUJKI

株式会社 藤木工務店

取締役社長 大森 周

本 社 〒540-0028 大阪市中央区常盤町1-3-8 ☎06-6966-0400(代)
東京本社 〒160-0008 東京都新宿区三栄町23-4 ☎03-3357-1600(代)
本支店 大阪・東京・横浜・京都・倉敷・四国・福岡

豊國建設株式会社

代表取締役会長 松丸哲也

本 社 〒530-0042 大阪市北区天満橋2丁目3番1号 ☎06(6353)1001(代)
支 店 東京・東北 FAX06(6353)1091
営業所 北上・新井・福井・京都・舞鶴・加古川・益田・福岡



暑中お見舞申し上げます

平成13年盛夏

団体・報道・建材・設備工事有志

社団法人 日本建築協会京都支部

支部長　望月秀祐

〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入 京都建設会館別館 電話075(211)2857·2877

社団法人 日本建築協会中国支部

支部長　古林敏郎

〒730-0042 広島市中区国泰寺町1丁目8－4日興ビル内 TEL 082(244)2111

社団法人 日本建築協会東海支部

支部長　小宮三辰

〒460-0008 名古屋市中区栄4丁目3－26(昭和ビル5階) 電話 052(261)1451

社団法人 日本建築協会和歌山支部

支部長　東野信義

〒640-8045 和歌山市卜半町38番地 建築士会館内 電話 073(423)2562

社団法人 日本建築材料協会

会長　柴田藤祐

〒550-0003 大阪市西区京町堀1丁目3番13号辰巳ビル9階 電話06(6443)0345 FAX06(6443)0348
http://www.kenzai.or.jp/

OCT

学校法人　福田学園

大阪工業技術専門学校

建築　インテリア　設備　土木　CAD　機械

〒530-0043 大阪市北区天満1－9－27 ☎06(6352)0091 FAX06(6352)2861
URL http://www.fukuda.ac.jp/ e-mail octinfo@fukuda.ac.jp 0120-0910-19

〈併設校〉大阪リハビリテーション専門学校（理学療法・作業療法・言語聴覚）

建設業界でもっとも信頼読まれている日刊情報紙

創業46年

日刊

株式会社 **建設日報社**

代表取締役社長　重村　一

本　社　〒550-0006 大阪市西区江之子島1－7－3 TEL 06(6444)2405－9
別　館　〒550-0006 大阪市西区江之子島1－6－2 TEL 06(6444)6431－4

会員の親睦と講演 ―――― 入会歓迎!!

社団法人 日本建築協会

建築クラブ

代表 佐野正一

事務局　日本建築協会

〒530-0001 大阪市北区梅田 1-1-3-2100 大阪駅前第３ビル21階
電話 (06) 6348－0635　FAX (06) 6348－0634

AOBA PRINTING CO.,LTD.

D.T.Pシステム・オンデマンドプリンティング

デジタル化によるプリプレスシステムを実現!!



青葉印刷株式会社 ポスター・チラシ・パンフレット・DM・パッケージ・ステッカー・ホームページなど

〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号 Phone.06-6351-5428 FAX.06-6351-5299

■ E-mail info @ aoba.co.jp　■ URL http://www.aoba.co.jp

TAJIMA 株式会社 タジマ

東京営業本部　〒101-8577 東京都千代田区岩本町3－11－13　電話(03)5821-7731　FAX(03)3862-5908
大阪営業所　〒550-0003 大阪市西区京町堀 1－10－5　電話(06)6441-5951　FAX(06)6444-2596

日本データネット株式会社

代表取締役社長　西井幾雄
代表取締役副社長　松村信人

本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-1-10　TEL.06-6352-7502　FAX.06-6355-2714
URL http://www.n-d-n.co.jp

マルエス印 ▲ ルーフィング ▲ シングル ▲ メルタン21(トーチ工法)

日新工業株式会社 大阪支店

大阪支店長　佐々木通博

本社営業所　東京都足立区千住東 2－23－4　☎東京(3882)2424 (代)
大阪支店　大阪市西区新町1丁目12番22号　☎大阪(6533)3191大代表
出張所　名古屋・広島・福岡・札幌・山形　工場／東京・埼玉・山形

日本アスファルト防水工業 協同組合 関西支部

支部長　棚田肇

大阪市西区新町1丁目12番22号　日新工業株式会社大阪支店内
電話（6533）３１９１大代表

山本窯業化工株式会社

YAMAMOTO YOGYO

代表取締役社長　山本泰通

本社　〒564-0051 大阪府吹田市豊津町41-20　TEL(06)6338-8601　FAX(06)6338-8606
大阪営業部　〒564-0051 大阪府吹田市豊津町 8 - 7　TEL(06)6338-8701　FAX(06)6384-0557
支店・営業所　東京・北関東・名古屋・静岡・広島・福岡・仙台／福崎工場

ITEMS
●建物用ドアハンドル
●レバーハンドル
●ケアシステムーハンドバー
●クロセット
●ドアストップーエッセ
●フロアシステム
●消火器収納ケースーアルジャン
●サインシステムーピクト
●都市景観ーヒューランドスケープ
●キャスタル+メタルアート
●アーキパーツ
ISO 9001



建設環境金属製品の
UNION 株式会社ユニオン http://www.artunion.co.jp/
UNION CORPORATION

代表取締役　社長　立野純三

■本社　大阪市西区南堀江2-13-22 〒550-0015
■大阪支店　大阪市西区南堀江2-13-22 〒550-0015　℡06(6532)3731　℡06(6533)2293
■大阪ショールーム　大阪市西区南堀江2-13-22 〒550-0015　℡06(6532)8920　℡06(6533)0224
■東京支店　東京都江東区白河2-9-5　〒135-0021　℡03(3630)2811　℡03(3630)2816
■東京ショールーム　東京都港区虎ノ門2-3-22 〒105-0001　℡03(3506)1717　℡03(3506)1718
■名古屋営業所・ショールーム　名古屋市中川区舟戸町3-20 〒454-0805　℡052(363)5221　℡052(363)5255

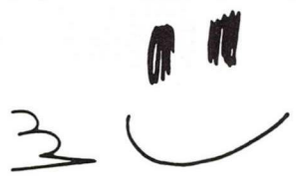


空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03—3344—1851(大代)　大阪本社☎06—6448—3603(代)
大阪支社　☎06—6448—5851(代)　名古屋支店　☎052—211—1535(代)　中国支店　☎082—247—5541
九州支店　☎092—431—2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営 業 所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出 張 所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

より快適な水環境をめざして
給排水衛生設備，冷暖房設備，消火設備の設計，施工

株式会社 西原衛生工業所 大阪本店

大阪本店　〒531-0071 大阪市北区中津六丁目8番4号
TEL 06-6458-3628(代表)
本　　社　〒108-0023 東京都港区芝浦三丁目6番18号
TEL 03-3452-7441(代)
支　　店　札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・九州

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　宅　清光
常務取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市中央区北浜２－２－21　電話 06(6202)7554
本　　社　東京都千代田区有楽町１－４－１　電話 03(3502)6103
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

人と都市の快適な環境をつくります

営業種目 設計・施工・監理
●電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
●空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
●プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
●情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
●電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電

あらた都市にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。
住友電設株式会社　大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06)6537-3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

空気調和設備
衛生設備 設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町３番５号　電話(6352)1131(代)
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町２－22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

CHOYO

人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。

電気設備設計施工

朝陽電気株式会社

代表取締役　山本貴士

本　　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目 2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

電気設備工事設計施工

東光電気工事株式会社
関　西　支　社

取締役支社長　伊藤義信

大阪市中央区高麗橋４丁目３番７号　電話大阪(6202)0325～9番
本　　社　東京都千代田区西神田１丁目４番５号
支　　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町２丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪 (06) 6768－5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768－1651代表
東京支社　東京都文京区小石川１丁目12番14号(日本生命小石川ビル７階)
〒112-0002　電話 (03) 5689－2351代表

電気設備設計施工

株式会社 三興社

代表取締役社長　上田正雄

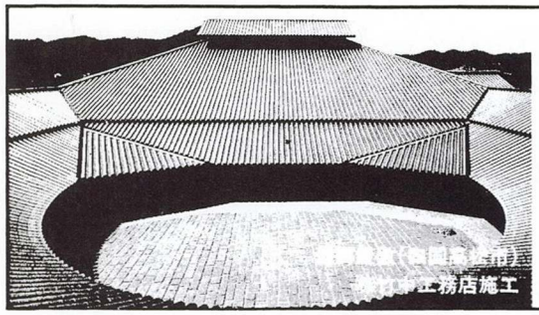
本　　社　大阪市中央区北浜3－6－13（日土地淀屋橋ビル）
電　話　06（6205）3671（代）
支　　店　東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電　話　03（3666）1478（代）
営業所　堺・泉州・泉南・滋賀

OKUJU
スペース クリエイター
建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」
内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー
本 社
大阪市北区西天満5丁目3番7号 〒530—0047
TEL(06)6312—4131 FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・南九州・京都

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒 板・掲示板・家 具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3—4—5
TEL06(6792)5858 FAX06(6792)2810

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本 社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06—6532—0641(代表)
FAX.06—6535—5181
天理営業所 天理市丹波市新町49

●情報処理●企画・制作●編集●画像処理●印刷・製本
人と技術をクリエイティヴで結びます
日本データネット株式会社
本 社 〒530-0043 大阪市北区天満1-1-10 TEL.06-6352-7502 FAX.06-6355-2714
制作部 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19 TEL.06-6352-0943 FAX.06-6355-5533
印刷工場 〒530-0043 大阪市北区天満2-5-15 TEL./FAX.06-6352-1551


〒556-0024
ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎ 六五六一～七四五四
ファックス 六五六一～七四一六

AOBA
Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

デンカCSAファミリー製品
●デンカCSA（膨張性混和材） コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材） 鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント） コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材） 地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材） コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に
電気化学工業株式会社
近畿地区販売店
浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綱野（07727）2—2220
舞鶴（0773）76—0133
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332—6861
TEL 東京（03）3272—8501
小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443—6181
光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252—6000
東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83—2381
TEL 大阪（06）6877—1581

パブリックトイレに求められるのは「清掃性」「節水」「清潔」です。

セフィオンテクトの自動洗浄大便器が、パブリックトイレの「ラクしてキレイ」を実現します。



生活環境企業へ
TOTO

ウォシュレット付
自動洗浄大便器
CFS800+TCF561WS2
¥320,500（税別）

CeFiONtect
セフィオンテクト仕様大便器

セフィオンテクト技術だから、汚れが付きにくく、落ちやすい。掃除もラクラクです。

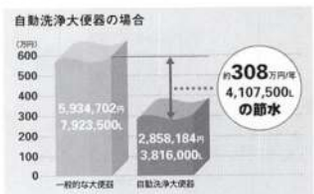


4人家族で2ヶ月間通常使用した後、やわらかいスポンジと洗剤で清掃した時の当社比較。（汚れをわかりやすくするために、薬品を塗布）

新開発の釉薬が生み出すイオンパワーとミクロレベルをはるかに超えたナノテクノロジー（超表面平滑）が、今までにない清潔でお手入れのラクな便器を実現しました。しかもこの効果は通常のお手入れでも半永久的に持続します。また、便器はかまを全周に回した、掃除のしやすいすっきりデザインも採用しています。

節水機能と自動洗浄で、高い節水効果とともに、ノンタッチ式の清潔さも実現しています。

使用者の多いパブリックトイレだけに、もっとも気になるのは水の量。自動洗浄大便器はシーケンシャルバルブ方式の採用で、大洗浄8ℓ、小洗浄6ℓを実現。従来形FV便器に比べ、約52%もの大節水が可能です（当社従来形C48比）。さらに、センサーの感知時間で大小を判断、自動的に適切な水量で洗浄するので、レバーに触れずにすむうえ流し忘れの心配もありません。清掃性、節水、清潔のご要望に応える商品は、大便器のほか小便器・洗面器までラインアップしています。



500人規模（男女比6：4、大便器数50台）のオフィスビルを想定したシミュレーションでは、従来形の便器に比べ、年間の節水量は約411万リットル、水道料金に換算して約308万円の節水効果が得られることになります。



車椅子対応ユニバーサルデザインの品揃え。
車椅子での使用も考慮しています。車椅子の高さ450mmと同一レベルになるように便座を高くした、車椅子対応タイプも用意しています。TOTOのセフィオンテクト商品は使う人も、管理する人にとっても、「ラクしてキレイ」で、省エネ性まで加えたパブリックトイレを、トータルに実現します。

商品の技術的なお問い合わせは、技術相談室へ
ナビダイヤル FAX 0570-01-2111 TEL 0570-01-1010
受付時間／9：00～18：00（土・日・祝日を除く）
受信地：神奈川県茅ヶ崎市・福岡県北九州市

カタログのご請求は、☎ 0120-70-5717
カタログ番号「1582」24時間音声自動受付（年中無休）
さらに詳しい内容については、ホームページ「設計者コーナー」をご覧ください。
http://www.com-et.com/index.htm

きれいに生きる。人も、地球もTOTO クリーンタウン計画 進行中

建物の汚れ
トラブル事例と解決策

「建物の汚れ」編集委員会・編著
〈建築技術選書・特装版〉

企画・(社)日本建築協会

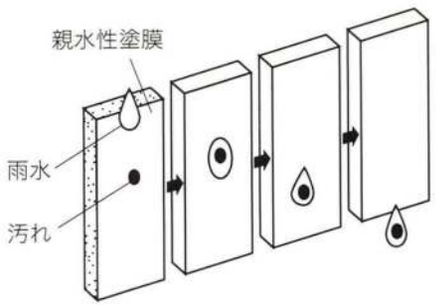
ISBN4-7615-3086-3
B5判・二色刷・168頁
定価　本体3500円＋税

学芸出版社

京都市下京区
木津屋橋通
西洞院東入
〒600-8216

tel 075-343-0811
fax 075-343-0810

建物を美しく保つにはそれなりの**コツ**がある



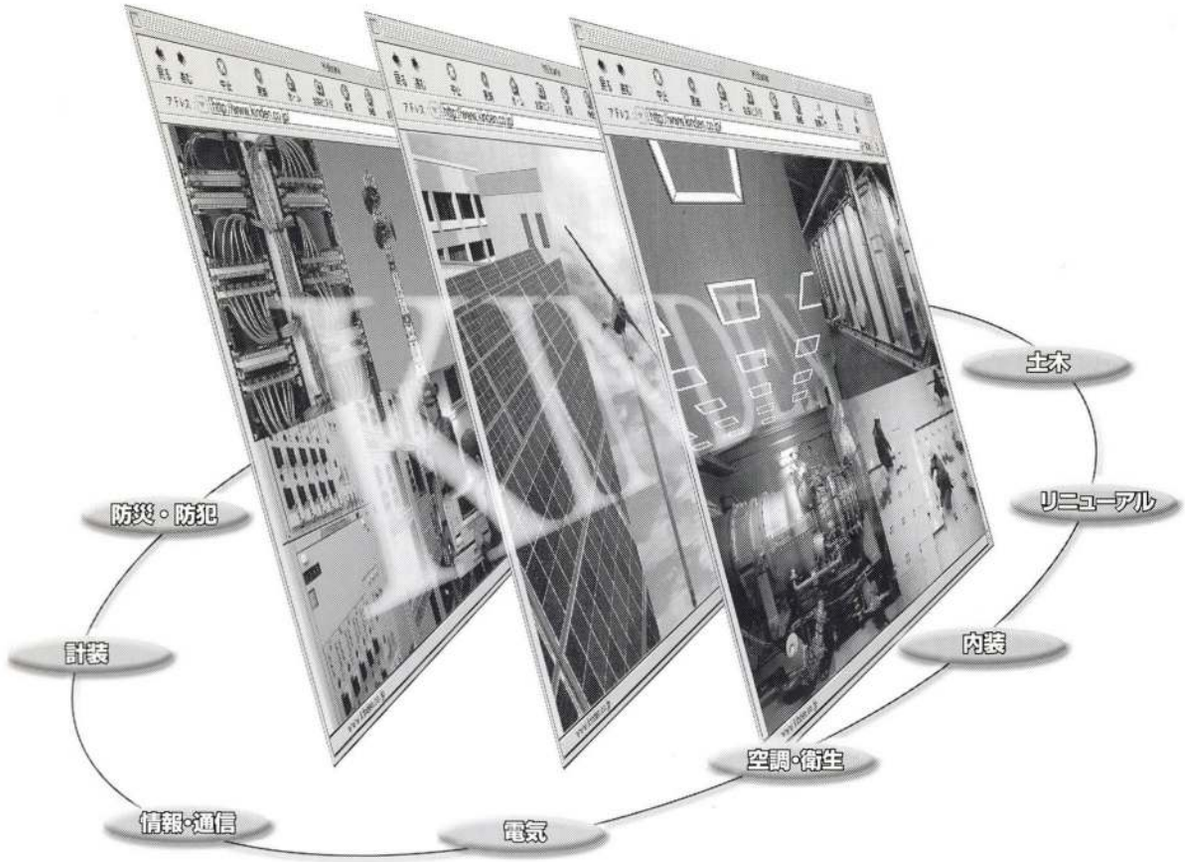
本書59頁より

汚れにくい設計、効果的なメンテナンスのために
トラブルにつながる要因を事例別に整理——
ゼネコン技術者による再発防止策のノウハウを伝授する

Technology Domain

情報 エネルギー 環境

Kinden CORPORATION



きんでんの総合テクノロジーにまずアクセスを!

もっと情報化を・・・快適な環境を・・・エコロジーに配慮した省エネを・・・。こんなときは、迷わずアクセス。

<きんでん>の総合テクノロジーが、最適のエンジニアリングソリューションをご提供いたします。ファシリティのトータル・パートナーとして、地球環境を考え設備やネットワーク構築、メンテナンス・リニューアルまで幅広い領域でお客さまのニーズにお応えする<きんでん>。そこには、情報・エネルギー・環境のフィールドでこれまで培ってきたノウハウが結集されています。

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 TEL.06-6375-6000
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 TEL.03-3447-3151
http://www.kinden.co.jp/
国内事業所180カ所／海外事務所12カ所／国内関係会社18社／海外関係会社11社

きんでん

定価1,200円（●本体1,143円●消費税57円●送料共）正会員の購読料は会費に含めて徴収